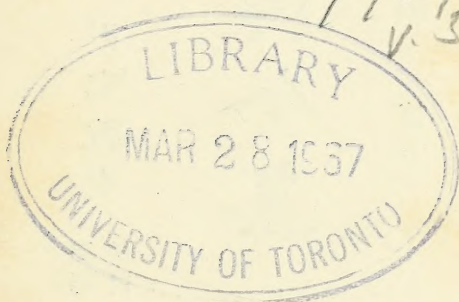
顧問 井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂校訂

日本古典全集

うつほ物語 第五

附録 うつほ物語考
宇都保物語年立

うつほ物語
第五

うつほ物語　第五目次

樓の上　上

一名　高殿

1三條2右3大4臣殿の、かの一條殿の對どもに居給へりし御方々、宮迎へられ給ひて、今は限りなめりとて、思ひ〳〵に渡り給ひにし5なるに、西の一の對に、源宰相の6、

古里に多くの年は住み7分かぬ渡り川には訪はじとやする

と書き付け給へりし8を、殿おはして見付け給9(ひ)て、「心深くをかしう、容貌なども10異難なかりしを、いかでこればかりを11、有所を聞かましかば」と宣へば、内侍の督、「いとよき事なり。宮のおはしける所に、數多さて物し給ひける12女子もなく、さう〴〵しき。處は廣う面白うめでたきに、元のやうにて物し給はゞ、聞え交してあらん」とて、右大將の參り給へるに、「此所に宣ふめる事、なほ御心止め13て尋ね給へ」と聞え給へば、げに永14くと思す。

15かゝる程に、朱雀院16御同胞、17承香殿の女御と聞18へし御19母の齋宮にておはしつる、20女御21薨れ給

校異 1因まことやアリ。2因のアリ。3因のアリ。4因ナシ。5イ中。6因君アリ。7因佗び。8イナシ。9一字国ニヨリテ補フ。10因殊に。11因ばアリ。12イをアリ。13因考異ナシ。14國イら。15國イな。16イのアリ。17イす、イせう。18国え。19イ腹。20因がその御母アリ。21因のアリ。

ひぬれば、上り給はんと1て、2源大將殿宣ふやう、「此宮の御は3く〔○母〕方も離れ給はねば、早う近うて時4に見奉りしに、御容貌淸げにてをかしくおはせしが、折々に聞え交ししに、何かは思し契りしを、俄に下り給はんとせしに、5みかく見付け奉りて、異事思6してなん大將7の侍りし。8げに物せられ9ず10ば、忍びてたまさかにさやうに有りなまし。まだ御年も若うおはすらんかし」「何かは、今もさおはせかし」「宮いかゞ思さむ、忝けれども」「此所には、大將の年の程見給ふに、今にあらねばこそ」と聞え給へば、「いさや。なほす11さめ事なり。今の一條西の對の君は尋ね侍らん」と聞え給ふ。

かくて、石作て12う〔○寺〕の藥師13佛現じ給ふとて、多くの人參うで給ふ。大將14の御物忌し給はんとて、いと忍びて一所、御供に人多くもなくて參り給へり。げにいみじうさ15は〔○騒〕がしき16さで人參うでたり。曉には皆出でぬ。此の御局の傍に17留まりたる人、いとあてはかに故18くしき聲して、上に人二人ばかり、下仕なめり、人にいたうも隱れで、几帳の19はころびより見えたるも目易し。大と20ゝこ〔○德〕の御堂の中より來ため21れば、乳母なるべし、さやうの大人22くしき聲にて、「此の君の御事よ23りむべく祈り給24ふや。親におはする殿に知られ奉り給へと申し給へ25ど、いと心苦しうなむ、思し歎くを見奉る」など言ふ26折、

校異 1因す。2国右。3イは。4イ々。5イ又。6因えで。7因殿。8因考異だ。9因な。10國イ一。11國イき。12イら。13イなど顯現し。14因殿。15国わ。16イま。17國イこゝ。18イく。19イほ。20イナシ。21イるは。22イ〳〵。23イか。24因へ。25イば。26イ逢ふ。

期あるにやあらん、哀れなる事なりや。親子と見ず知ら1ざらむよ、誰ならんと聞2え給ふ程に、八九ばかりなる男3し、髮ゆよ4おろばかりにて、搔練5濃き袿一襲、櫻の直衣のいたうなれほころびたるを著て、白6ふ7美しげに8、あてに美しげなる9、けさう〔○化粧カ、顯證カ〕10のもなく、たゞ11ゝ見に立ち出でて、外のか12〔た〔○方〕13見立ちたり。よう見給へば、宮14君の顏に似たり。聲はいとあてになまめかしう愛敬づきて幼げに物など言ふ。いと美しげに、見給へば見15合16わせ給ひて、扇して招き給へば、打ち笑みて、ふとおはしたり。内にいとあてなる聲にて、「かれ呼び給へ。かの君は何方ぞ。あな見苦し」と言へば、「おはしませ／＼」と言へども肯かず。大將殿に據ゑ給ひて、「母君は此所にか」と宣へば、「おはすめり」。「誰17る御子18と」「知らず」「御19父は誰とか人は聞ゆる」「右の大20將21とかや人は言へど、まだ見え給はず。呼ぶなり。參うでなむ」とて立ち給ふ。怪しき事かな、「西の對の君22をこそ見有りしを、たゞ一目23得ずて、繼母君なんかなしうして取り籠めてし」と宣ひしにやあらん24と、哀れにもあべきかな、それにやあらん、な往氣色見むと思して、肩付し寄せて、

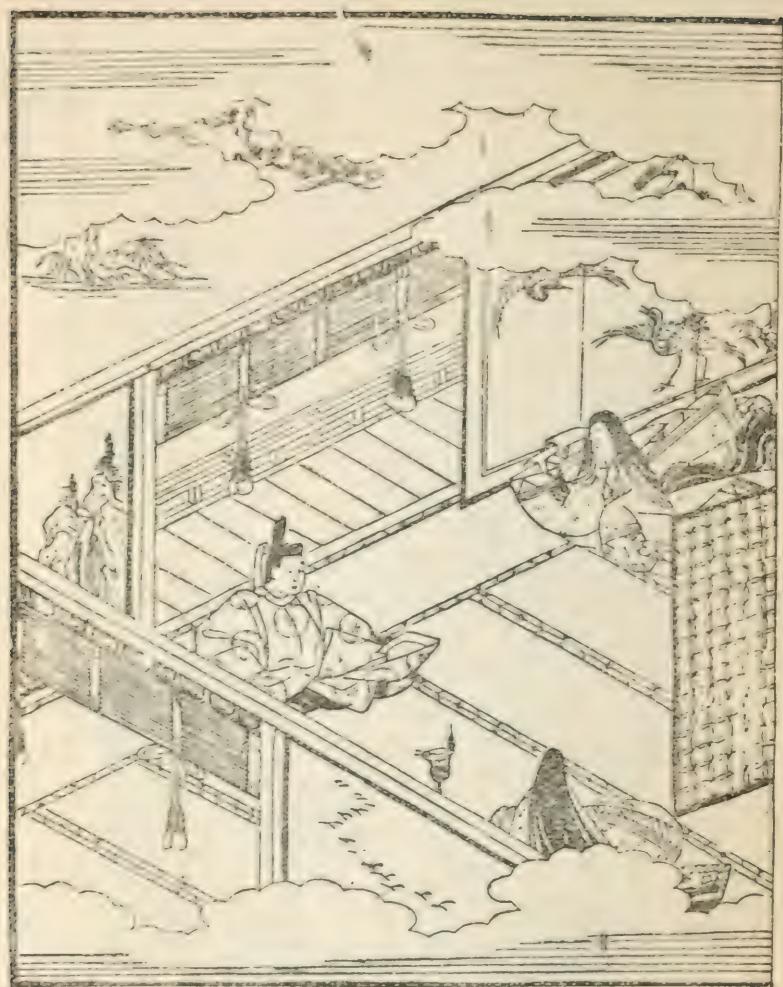
「瀧の川何れの瀨にか流れしと尋ね侘びぬる人を見しかな

【校異】1 國イナシ。2 國き。3 イ子、國子の。4 國ほ。5 國のアリ。6 イう。7 四字異ナシ。8 國てアリ。9 國がアリ。10 國ナシ。11 イく、國だ。12 一字イニヨリテ補フ。13 國に。14 國のアリ。15 國イナシ。16 イは。17 イが。18 イぞ。19 國父。20 國殿。21 國イは。22 國に。23 國見。24 國ナシ。

おはしま1せ給2(へ)や。まめやかには、いかでか3受け給ひにしがな。しるべはいとよう此所に」と書き給ひて、4際に5力使6い給ふ童して奉り給ふとて、「此の御返賜7ふ8てなん若君を」と聞え給ふ。取り入れさせて見給へば、大将の御手な9めり。いといみじう恥かしう、いかに見給ふらんと10覚え給へど、佛の御驗(しるし)もあらんと嬉しう思す。白き色紙に、「いと覺束なう思11ひ給へ12るなれど、

渡り川誰か尋ねん浮き沈みき13しては泡となりかへるとも

え覺えずぞ侍ると14も」書き給へり。思ひ當てに、かの見給ひし手よりは、いとなまめかしうあてに書きたれど、それなめり、げにまがへる心かなと思す。立ち返り、「心憂く、もて離れては思されじものを。今よりは親などこそ頼み聞えさせんと思15ふ給16くら17なれ。いとまめやかに、年頃いかで物せさせ給ふらんと歎き聞え給ひて、思ひの外(ほか)ならぬ18御19樣(さま)に一物せさせ給はゞ、御迎へも如何でか20などなむ聞え21たま22ひ23と24り、心細く25て思26ふ給ふに、いと嬉しく見奉るも、いと頼もしくなん覚え侍27る。殿をば、忝けれど、さる方に思ひ聞28え給ひて、心安く思さば、取り分きてとなん君には語29くひ聞えさする」と聞え給へり。小君には、「まろが弟(おとうと)におはしけれど、子のやう30思ひ聞えん」など、いとよ31う語らひ聞え給ふ。い

校異　1因さアリ。2一字イニヨリテ補フ。3以下四字因承り、二字因考異承り。4イ上(うへ)。5イ近う、因考異近く。6イひ。7因う。8イとアリ。9因ナシ。10因思ひ。11因う。12イらる、國イふな。13イえ。14イナシ。15因う。16イへ。17イる。18イナシ。19國イさよ。20イなアリ。21異給。22國ふアリ。23イた。24因る。25因ナシ。26国ひ。27國イり。28国え。29国ら。30イにアリ。31國く。

と思ふやうに、めでたき樣にてから宣へば、見ならひ給はぬ幼き心1地に2は、いと嬉しく3て、「まろも思ひ聞え4ぬ」など聞5へ給ふに、「おはせ」とあれば、6入り給ひぬ。御乳母など限りなく喜ばしう思ふ。日暮れて、屛風のもとにて對7面し給へり。いとあてに、けはひなども、8式部卿の君よりも心にくく耻かしげに物し給へり。院の女御の御9聲に覺え給へり。若君の御事も、おいらかに宣ふ樣、恥かしげなり。「今必ず御迎へ侍りなん。しか〴〵なん常に聞え給ふ」と宣へば、「何か。自らは10常11 12かたりろひ13する人にて、侍らんも見苦し14。15心苦しう見給へる人は、かの御心は頼もしげなく覺え給ふを、げに御心16留めさせ給はんこそは頼もしう侍17らめ」大將、「18いかゞ」など聞え給ひて、「やがて率て奉らん」と宣へど、「今先づ、さる人など聞え給はんに、げにと思し出づる事侍らばこそ」と宣ふ。又の日も呼び奉り給ひて、御菓物など參り給19へど、遊をのみし給ふ。大將の詩20誦じ給へば、聲いとをかしうて諸共に誦し給へば、「いと美しう。誰21に敎へ奉りし22は」「母君」と聞え給へば、をかしかりけりと思す。三日果てぬれば、出で給ひなんとす。「何處より參り23來べき」と聞え給へば、「言ひ知らぬ山里のやうになり24たる侍り。御覽ぜむにもいと怪しげになん侍る」と聞え給ふ。同じ程に出で給ふ。25御君26の御供に殊に人もなし。御迎へに參

校異 1 因ナシ。2 イナシ、因も。3 國イも。4 イむ。5 国え。6 國イ出でカ。7 因面。8 國イ刑。9 因上。10 因今。11 因はアリ。12 イかかづろ、因隱ろ、因考異かく煩ら、(同)かゝづら、(同)語ら。13 因た、因考異侍。14 イうアリ。15 四字國イナシ。16 國をアリ。17 國イるめり。18 國はかく。19 イへて、国ひて。20 因誦し。21 イか。22 イナシ、国ぞ。23 因考異候ふ。24 因にアリ。25 イナシ、国此の。26 イナシ。

り給へるさるべき人睦まじき人を、「參れ」とて添へ奉り給1ひ、西の大宮なりけり。一2丁なれど、3いみじう荒れていとかすかなり。侍4も、か5えなんと聞6え給ひて、限りなく7喜び給8ふ。人どもに菓物9肴など請げにして出だし給へり。

大將は、やがて殿に參り給ひて、「物忌し侍10らんとて、石作11に籠りて侍りつるに、しか此の人なむ、いと美し12げにてこそおはしけれ。はや今日明日にても、迎へ率らせ給へ。東の一の對の南かけてこそはよく侍らめ」など聞え給へば、「いさや、心などの思ふやうによくもあらずば、13御爲めにも14面目なくこそは。左の大臣の、くさ〔〇供者カ〕のやうにて、ゆ15うくくと引き連れて歩き給ふに、一人なれど、彼16を17〔〇押し伏すばかりに物し給ふこそ、世18中の人もなかくく辛しと思ひたるを、なまよろしくて有19りつき」と宣へば、20大將、督の大殿21も22越え給23ふ。「すべて御心狹く思ほせばなりけり。たとひ人の同胞、なま悪くても24侍らんか25うに、それ26につけてや見えの劣らん。思ふやうに物し給はずとも、それにつけて27こそ、いとゞかの聞えたる樣は見聞え給28はめ。いと心憂き御物言なりや。はや迎へ奉り給へ」と聞え給へば、「29いざさ早、ともかくも」と聞え給ふ。大將、「今朝の御送りに人率りつるに、かの住み給ふなる所は、

校異 1イふ。2西町ニ 3西いとアリ。4西君アリ。5イく。6西き。7國てアリ。8西ひ。9西ナシ。10國イる。11西寺アリ。12イう。13西御。14西面。15西ら。16以下四字イに劣らじと、西考異に劣らむと。17一字イお。18西のアリ。19イるべ。20西考異殿は。21イにアリ。22西聞。23イはす。24二字國イナシ。25イらこ 26國イと。27國イナシ。28イふべかめれ。29イ今は、國今。

いみじう荒れて心細げになん侍るなる。先づ御文なども、只今は物せさせ給ひてやよく侍らん」1との気色いとすが／＼し、「昔、あはれ、源宰相の、行く末やむごとなき人おはすとも、なほこれ心苦しう見2奉らざらむ、心細く物はかなき様にて散り侍らんは、いと悲しかるべくなん3と。容貌は世にも4世にいと多く侍らん。心5ぼへ6悩ませ給はじと言ひしものを。何をかは遣るべからむ」と宣へば、「かく心深かりける御心を、いかにさて頼もしかりける。いでや」とて、「尾張より奉りたりし辛7櫃あら8ば、入物ながらやよ9るらん」とて召し出でたり。片つ方に絹10廿疋綾11十疋、今一つ方には、内侍の督、「此所に物入れむ」と12て宣ひて、掻練の綾の衣一重、薄色の織物の細長13の袴一14重、山吹の綾の三重襲15に16ぞ17着給はんとて、斑絹18と入れ給ふ。御文は、「淺ましう年頃になりにけり。覺束なさ、心より外にてなむ。何處19にも知らせ給はざりけるも道理なれど、萬づ心憂く。大將聞えられければ、哀れなる人も20怪しう。又も見せ知らせ給はざりしかば、いと覺束なきを、今21までのみは。22參で23かは、いとよ24 25し26。心安くて渡り給ひぬべき所なむ侍る。御迎へ、少し心苦しき人の戀しさも、

住み馴れし垣ほ離れて年經れど我が常夏はいつか忘れん

校異 1イ殿。2イ給へざ。3イナシ。4イナシ。5國イには見。6イえアリ、国はえアリ。7因櫃、國くつ。8國イん入れ。9イか。10因廿疋。11因十疋。12イナシ。13因ナシ。14因具。15以下二字因の御衣。16一字イ裳。17因また人に賜。18因など。19因と。20イ親。21因さて。22イさて、國イ來の。23国來ば、因給ひなば。24因ろアリ。25因考異く。26因からむアリ、國やアリ。

さりともとかや。さてこれは、1人の2惑ふめる」何3にかあらん」とて、早くかの御方に心寄せ4させてまつりし、大和介なる人を召し出でて奉り給5ふ。殿人出で遊びて、珍らしがり、御返り、「6い7くらし、よく見給ひつゝは、げに覚束なき程になりにけるにや。

8博士に9なりにし中の常夏を露と起き伏し我ぞ忘れぬ。

心苦しく思すなるは、と10もかくも11持てなさせ給へかし。これはまたや12いたてんと見給へるも、今更にあ13ひなき14方や」と聞え給15へ。御返、督の殿に、「これ見給へ。手こそ、此16の気近く見し人々より17はよく書き18たれ。見所ある19ま20にをかしく21ぞ書きたるや」督の殿、「げにいとをかしげなる22」同胞など言ひ睦まじき人もなし。心細きに、心様なども思23ふやうにおはすなめ24り。25さ取り分きて思ひ聞えば、大将をも26心からのやうに27思ひ給ふべし。怪し28く、大人々々しくなられたれども、先づはかなき事も己と言ひ合はするに、亡くなりたらん世に、さう29ぐ/\しと思ひ惑はんもいと哀なり」と殿にも聞え給へば、「ゆゆしき事はうたてあり。大将30の相思ひ、方に後安く思ひ給はんには、いと31よろしき心様ぞ。哀、宮の君

校異 1イたれアリ、図考異只今アリ、國イたてアリ。2イ物し給ふ、國物し侍る。3イナシ。4イに。5イひつ。6四字國イナシ。7一字イず。8國諸共。9國聞れ。10國イかた。11イ物、國物せ。12イ傳へて、國傳へ。13狂い。14國に。15イひつ、國ふ。16國れ。17イナシ。18イぬ。19國様、國権。20イきアリ。21國ナシ。22イと取り分きて思ひアリ、國此所にはアリ。23國イひアリ。24國なアリ。25國ナシ。26國はら。27イはアリ。28國う。29イきし。30國ナシ。31イどアリ。

1殊にやんごとなく思ひ聞えしかひなく、物はかなく云2ふかひなけれ」など宣ふ。

【書詞】3かくて東の一の對、大將の御物忘などに時々渡り給ふ所なり。さるべき樣にしつらはせ給4ふ、びやう5こぶ〔〇屏風〕どもなど立てさせ給ふ。

大將6 7明日の夜8とて9おはしたり。木ども前栽などは、數數多有りけれど、げに山里のやう10になり11にけり。對ども、廊など傾き、怪しき樣なり。人の音12もせず。東の方に寄りたる格子の、二間ばかり明けためり。南西の戸より見13つ〔〇入〕れ給へば、中の障子も破れたり。南の14簀より上りて覗き給へば、東の15心よ戸の簾垂上げて、人16物17し召し居たり。母屋の方の柱に、いと18こぐらろき袿の19心ややかなる一襲、薄き縹の綾の20もりわた〔〇盛綿カ〕重ねて著て居たる人の髮、絲を縒り懸けたるやうに艶やか21 22なりげなり。額にかゝれる程、いと美しげなり。鋒やかになまめかしき容貌、内侍の督23御樣躰容貌に覺え24たり。有りし君、かいね25か〔〇搔練〕の26こ27うら透き張り28打ち著給ひて、鶴脛にて、いと小さくをかしげなる琵琶29を搔き抱きて、前に居給へば、いと美しと思30ひ給31うて、髮搔き遣り給32〔ふ〕手つき、いと

【校異】1イこそ。2國ひが。3因此所は。4因ひ。5イう。6因設アリ。7因明。8国とぞ、因ぞ。9国思。10イナン。11イナシ。12因ナシ。13国い。14因隅。15イ妻。16因々アリ。17イナシ。18イ小黑、因濃。19イ艶。20国張。21國ににもアリ、國イにアリ。22以下五字イに、国になまめかしげに、因考異になまめかし。以下二字因に長。23因のアリ。24國ましアリ。25イり。26以下三字国小袿。以下九字因濃きうらぎばかり。27一字國イら。28以下二字イ裏。29因ナシ。30因考異う。31イふ、国ひ。32一字イニヨリテ補フ。

美しげなり。此の作、琵琶を1ふと2なかしこ3らうくじく4をかしく弾き給ひつゝ、君、「今さへ、此の小さき琵琶を弾き給ふは、いと見苦しからむは」と宣へば、「5最前膝に居6く弾き侍らん。たゞ7今偶れに侍り」とて、大きなるを弾き給ふ。いと上手なり。是を弾き給ふを、殿に見せ奉らまほしく覚え給ふ。大将打ち見し9わぶき給へは、驚きて、几帳引き寄せ給ひて、此の君して御待出だし給へ10ば「11仰せ忝し」とて掻き抱きて、「いで、その御琵琶持ておはせよ。只今なむ参り来つる。今は何かは12耻13じさせ給ふらん。やがて参り侍るべき」と聞え給ふ。「御迎へは、明日14となん侍15る16べか17んなる」など聞え給ふ。母君、いと恥かしく疎ましかりけるわざかな、さばかり心18恥かしげにおはす19か人の、いかに見給20ひつらんと思す。御返り21を、「承りぬ。只今自ら聞えさす」とて、母屋の22簾子のもとにて対23面し24給へり。「今は昔にあらんやうも思されでやみにしを、いかに聞えさせ給25へれば、近き程になど26よて宣ふらんと思ひ侍27るは、聞えさせん方なく、なほも何とも思28ひ給へ29らで、明暮も殊に見給ひ入30(れ)ざりしを、呆れ〳〵しくなられたる人、残り少なく覚え給ふ、更にいと歎かしき事に宣へるを、今は後安くた31む」と32そ聞え

〔校異〕1イナシ。国い。2四字玄考異ナシ。3玄考異こ。4四字イナシ。5イさば御(■■)。6イて。7国はアリ。8イたはふ。9国は。10玄考異り。11国おは。12以下三字国計ら。13一字イぢ。14国ナシ。15以下三字国イりつら。16以下五字国ナシ。17以下二字国め。18玄考異ばへアリ。19イる。20イへ。21国ナシ、国は。22国簾。23国面。24三字イナシ。25以下三字イふ。26イまで、国こそ、国よく。27国れは。28国ふ、玄考異う。29イ侍アリ。30一字イニヨリテ補フ。31イらアリ。32国ナシ。

給へば、「それこそはいと道理に侍るなれ。此所には、殊に聞ゆる事も侍らず。まことに年頃覺束なかり聞え給ひつ1るか、只2か3はに物し給4ふも、いと心細くた5く一人物せらるれば、數多物せさせ給ひける御中に、何とも思されずとも、取り分きて思ひ聞えさせん。睦まじく思さるべき者なり。今近くても見給ひてん。古めかしく、いと心安く、御6同胞などのやうに思されんに、いとよくなん7侍るべき」など聞え給へば、「いと嬉しき事にも8(侍るべきを、近くては御心劣9るやと思10ふ給11ふる12うちに、)こ13し(〇此所)こにもいと心苦しくて物し給へば、小さき人は添14いたる人も侍りたん。15餘所ながらも、今は稍み16(き)こ(〇聞)えさせ17なんと聞えさせ給へ」など宣ふ樣の、いとめでた18ふ、限りなき人の御けはひにも通ひたれば、いとまめやかなる御心、少し19ひる事も聞えつべけれど20、有るまじく便なき事と思ひ返し給ひつ、さも聞え給はず。「いとなき事。時々は渡らせ給ふとも、此度はいかでか渡らせ給はざらん」「今それは此の頃過ぐしてなむ」と聞え給へば、「いと惡しき御事に侍21なり。かの御本意なく侍らん」など聞え給ひ22ておはしぬ。

夕つけて、衣箱一具に、唐綾の瞿麥の袿、23濃き綟の袿、濃紫の織物の細長、三24え(〇重)襲の袴25の一

校異 1イ仲忠、国る仲忠。2以下二字国ばかり。3一字イり。二字因母。4イへど。5イだ。6イ母。7國イし。8廿三字イニヨリテ補フ。9国りも。10因う。11国へ。12二字国ナシ。13イこ。14イひ。15國こ。16一字国ニヨリテ補フ。17イんなんど。18因く、因考異く。19イ僻言、国延ぶる言。20因考異ホアリ。21イるアリ。22四字國イナシ。23五字因ナシ。24イへ。25イナシ。

1軍には、若君の御料に、いと濃き袿一襲、薄き蘇枋の綾の袿、櫻の織物の直衣、躑躅の織物の指貫など入れ給ふ。女の壽の襲に、赤き薄様に、

人知れぬ結の神をしるべにていかゞすべ2きと歎く下紐

とて3い文もなし。いと小さき4小舍人童「御返賜はらん」と云ふ。「いと恥かしく、怪しき有樣を6見ー7許り給ふ事」8と宣ふ程に、これ9を見付けて、淺ましく覺え給へば、御返りも聞え給はず。祖君、「いとあはれに忝く、何事も思すまじく、萬づに此の御心のかうもてなし給ふにこそあれ。なほしろしばかり10の宣へ」と切に宣へば、たゞかく、

「打解けてうらもなた11うこそ頼みけれ思ひの外に見ゆる下紐

樣々にも見給12つられて」など聞え給へ13ば、童に躑躅の小袿、若君の御今樣色の袿一重添へてかづけ給へるに、「御返の限り」とて取ら14れねば、15歩み去りて、御前の村薄の上に打ち懸けて走り16入りぬ。「いと戯れて、口惜しき童かな」と言ふ。御返參らすとて、「しかぐ/\なむして、17(逃げて參りつる」と申さすれ18(ば)、「19いとをかしくしたり」と仰せられて、御袙一襲賜はす。御文20賜ひて、「さればこそ、悔しう、

【校異】1一字イつ、三字裝具。2國く。3イ御。4國ナシ。5イにアリ。6國イおは。7國イはアリ。8國イしを。9イナシ。10イナシ、國は。11國く。12イへ。13國り。14イナシ。15國強ひて取らすればアリ。16國出で。17一字イニヨリテ補フ。18一字イニヨリテ補フ。19國イナシ。20國見給。

何1どせんに、世の常もこそ思ひ給へ、かゝる氣色を見えぬらむ」と恥かしく覺え給ふ。
又の日、殿に參り給ひて、「昨日彼所に參うでて侍りき。いかゞ物し給ふ、見給はんとて聞えしかば、自らはおはすまじげにこそ宣ふなりしか。度々さら2 3ば便なかるべきよし聞えしかば、しか〴〵宣ひしを、おはしましてなむよく侍るべき」と申し給へば、「怪しき事かな。などかさはあらん。恐ろしげに頭もなりにた4えん。容貌もめでたかりしが、哀今まで物し給ひける。琵琶は今の世にさばかり彈きたる人はあらじ5はや」と宣へば、「そよや。若君こそしか〴〵物し給ひしか。6(道)理にこそ侍7(る)なれ」殿「をかしき事かな。ら8こた9くして敎へ給へるなめ10り。母君もいとよく彈きき」と宣ふ。督の11殿、「12心暮れ13さらば早うおはして、なほ一度に渡し奉り給へ。いでや、怪しく心にくき人樣々に14あつ15(かひ)給ひける程よりは、艷かしくをかしくこそ16思はせ17ぬ。左の大臣はいと愛敬づき、をかしくこそ見え給ふめれ」殿「いでや、その大臣こそ日に付きて覺え給ふらん、18浪の上めでたく今めかしくおはしますを見奉り給ひて後こそ、己をも思ひおとして、かく恥の限り19賜20ひ出だせ」と宣へば、「例の事よ。さりとて病したる道理なれば。口塞げ」とて、薫物などよく21見せ給ひて遣り奉らせ給ふ。

校異 1イに。2因ずアリ。3国に。4イら。5イを。6一字国ニヨリテ補フ。7一字因ニヨリテ補フ。8イう。9国う。10國イれ。11因大殿。12国日。1イた。14国集め。15二字異ニヨリテ補フ。16イお。17イめ。18国な、身。19イ宣。20イは。21イ寄、国せさ。

御車1に2しておはしたり。昔見給ひしよりもいみじうなりにけり。几帳などはいと清げなり。たゞ入りに入り給へば、3燈よき程にて、母屋に、いとな4やゝかなる錦に、柳の織物の薄き織物重ねて5着て居給へり。若君はいと清げに装6束かして直衣の限り著給へり。御髪は7鬟過ぎ給へり。下りばいと清らなり。燈の下に立ち寄り歩き給ふ。見給へば、大人四五人ばかり、小さく8てをかしげなる童など9なり。いと目易し。昔いとき10をはかな11し人の、いとめでたく12てしつらひ、単取り給ひしを思ひ出で給ふも、いみじう悲しう覚え給ふ。「若君はや」と宣へば、大人13／＼しく突い居給へり。「此の童、その燈取り寄せよ」と宣へば、持て参りたり。見奉り給へば、大将の兒なりし時かくやありけんと、美しげに恥かしき顔の笑み給14は15に、愛敬いとにほひやかなり。女君に、「いと怪しく、又も見せ給はで、引き16具し給17ふてしことそ」など年頃の物語18など聞え給へど、人のや19うにも20恨み聞え給はず、たゞいとおいらかに恥かしう、常に聞え給へば、たゞかく／＼宣ふべき事もな21し。いと哀れに昔思ひ出でられ給ふ。暫し打ち伏し給ひて、「夜更けぬらん。いざ給へ」と聞え給へば、「此所にもや、さらば」「さて参り来つ22るぞかし」と宣へば、「何か、心静かに。かつ／＼さば早う」と聞え給へば、「怪しき事。さらば23何ぞれにか。又24幼き一人をばいかでか」と宣

【校異】1 閥イナシ。2 閥ナシ。3 イナシ。4 イよゝ、閥イよや。5 閥イナシ。6 閥束。7 閥鬢。8 イナシ。9 イあ。10 イらやか、閥よらか、閥考異よら。11 イりアリ。12 イナシ。13 閥ナシ。14 イはぬ。15 同はげアリ。16 同ほ。17 閥ひ。18 閥イにアリ。19 閥イと。20 閥イとアリ。21 閥イど。22 閥イから。23 イなでう、閥考異なでふ。24 閥イおきな。

1べりにけり、大臣今めかし2き3古事あらためさせ給へるとて」「何事ぞ」「ざ4らの人なり」など聞え給5へば、殿罷りぬ。

かくて、參り給6へれば、若君の此の殿をば、「父7ぞ」とて、睦まじうまとはし奉り給ふ。8い〔○居〕給へる所にも、いと近うむつれ居給へり。殿をば「殿」と聞え給ひて、9殊にむつれ聞え給はず。小弓射給ふ日、大將10の君達、大殿11の數多參りたり。梨壺の宮の君、此の若君の、いと12けに13裝14束きておはする。人人若君を、「いと美しげにおはするは誰ぞ」と15ら〔○問〕ひ聞ゆれば、「16大將の子少なく、さう〴〵し17くて物したゝめる」と聞え給へば、「かの御子か。いとかし18から19わたまふめり。宮の君はらう〳〵じく、これはな20よめかしく21たはすめる22」などて、呼び奉り給へれば、おはしたり。御髮も中に長23きやうなり。24殿宮25ち「參り給はんには、指貫著てこそ」と宣へ26ど、宮も、「宮の君27 28も29我が宿に30こそ」とて、著せ奉り給はぬなり31。案内も知らぬ人は、「大將の一つ御腹なめり」と聞ゆ。宮笙の笛、宮の君横笛、皆いとめでたく吹き給ふ。「此の君何かし給ふ」と聞え給へば、「琵琶32彈き33給ふ」と宣へば、「いとをかしき事

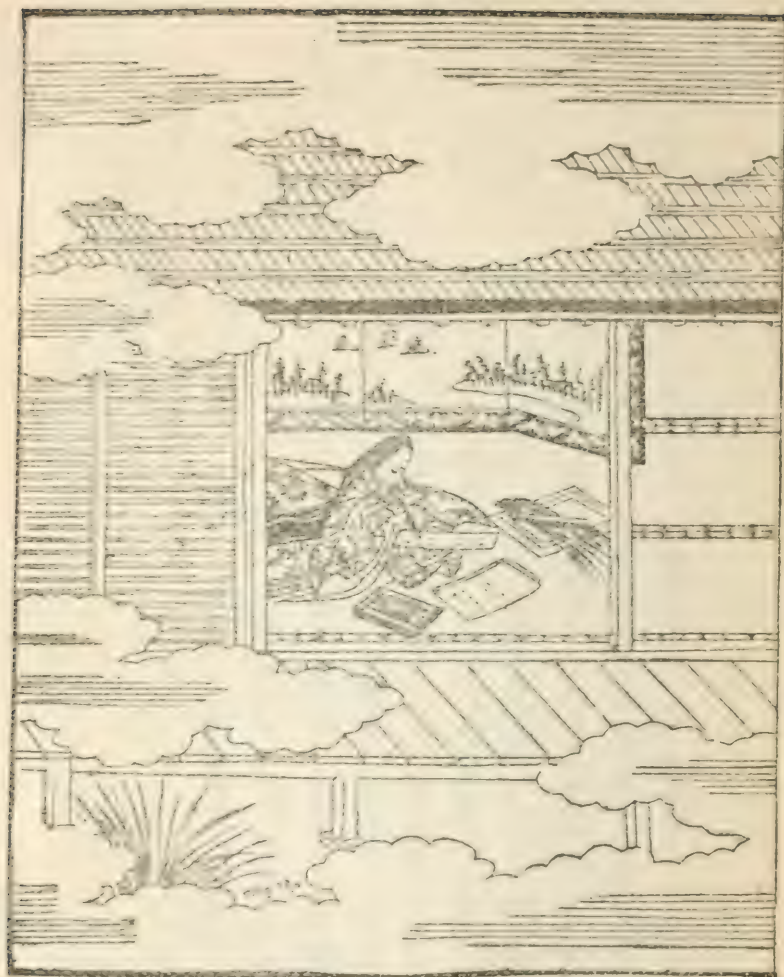
校異 1図ナシ。2図く。3イ古。4図考異さ。5イひて御。6図考異ひつ。7国こそ。8イゐ。9國イここ。10イ殿アリ。11イへ。12イ淸げ。13国しアリ。13図束。15イと。16国大臣。17イナシ。18国こ。19イ渡らせ給、図似給。20イま。21イお。22イはアリ。23イく淸ら。24国大アリ、図大將アリ。25イに。26イば。27国にアリ。28イに、異ぞ。29イかやう、国さやう、図考異がやう。30図考異ぞ。31イけりアリ。32國をアリ。33イをアリ。

かなとて、大殿1 2侍従3中納言の御4か太郎藤5の6中将その御弟四位の少将、大宮の御方に琵琶聞え給ひて、「これ」とて弾かせ奉り給へば、「人に抱かれでは弾き侍らず」と宣へば、「おはせく」とて抱き給7ひて、弾かせ奉り給へば、いとになく面白く弾き給ふ。8文にひき（○引カ、弾カ）合はせて、三所遊び給9へる。人々、「いとめづら10かにをかしき御有様どもなり。内裏などに聞えさせばや。いみじき物の上手は、又も出で給ふべき所なめり」と感じ哀れがり給ふ。大殿も様々に美し11う見給ふ。御遊びの日によ12かめり、13大将も少なき物し給ふに、互に行く末を思ひ後見11るもよかりけりと思す。入り給ひて、一宮の子を人々のをかしと言ひつゝ、憎しきは、大将見付けて15恥かはし、宮など16をば17むつれ遊び給へるめり。我々は18 19子とも思はず。子は誰とも言はで、つきたればこそらうたけれ」と宣へば、「道理に20てあ21んなれ。小さき人はたゞ思ふ人になつるゝものなり。一22同見奉りしかば、宮の御子にて宮も抱き23奉り給へりしに、宮の君、まろもくと有りしを抱き給ひしに、24怨み25上げ26て27たゞまつりしを、小さき心29地に何見30ずに31て出はせしかば、一人32かこしんハ（○匂欄）に眺めてなむおはせし。などか此の君も時々は抱き奉り給

校異 1一宮のアリ。2イ次郎。3国大。4イナシ。5以下四字国宰相。6三字国宰相。7国へば。8国前、源氏。9国ふ、国イひつる。10四字国イナシ。11国イみ。12国イり。13国大殿の御。14イに。15イ侍り。16国なき、実にも。17イ睦び。18以下四字国アリ。19実親。20イこそ。21可ナシ。22国日。23国イて。24イ打ち見。25国イかけ。26イナシ。27イ侍、国立ち給へ。28イナシ。29実喪打ちアリ。30国給て。31国ナシ。32イからう。

はざらん。すべてかゝる御心のあれば1ぞ、2月を3經しかど、物の思ひ出でもなくておはして、いみじき日の限り見しぞかし。涙落ちぬべく、つらき氣色見え給ひしか。大將は宮をも誰をも分かず、樣々にこゝ思ひ聞えたれ。かの伯母君などの見給はゞ心憂4くゝ思5ふ給ひなん。人の歎き6をい〔ひ〕負ひ給はず、あまねく情あり、世に久しくおはせばこそ、己なくとも、大將の7御隨身にも賴もしう8よ9[illegible]か10ね〔〕顏〔容貌〕の、11さ思ひ給12ひつらむに、物しく心も見ゆる13もなし。いとたと14し[illegible]思し給はんやこそ、人はうたて15なむ見奉らめ」など、内々に聞え給ふ事を、かの御方の侍從の君、對の御方の少將の君とは從姉妹どちなれば、往き逢ひて語れば、伯母君も母君も、「嬉しき事」と喜び給ふ。「大將の御16子の有樣容貌よくおはするは、此の17御心ば18いのかうおはすればこそ有りけれ。此の殿の御心は、いでや。心深から19ざらむ人は、人20の云はで思ひたらん心ば21いなどこそ22思ひ知り給はね。23なべてたゞ大將殿を24のみ思ひ聞えたりけり」など宣ふ。

かくて後、梅壺の更衣と聞えし、忍び聞え給ひて、山菅を25つたゝみ26にし27唐の扇、薄樣の中に入れ給ひて、

校異 1國イばアリ。2國イはカ。3國イしアリ。4國し。5國ひ。6イおひ。7イ御。8イな。9國ホアリ。10イほ。11國イき。12イへ。13イおアリ。14イナシ。15國イナシ。16宮心。17國イナシ。18イへ。19國ナシ。20國イ日。21國へ。22國考異はアリ。23國う。24國イこ一。25イ疊、國包。26イ一。27國から。

「羨まし同じ麓の山菅1の分きてぞ人は思ひ重ぬる
思ひ出づる事多く」など宣へば、御返り、
「餘所ながら思ひ重ぬる山菅を一つにつらき2(た)めしとやする

月もたど〳〵しく今は3覺え侍るを、なほ昔の4やうに、近き程にやは物せさせ給はぬ」とて、後に迎へ奉り給ひて、東の二の對の北の廊かけておはす。なか5〳〵宮の御方の人々6より7は安8から9ず10世11中12きなよりのを「古へを思ひ返せば、我が君かゝる御住居をせさせ給はんとや思ひし。13名にもよらずや」など言ふを、督の殿の人々聞きて、14聞ゆれ15ど、「あなかしこ。夢聞き入16か17な。下人はさぞあなる」とて、いと淸らにもてなさせ給へり。殿は、一月を廿五18かは此方19、いま五夜をば宮の御方、此の對などには通ひ給20うて、誰も此方にのみおはするを、督の殿「なほこれなん21いと見苦しく見奉る。今は心靜かに時々は行ひもしてあらむ。宮の思すらん事も有り。これよろし22く聞え給へ」と大將に聞え給へば、「いとよう仰せられたり。爰にかくて我が御儘にておはします。仲忠侍り。今は人と23申24すべきならず、聞えにくきを、宣はせんついでに、申し出でん」と宣ふに、入りおはしたり。いとをかしと見奉25り26見給へり。「人

校異 1イも。2一字国ニヨリテ補フ、イ「た歟」ト記ス。3國思ひ。4イ宿。5図にも。6図ナシ。7国ナシ。8以下三字イらかにおはす。9一字図ぬ。10以下八字イナシ。11図のアリ。12以下六字図かなあはれ、図考異あぢきなう。13イ品。14図まねびアリ。15国ば。16異る。17異人もなし。18イ日。19国にアリ。20イひ。21國イナシ。22イきに。23国かくアリ。24國イし候ふ。25以下五字国る。26以下四字異また聞きし。一字傍ナシ。

人の、あるは世を背き給ふ、所々にて物し給1ふ、なほ取り申すまゝに、日易くかく物せさせ給へるを、いと嬉しく見給2ひつるを、一方にのみおはしますは、いと物しきやうに侍り。此方に十3五4、宮の御方に十5五夜、今十6日を三所におはしまさせん」と聞え給へば、打笑ひ給ひて、「いと怪しく、果は有るまじき事をさへ物せらるゝ。昔若かりし時こそ、さまよひ歩くも日易く、見まほしく思ひ給7へも有り8きけめ。今は身の覺えも花やかならず、腰も痛ければ、え歩くまじ。一所に9また物したる事は10いとをかしう、いかゞ人も思ふらんとてこそあ11れ。あるまじき事なり」と宣へば、内侍の督、「否や。御心さりとて、いかゞなど思はゞこそあらめ。人々もつれ〴〵にながめ給ふらん。さて打通ひ給ひておはせば、よくなむ有るべき。左の大臣は、宮大殿いとうるはしくこそ、十五夜づゝおはしつゝ、子どもいづれともなく思ひかしづき給へ。かくて添ひおはせむからに、かしこくやは有るべき。そが中にも宮の御方は、院の取り分きて思ひ聞12え給ひて、折々も聞かせ給ふらん、いと忝し。對の君などは御心ざまなどもあはれに見え給13へなめり。そればかりには、なほ14此所に15聞えんまゝに、人よりは殊にもてなし給へ。16大將17をも、18たゞ（〇）伯母」宮の泣く〴〵喜び給ふなる、己一人して思ひ聞ゆるも、ゆゝしくのみ覺ゆるに、心憂からん人には、思

校異 1以下三字イへるを。一字異考異へるを。2寄へ。3頭日、頭考異夜。4イ日アリ。5一字イナシ。以下二字頭日。6頭考異夜。7イふ人、頭考異ふ、頭考異はむ。8イナシ。9イナシ。10イまたアリ。11イめアリ。12イえ。13イふ人。14一字イお、二字異をこ。15イはアリ。16イかのアリ。17頭ナシ。18イお。

ひおかれ給ふらんぞ嬉しき。行く末に行き逢ふ事もあるものなりなど切に聞え給へば、1廿八日夜3々は此方に。その外4をば宮の御方5に6宣ふを、「7母は、その程に思ひ〱におはせん」と宣ふ、「更衣の方は、らう〱じく、くせ〱しう物し給ふ。式部卿の君は、心8幼くて、乳母の物言ひ9無禮し。對の君は、10おいらかなれど、心深ければこそ人々の御爲めにも心安けれ。そればかりはけに宣はんに從はん」など宣ふ。かくて、内裏東宮にも、若君見まほしうせさせ給ひて、度々宣へば、己は若小11し率て參らせよとて、12參らせ奉り給ふ。督の殿の御方に13御裝束14はし給15ひ、16つら結ひ給へ17ゐは、今少しをかしげに、めでたくおはす13。率て參り給19ひつれば、内裏東宮も一所におはしまして、「いと美しき人なりけり」と宣はす。有様らうたげにをかし。琵琶召して、「彈け」と宣はす。暫し御答もし給はねば、大將「なほ20仕れ。まだいと幼く侍り。大きなる21人に抱かれてなむ彈き22侍る」23も奏し給24ふ。女25方達數多さし出でゝ見26か。27源氏の中納言、「此の聞きつるはこれか。いと美し28にける人を、今まで見奉らざりける29よ。此の膝にを」とて、抱きて彈かせ30（た）ま（〇給）へば、少しばかり、いとになく彈きてさし置き給ふ。上も宮も、「や

校異　1国十五、因考異十八、因考異二十。2以下三字因考異日をば。3一字イナシ。4イは。5イなどアリ。6イはなどアリ、国などアリ、因考異もなどアリ。7イさば。8因おきな。9國なめり。10國平。11因君。12三字イナシ。13国てアリ。14イナシ。15以下三字イふ、びづら。16国鬟アリ。17因れば。18國るアリ。19因へ。20因仕うまつ。21国はアリ。22國イ出づ。23イと。24因へば。25イナシ、因房。26イる。27三字因源。28イかり。29異に。30一字国ニヨリテ補フ、イ「た歟」ト記セリ。

に出で給へり。見比べ奉らせ給ふに、美しげに、あてに氣高き事の、いと殊の外にもあら1ぬを、子に引き連れて見んぞ面立たしく覺え給ふ。白銀黃金の童の、相撲2取りたる形3を4見給ひて、罷出給ひぬ。督の殿に、「しかぐなん」と聞え給へば、いと嬉しと思す。宮5君は、殿をば「父君」とてむつれ奉り給ふ、大將をば6餘所に見7奉り給ひて、「大將參り給ふめりや」など聞え給ひて、殊8とさし離ち給ふ。9宮は大將をば「10母こそ」11と付け給ひて、いと12ようし奉り給へば、をかしがり美しがり奉り給ふ。

13大貳上り、14さて殿に白銀の透箱二十、15から綾16沈の峯に螺鈿すりたる櫛など奉りたる17る。内侍の督、宮の御方に七つ、我が御方に18も19の、御方々にも二三づゝ配り奉らせ給ふ。殿は20人の御次第に宣へど、「さべき事なれど、人21は心こそ恥かしけれ」とて賜ひつ。かれらの透箱、一つには唐綾五疋、今一つには22沈紫檀の櫛あるを、對の御方に奉らせ給ふとて、督の殿、

思ひやる心をつげの櫛なら23ば覺束な24くは嘆かざらまし

とて奉り給へれ25ば、御返、

「そのかみに古りにし26ものをあらたむるこれこそつげの小櫛とは見れ

校異 1イめし。2國イと持。3國イの。4国得。5因のアリ。6イ見えなく。7國えなく見アリ、國イえなくアリ。8国き、因に。9国小君。10国父。11國は。12國イか。13因かくてアリ。14イき賊、因來。15国唐。16イ沈。17因り。18以下二字因四つ。19国よアリ。20國イへ。21国の。22イ沈。23國イすっ。24因さを、國イしか。25國イナシ。26因事。

「[1]伯母のと思[2]ひ給[3]ひつらるゝ」と聞え給へり。樣々に心にく[4]し、申し交し給ふ。いと忍びて、さべき折には、此の御方には對[5]面し給ひて、互に心深う哀に聞え契り給ふ。

大將は、院內裏作宮[6]殿と、覺束なからぬ間に參り給ふ。又やゝもすれば召され給[7]ふ。こ[8]うち〔○心地〕さへ、世に[9]心靜かなる折なく覺え給ふ。宮に聞え給ふやう、「身に思ふ事侍りし時、かくて侍りては、心の[10]どかに思ひなり侍りしを、大宮生まれ給ひて後は、いよ／＼命も惜しう思ふ事ある[11]まじと思ひ侍りしを、よく思ひ侍[12]りつれば、世の中に物お[13]〔も〕〔○思〕ふにこそなりぬべけれ。身に限りては人に勝りたる心地こそし侍りつれ、宮[14]など宣へば、「大宮など[15]おろかに[16]思したるにこそ侍るめれ。まだ[17]はる[18]きり給ひし時だに、此の琴を見給ひて[19]は、いと彈かまほしうし給ひき。此の年頃は月日もとく過ぎなむ、物の心[20]も知り給はど、[21]靜かにて、さるべからん所を作りて、[22]率て奉りて、習はし奉らんと、夜は目を覺まし、晝はこれを思ひ廻らし侍るに、[23]本意の[24]ごと靜かなるべい事の、難かべいをなん、如何樣にせ[25]まし」と思ひ侍[26]らば、年は七つになり給ふ。今までこれを敎へ奉らぬ事。[27][28]かの大臣は四つ[29]よりこそ彈き給ひけ

國[1]國おい。[2]國う。[3]イへ。[4]イく。[5]國面。[6]國など。[7]國へば。[8]國こ。[9]國イナシ。[10]イ夜。[11]イかこ。[12]國ナシ。[13]一字イニヨリテ補フ。[14]國何をと、國考異何と。[15]イなアリ。[16]イおは。[17]イ遣ひ。[18]國き。[19]國ナシ。[20]國は。[21]イ心アリ。[22]國イい。[23]國本。[24]國イい。[25]國イナシ。[26]イと來年、國る來ん年。[27]國となん歎かしう侍るアリ、國考異となん歎き侍るアリ。[28]以下一字イとか人。四字底書の大殿。[29]イなる。

れ。御禊1の事急ぎ侍りしに、殊にもあらざりけり」2歎き聞え給へば、「げに、身にも思ふ事なり。さしもあらぬ人々にだにこそあれ。世の常ならんは、いとこそかひなかるべけれ。そこにこそ、え3静かに物し給4ふべかめれ。督の大殿こそは」と宣へば、「獨り離れてもえおはせじ。また下れ5さてしよりこそ習ひ給6(ふ)べけれ。昔の朝7臣は、七人8山人の中の9おとかの手よりこそ勝れたる極10の手をば弾き取り給ひけ11れ。仲忠が弾き侍るを、院の12聲などはよしと仰せらるれど、督の大殿13をなしゝ給へ、14ども15思ほえずこそ侍れ、かの弾き給ふ16時17は18に、治部卿いかに弾き給ひけむと19こそ、昔戀しく思ひやられ侍れ。督の大殿はいかゞは。一所におはして、先づ仲忠が聴きたる限りをこそは習はし奉らめ。春は霞はのか20なる鶯の聲、花の匂ひを思ひやり、夏の初め、深き夜の郭公の聲、曉空の氣色、林の中を思ひやり、秋の時雨、夜の明らかなる月、思ひ〳〵の虫の聲、風の音、色々の紅葉の21うつたへ〇枝」を別るゝ折の氣色を思ひ、冬の空定めなき雲、鳥獣の氣色22の、朝の雪の庭を眺め、高き山の頂を思ひやり、し23すたる池の下の水を哀れび、深き心高き思ひも、諸々の事を思ひ24あはせ、世の中のすべて千種にあれと見ゆるものの聞ゆる

校異　1 国着アリ。2 イとアリ。3 国心アリ。4 国はざたこ。5 国る手し、国る手。6 一字イニヨリテ補フ。7 国臣。8 国のアリ。9 イ劣り、イ弟、國イ弟か。10 國しアリ。11 國り。12 イ上。13 以下五字イ同じく宣、国を同じう宣。14 国むと。15 国聴。16 以下二字イナシ。17 以下二字国にこそ、国にけ。18 國故。19 国考異ナシ。20 国に鳴く。21 イえ。22 国ナシ。23 イた。24 イ哀れみ。

給ふ御聲に1は勝2りなめり。いと面白う哀になん」「いとをかしう侍る事3を。大宮の御事なこそ、何事にも先づは思ひ侍るに、婢く疾4くもおとなしう教へなさせ給ひてけるかな」宰の大殿の、「心憂くも辨へ給5へ(ぬ)るかな。よくぞ私の6族にし給7(ひ)てける。いかゞ御8事は、今まで9」と聞え給へば、「いと憚かまほしう奏し給ふを、いかゞとのみ思ひ給ふる。公にも院にも、御氣色賜はりて、萬を捨てゝ靜かに籠り侍りて、忝くとも、おはしま10させて、覺束なき所々も承11りてとなむ夜晝思ひ給ふる」宰の大殿「げに12西の御事をなむ、此所にも思ひ給ふる。いと13怪しくもなり14もたるを、さらば早う思し立てかし」「いと恐ろしうも、物の心よく思ひ知りたる様におはすれば、いとよう靜かに籠り給ひてん」と宣ふ。忍びやかに聞え給ふやう、「此の事15覺え侍るなん16覺えの事侍る。かの宮はいと17人18すかしく、不用なり19り。此の殿もさるべきにも侍らず。きやうこ20ゝ[〇京極]をさるべ21(き)様に造22らしつらはせ侍りてとなむ思ひ侍る。萬の所よりもその殿をなむ、しかし物せんに宜23のごと侍るべき。殿や便なしと宣はせむ。23仲忠これこそは一生の大きなる大事に思ひ侍れ」宰の大殿「さ24う[〇更]なる御事25なり。便なしと宥りともそれにこそ。たゞ宜はんにのみこそ。彼所はいと世に異なり。年頃思ふに、ただ聞き渡り、住まほし

【校】1 内考異ナシ。2 諸る。3 諸かな。4 諸ナシ。5 一字イニヨリテ補フ。6 内考、諸事の。7 一字陳ニヨリテ補フ。8 諸聲。9 諸はアリ。10 イナシ。11 イらん。12 イそ。13 諸あい。14 国イ、内に。15 内思ひ。16 イ多く。17 内考異いと。18 イ疑か。19 諸イる。20 イく。21 一字イニヨリテ補フ、又脇ニテマ本ニト記セリ。21 イり。23 諸イなど只。24 イら。25 諸や。26 イき。

う思ひ侍1り。心のどかに昔を思ひ出でて、さべき尊き事をもせさせ、行ふ彼所にてせんとなむ思ひ侍る」など宣ふに、涙も止め難く落ち給ひぬ。大將も悲しき事や思ひ出で給ふらん、泣き給ふ。「よく思し仰せらるる事なり。仲忠も、世2中と云ふもの、常なきものなり、靜かに、時々は籠り侍りて、見給はまほしき法文、書どもも侍り、さるべき昔の御爲めの事どもも、い3(か)で4かと思ひ給ふるも、公5に私6と心々の暇なく侍7るになん、靜かなる御8行、殿の御世の間はせさせ給はじ。尊きこと9わり10か、思ふやう侍り、犬宮の思ふやうに物し給はゞ、さやうの折にもなほかくてこそは御覽ぜめ。いかで世にあらまほしく珍らかたる事を御覽ぜさせんとなむ思11ひ給ふる12な」など、哀なる事ども聞え給ふ程に、殿、「先13を14うこ15え〔〇追ふ聲〕し、久しくなりぬ16る17に、18物せらるゝにこそ有19りけれ」とて、御子抱き奉り給へり。宮の君、「まろもに」と聞え給へば、宮をば肩に懸け奉り給ひて、いま一所をばたゞにかき抱きておはす。若君もおはしたり。何れとなく、樣々に清らに美しげにおはする、美しう見奉り給ふ。督の大殿も、大將の御氣色20も、泣き給へりけるを、「など例ならぬ樣に見え給ふ。もし宮の御事、對などの人々の中に、便なき事言ふやあらん」と、大將思すらん21事恥かしくて宣ふ。督の殿、いとよう笑み給ひて、「あな物狂はし。京極造らん

〔校異〕1 國イるも。2 因いアリ。3 一字イニヨリテ補フ。4 因ナシ。5 イナシ、因考異と。6 因ナシ。7 イり。8 國イ晋なひ。9 国はし。10 イも。11 国ふ、因考異ら。12 イナシ。13 国お。14 イふ。15 イゑ。16 國な。17 因は。18 因此所にアリ。19 國イんめアリ。20 イナシ。21 イナシ。

ゝ有るに1いけて、哀なる事思ひ出づるなり」殿「それこそは思ひ出でんにいと苦しけれ」とまめやかに宣へば、「憐しく、それより前にもいみじう哀なる事どもは無くやは」と聞え給へば、「2それよ。それにつけて、物思は世の常なりけむを思ふに、いと苦しうなむ。いかで昔の世の中の事をかけじ」3と宣へば、「たゞ4それよしき事の限りも覺え給ふなるかな」とて、かく書きつけて5宮へり、

古への千々八千草の物思ひを今ぞ悲しといかで忍ばむ

と書き給ふにも涙落ち給ふを、殿も哀7に覺え給ひて、「8い9と10、

ちくさには涙ぞ露と結びけんかゝる此の世に思ひとけなむ

おろかなる御守かし」11と書き付けて見せ奉り給ふ。大将これを取り給ひて、出で給ふを12ゝに、宮におはして、「久しく參らず」と聞え給ふ。宮御物參らせ給ひて、みづから出で給へり。「げに覺束なき程になり侍りにけるかな。いと便しく宣はするに、晝の御讀經聞まれ侍りてたゝん明け暮も侍る」と聞え給13ひて、「嬉しき吉祥め侍りつる、ついでに14は、今めかしき御帳に宣へる事」とて、有りつる物語15御帳よりも引き出でゝ見せ奉り給へば、いと哀に覺え給ひて、片側に、

故郷には何事もなく忍ぶ草露も涙の露ぞこぼるゝ

【校】1イつ。2諸本アリ。3類イも。4以下二字諸本異いまは。5イめか。6イ侍給。7以本異と。8以下二字或本異ナシ。9類で寺。10類本異しくアリ。11類イた。12類イしたき。13以本ヘげ。14以本ナシ。15類イふつくろ。

とてさし出で給へれば、見給ひしも、げに如何に1と哀に覺え給へば、御筆のおろし2とて、

　住み來しも見しも悲しき古里を玉の臺になる3きはな4りなん

など聞え給ひて出で給ひぬ。

大將は御德もいといかめしう、大殿に次ぎ奉りては、此殿を天下世の人もかしこう頼み奉り、參り集ひ、何事も物宣へなど思5へり。一6宮は犬宮と雛遊びし給ふ。御容貌日々に光り勝るやうにおはす。いみじ7き腹立ち、恐ろしき物の心8にも、見奉ら9ば、萬の事忘れて笑まれぬべし。あて宮も、今の程、かく10ばかりにておはせざりけんと、思ひ竝ぶべき樣ならず見え給ふ。御乳母五人、宮の君、源氏の11きことも御乳12主。乳母子六人、同じ程にて、丈五尺な13る裳14を、結ひ15籠めに著せ給ひて、御遊び16の17〔〇具〕にて18くはせ給ふ。これより他の人々には見せ奉り給19はず。20祖父大臣ゆかしがり聞え給へど、更に見せ奉り給はず。公もかの讀みさし給ふ文聞かまほしう申し給へど、とかう免れ申し給ひて、おぼろげならで參りにく21 22申し給ふ。23京極におはして、靜かに24見25歩き給ふに、世26中に有りとあ27か28木29花紅葉、數を

校異 1 因ぞアリ。2 因に。3 イさば。4 國イるら。5 イひ給アリ。6 因のアリ。7 因う。8 イばへアリ。9 國イむと。10 イはえ。11 一字イ君。三字国君ど。四字因君と。12 國イふし。13 国り。14 国ナシ。15 国袙。16 國イナシ。17 イ具。18 イ候。19 國イふ。20 因考異たゞ二宮ばかり女御殿とは見奉り給ふ。21 国くアリ。22 イく。23 因かくてアリ。24 イ廻らしアリ。25 因廻らしアリ。26 因のアリ。27 イる。28 因考異草アリ。29 因草アリ、國はアリ。

盡くして有り。居士にも有りけるもの〻、實をかしく、花紅葉めづらかにする木草どもの種をさへ植ゑ置き給へりけるも、山[1]中所々に、いと面白く、何とも人知られ生ひたり。一[2]年は[3]いたくおほよそにこそ面白しと見[4]え給ひしか、のどかに今[5]君給ふに、かゝる所なし。[6]とふたる岩つ、いろ〳〵の苔、生ひやうもいとをかしう珍らかなるを、立て置かれたりける。更に取り動かし直すべきにもあらざりけりと見給ふ。〔○以下底本脱漏「繪詞」トス、以下ノ文章ハ傍註ノ攙入カ〕治部卿は[7]うつぼの卷に見えたり。その後大將藤野の[8]藏人子の墅なりしかば、此の家も[9]と名高き宮とて、今の世の面白き所には云ひ置れたるなり。〔○以上〕此の三月十餘日[10]頃[11]造るべき由を、修理頭、宮の[12]御乳母[13]同胞な[14]り、仰せ給ふ。北の對、西東の對、殊[15]うるはしくよかりけり。西面に西の[16]くに、白き壁塗らすべか[17]んめり。此の西の對の南の端に、酌殿、西南の方かけて、昔の實有りける跡のまゝに念誦堂建てたり。南の山の花の木どもの中に、二つの樓、丈よき程に、[18]うち[19]たからぬ程に、たちまちに造るべし。西東に並[20]びて、樓の二つ[21]中に、いと高き反橋をして、北南には格子かくべし。それに我は居給はんとす。「これ造らんには、なべての工は[22]よ[23]せじ。修理職の[24]現、勝れたらん者二十人を選りて、[25]かたは[26]にて、心殊に[27]盡くしすべきなり」とて、[28]實預し

【校異】1國なる。2國イせ。3三字國ナシ。4イナシ。5イ見。6イ年經。7以下十字國燕野の隱子の墅でり。以下十字國考異ナシ。8國ナシ。9一字イナシ。二字國イなど。10國考異より。11國よりアリ。12國ナシ。13イりアリ。14イるに。15イにアリ。16國考異ま。17國ナシ。18窓こ。19イ高。20寛べ。21イのアリ。22國ナ。23イぽ。24イ中に。25以下四字イ方分き。26二字國なる事なく。27イ清ら。28イ選ふ。

犬宮の御方1に宮の君といふ2、物詣で3に行き會4いて、「殿の犬宮に琴教へ奉り給ふべき事歎き給ひし有樣、ほのかに聞きしは、少々の琴の音聞かんよりも目出たかりしものかな。今まで教へ奉らせ給はぬ事とてぞ歎かせ給ふや」など語りけるを聞えければ、5上渡らせ給6へ7る、8「一9宮10何事を思すらん。此の造りのゝしる樓は、いみじう面白き事有るべかなり。内侍の督諸共に迎へて、犬宮に琴教へんを、一11宮聞き給はんに、世にさる事はまたあらじを、年頃聞かまほしうし給へど、此所に聞かせずなり12にき。惜しむ手13お、かの折にこそは殘りなく聞き給14へはめ。羨ましうこそあれ。萬の事よりは、面白き事を、明暮聞きてあらん事より外の事あらじ」と宣ふ御氣色むつかしければ、15ころ〔〇上〕にも、げにいみじう有り難き事ならんかしと思せど、物宣はで、「犬宮16の移し傳へたらん17は、東宮の御世に、さりとも飽くまで聞き給ひてん。異樣に、はたあらじ。心のどかに物思ふこそよけれ。此の大將の事につ18きてこそ、度々氣色惡しう苦しけれ。いたう腹立ち給はぬ前に」とて、渡らせ給ひぬ。

かくて樓に上り給ふべき程の呉橋は、色々の木を交ぜ〳〵に造りて、下より流るゝ水は涼しく見ゆべく造る。樓の天井には鏡形、雲の形を織りたる高麗錦を張りたり。板敷にも錦を張19いせさせ給ふ。我が御座所には

校異1国の。2国もアリ、囨にアリ。3国ナシ。4国ひ。5囨考異笑は。6以下二字囨考異ひて。7イり。8囨あて宮アリ。9囨のアリ。10國イなど。11囨のアリ。12囨ぬるを。13イを。14一字イナシ。二字囨考異ふら。三字國イへば。15イ上。16イに殘。17國イナシ。18囨け。19一字イら。二字囨考異ら。

たゞ唐綾の1うちからなるを、天井にも、張りたる2板にも3しかけ給ふ。西の楼に4は宮の大殿の御5座所、東の楼には犬宮の御6座所なり。濱床をのみぞ、犬宮の御料はさ7ゝやかにせさせ給へる。その濱床には蒔繪8[illegible]白檀9れら〔〕坊〕を10さして、11螺鈿摺12り珠入れたり。三尺の屛風四帖、唐綾に13唐土の人の畫かきたりけるを、14此所にて大將の張らせ給ひて、一ところ15いづゝ、二つの楼の濱床の後に立てたり。四面天井に16三尺の17唐紙を、宮の大殿の18せむにも、これにも貼け給へり。いといみじ19う香の白は、20世に香ばしきよりも、此のしつらひ、細かなる有様、造りはてた21る、照り輝き珍らかなるを、22只見23つゝ24所の者ども、「又かゝる事あらじ」と24言ひ思ふ。大將は、宮しにても、思ふやうにて、珍らかなる様にて、宮の大殿を渡し奉りて見奉るべきも、犬宮のし給ふと、いとゞ美しう、すゞろにてはいかで見せまし、と思ひ奉り給ひて、此の事を聞きつ25ゝ、人々驚きむを知らぬた、「如何なる事し給26ふべきならん」と、申27ゝしかり給はぬなし。一二町を經て行く人28も29つ、此の楼の細緻[illegible]30許多の年月、様々の香どもの香に染みたる、風吹く度ごとに香ばしき31、賞で怪しむ。

校異1以下四字イ薄らふ。五字異考異朝打ちた。2國イり。3[illegible]殿かせ。4國ナシ。5國座。6國廊。7國イナシ。8[illegible]。9イわ、蒔ニテ「は蒔」トアリ。10國イた。11國イニ。12國イる。13國イも大國。14國手ずから。15國ひ。16國はアリ。17國唐香。18イ得、國をみ。19國き。20國四方に薫り渡れり。21國り。22國工。23イ作物。24イナシ。25國ぐ。26イへる。27國か。28國べアリ。29イゝ。30イ[illegible]こと、遠そく。」31イをアリ。

大將院に參り給へるに、「古き所、珍らかなる樣に、樓など造るべかなるは、如何なる事あるぞ。1男ども、いとをかしなどとこそ言ふめれ」と宣はすれば、「何でふ事も侍らず。犬2宮の靜かなる所に侍れば、彼所にて琴習ひ給3へるなり。内侍の督、今はやうやう身あつしく侍るに、此の手傳へ留めん事、今は誰にか4は5と侍るを、昔のやうにも侍らざめれば、仲忠公に暇賜はりて、心靜かにて物し侍らん」と奏し給へば、いと6御氣色よろしくて、「げにさるべき事なり。それこそ78いとひ〔○厭カ、いと便カ〕なき事にはあ9なれ。相撲にいとはつかに聞きて、えまた聞かずなりにしこそいと口惜しけれ。初めにはうたて心慌たゞしきやうならん。必ずかの末つ方に行きて聞かん。思ひのやうに敎へられたらん喜びも、今は10かくなりたりとも、11さ12るとも此所にこそ13は14せめ。いと嬉しく、一15宮の御許に此の16手の留まることそ本意な17かる心地すれ。さて暇は、心靜かにて見許され難くや物せられん。如何にと宣はす。大將18の、「19所の事をなん。たゞ御氣色になん侍る」「20難かるべう21とも、さこそはあ22べかめれ」と仰せらるゝ。かの書の殘りゆかしく思ふやうな23ど仰せられて、罷出給ふに、嵯峨の院の藏人、御使にて、御車のもとに寄りて、「殿に參りて侍りつれど、院になむおはしますと侍24れば。必ず參り給ふべき」と聞ゆれば、やがて參り給ふ。外の

校異 1因男。2国こそ。3イふべき、因ふべか。4因考異ナシ。5國イナシ。6國イナシ。7イはアリ。8国いと便。9因考異らざめ。10イよ。11以下四字因考異ナシ。12一字イり。13イおアリ。14国おはアリ。15因のアリ。16國イナシ。17一字イう。18以下二字イそ、因殿此。19因考異そ。20國イかた。21イ事。22因考異るべけ。23國イに。24イりつアリ。

ふ事物せむと宣はせて1」2「かの所3なむゆかし4と覺ゆる5やうは、昔の滋野の王6ふかの7あそびの內方は、我が祖母にいまそがりし宮なり。俊蔭の朝臣の母の源氏は、御息所8母のまた妹なりしかば、我まだ親王なりし時、かの祖母宮の住み給ひし時、いと面白かりし所なりしかば、9春秋文作りに物して見し10に、今ほのかに思ひ出づるに、11哀れにゆかしき12所になむ有るを、如何なる業をせらるべきぞ、さるべき13事あらば、こ14かむ〔〇胡雁カ、御感カ〕の事15覺えて、交らまほしく16なん有るゝと仰せらるゝを、常に古への事思ふにも、哀れにのみ物17を覺え給18ふに、覺束なかりつる事19も、明らかに宣はするに、面白う忝なう覺え給ひて、「あなかしこ、御念佛20をもなどかは、必ず參り侍りて。昔方は年深く21入り侍らで、思ひ給へ憚りしを、今は心よく、何22事の事の折にも、仰せ言のまゝにこそ背かずは侍らんと思ひ給ふ23るに、24心は仲忠こそは隔てあらためられめと思ひ給ふる中に、內侍の督25本意有りて、26如何でかの所に27今は28侍らん。ついでに一29宮の若君の、今はおよ30そけて、琴彈かまほしうし給ふに、敎へさせ侍らんとてなん、大方にては靜かならず侍れば、少し離れて高き樣なるもの建てさせ侍る31お、しか事々し32く

校異 1 因なむアリ。2 因と聞え給ふ院アリ。3 因ナシ。4 因う。5 因事。6 イ布留。7 イ朝臣。8 イ腹。9 因これかれアリ。10 因を、因考異をば。11 イいとアリ。12 國イナシ。13 國イかど。14 因考異う。15 イ多く。16 國イナシ。17 イナシ。18 因考異へば。19 イと。20 因に。21 イ參。22 因か。23 イナシ。24 因ナシ。25 イ如何で今はアリ。26 二字イナシ、因今は。27 一字因ナシ。二字イナシ。28 國イ本意ありてかの所にアリ。29 因のアリ。30 イず。31 イを。32 国う。

人の奏するにや侍らん」。院大きに驚き興ぜさせ給ひて、「1行幸よりは、それこそ天下に面白き事はあなれ。朱雀院は内裏にても仙洞の折も聞き給ひけり。俊蔭の朝臣の唐土より上りて琴を奉りしに、その昔例の2事にも似ず響きよく、おどろ〳〵しかりしかば、弾き留めてし物せしにも聞かず、聞かまほしかりし3事も聞かせず、かゝる異なる事を好みし間に、文の道をばさる方にて、此の方の師にせん。女4官達にも教へ事5ら6んと度々言はせしにも聞かで、かの内侍の督を、父母の愛しがる人にて7は、限りなくいたはしう、またなき者に思8ひ説きて、心もありしかば、女方よりも度々物する事有りしにも、いと心強う心深かりし人にて、公を恨み、世9中を知らでなむ身をも心つから沈めてし。その折の大臣どもの、此の國の10籌めの、限りなき面目を賜めんと言ひ出だし立てし事を、此所にはいと惜しみ思ひしかひなく、我一人に怨みを留められ11にしになん今に飽かず哀れに思ふ。此の御世にだに、かの12勘事を、今はかく隠れなき身に許されなば13や、如何に嬉しからむとなん物しつると、必ず傳へられよ。それを聞かむ、14その琴を強くまで弾きて聞かせ給15(は)ばこそは、げにと心寄せ覺16しめ」大將、「昔の事は詳しうもえ知り給17はず。仰せ言はい18かゞ物し侍らん。今はまかん〳〵しうなりて侍れども、そのうちにも參りて、いとよく申し召させ侍りなん。

校異 1 国考異御幸。2 国琴。3 イかど。4 イ君。5 以下二字国れ。6 一字闕れよ。7 イナシ。8 国ふと聞。9 國のアリ。10 三字闕イナシ。11 闕ナシ。12 勘事。13 イナシ。14 国には琴、闕イナシ。15 一字イニヨリテ補フ。16 イえ。17 闕は。18 国とよく。

1院内裏にも參りていと2よく聞し召させ侍りなん」。院打ち笑ませ給ひて、「否、それはえ有るまじき事なり。公私となく習はれたれば、かの兒に教へ果てられん末つ方なんいと聞かまほしき」など、樣々に古への哀なる事も、聊かほ3けくしからず仰せらる。おはしまさん事免あるべ4きならず宣はす。院5打ちしつらひておはします。年高うならせ給へるやうならず、いと淸らに目出たし。月6十五日には、僧數多召して、御念佛殿上人上達部數多して、それに堪7えたる人し8ては、さうがう〔〇奏樂カ、裝潢カ〕せしめ給ふ。

院9内儀式いとになし。かくて罷出給ひぬ。小さき人々さゝやかなる碁10盤犬宮の御方には、同じ母屋の西に、げに小さき几帳立てゝしつらひ給へり。に11、碁打ち12い〔〇居〕たり。御手の綾の單の黑きよりさし出で給へる、いと美しげにおはす。13兒14宮、「兵衞、15彼と犬宮といかゞ打ち給へる」とて見給へば、耻ぢ給ひて打ち給16(は)ず。これら17に付けて走れば、「いと云18ひがひなき御供人かた。裳著たる足音にはあらずや」と宣へば、大人ども「19げに」とて笑ふ。大將は犬宮に聞え給ふ、「彈かま欲しくし給ふ琴習20はい21こくまつ〔〇奉〕らん22を」と宣ふより、いと嬉しと思して笑み給へ23る、いと花やかに、見まほしう、愛敬こぼ24りばかりにておはするを、いと25美しと見

校異 1以下廿一字イ衍カ、因ナシ。2一字異にな。3國イせ。4因か。5国の内。6国のアリ。7イへ。8國イつゝ。9国のアリ。10因盤。11国てアリ。12一字イゐ。四字國イ出だし給ふ。13因父。14因君。15國イなど、国などゝ。16一字国ニヨリテ補フ。17国見。18イふ。19國イ今日。20國ひ。21イたて。22因ナシ。23因り。24イる。25因考異嬉。

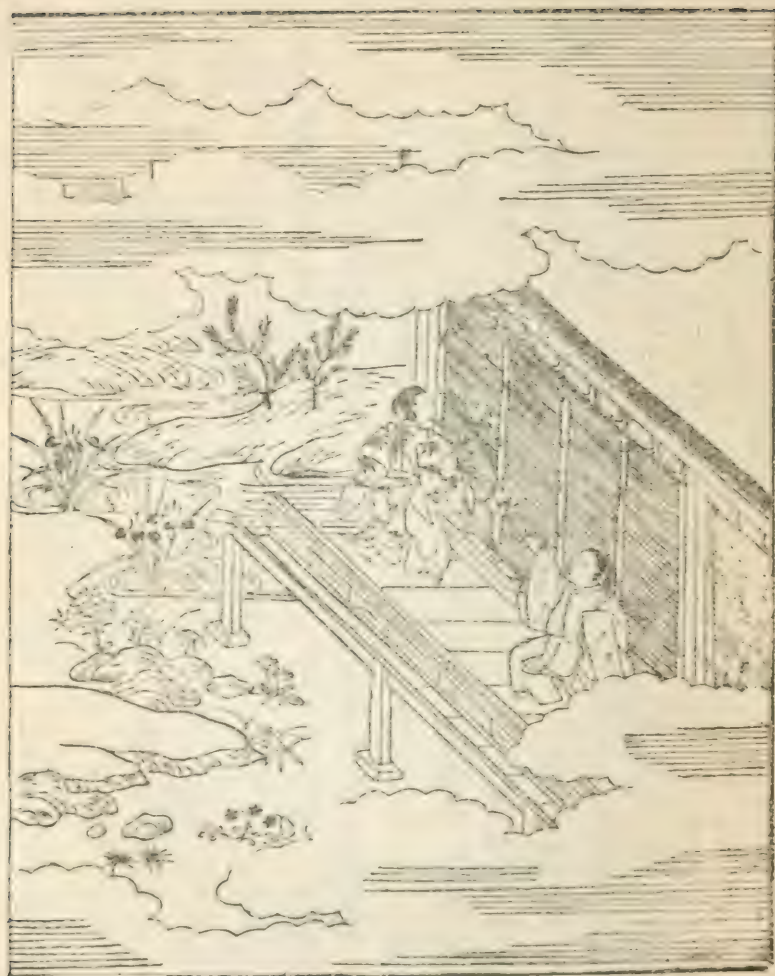
奉り給ふ。「琴習はせ給はゞ、宮には聞かせ奉らでなむ習ひ給1うべき。いと面白うをかしき所に率て奉りて、藤の大殿はおはしましなむや」と宣へば、「さりとも、宮おはせでは如何でか」と宣へば、「いと口惜しく、さてはふよう2し（〇不用）に侍なり。人に聞かせで、仲忠が大殿なむ人に教へ3侍る。しばし念じ給ひておはしませ。さてよく弾き取り給ひてん程に、宮はおはしましなむ」と聞え給へば、「さらばよかりなん」4とて、「宮には聞し給ふ5ひそ」「皆人の聞くにも弾き給ふは、此の侍6る琴をなんさは弾き給ふ。これは異なれ。人に聞かせつれば憚もせず、耳慣はず侍7（8る）。宮も9故宮もおはせ10し所なり。いと面白くなむ侍る」と聞え給へば、「さて11うちは12」と宣ふは、中に思す御乳母なりけり。「それは近う候ひなむ」「さば宮渡さじと宣はんな」「それと聞かぬ程にこそは。侍りて、御気疎しうおはしまさむ程は、ふとおはしまさせてん」「さてなほ13き（〇久）しくや14宮15は見奉らざらんずる」「などてか、たゞしばし16なり」と聞え給ふにも、いと哀に、まつはし奉り給へるに、見におはするは、こしらへてもおはしなむ。宮如何に思し宣は17すらんといとほしけれど、さるべき事ならねばと思す。「18御前に乳母達侍ひ給ふや」。いづ19ら20そ、此の騎21川の書しつる人々も侍ル」とてお召しかしぬ。是23々方になりにけり。「朱雀院に久しく侍24はで25・配

校異 1イふ。2イら。3岡イはつ。4基など。5岡ふぞ。6一字イニヨリテ補フ。7一字イニヨリテ補フ。8岡の。9イニ、関二の。10岡の。11イ父。12底考異ヒアリ。13イき。14底にアリ。15岡考異ナシ。16岡前補アリ。17岡むず。18岡御前。19岡考異こに。20岡ナシ。21イ曹。22イけ。23イナシ。24岡考異ひて。25底参りてアリ。

1りつるまゝに、嵯峨の院に召ありつれば、參りて今まで侍りつるを、いと恐ろしう、御年の程よりはさかしう物2や仰せらるゝ君にこそおはしませ。此の院の御前に侍ふは恐ろしう、萬に宣ふ事の、らう〱じく愛敬づき、如何なる樣をか3こつ御覽じ付けられんとこそ思ひ侍れ。まことや、此の樓作らせ侍る事を、今よりは4いと事々しう聞し召しつゝ尋ね問はせ給ふに苦しくなむ。御調有るべく仰せられつる。本意なく騷がしくやあらむ。果て方になど5は面白き事6なる7らんかし」など聞8え給ふ程に、涼の中納言おはして、「久しく對9面の侍らねば參り來たる。嵯峨10野に參りて、罷出侍11りつるなり」と聞え給へば、「あな苦し。12など事ならん。院の琴を興せさせ給へれば、來給へ13りな14り」と宣ひて、「その琴の度にやあらん」とて、「それ15だにこそ參り侍らめと思16ひ給17ひつれ。只今かく侍り」とて、直衣著替へ給ひて、西の對と渡り18南の間にて對19面し給へり。「一所にては覺束なからず承はりなんとこそ20思ひ給へしを、本意も皆違ひにけり。古へ契り聞え侍21りし事どもは、皆ぞ思し忘れたりけ22り。遙かなる程に住み侍りし折にも、取り分きて如何で對23面もがなと思ひ給へしに、たま〱24對25面の有り難くて侍りしかば、極りなくこそ嬉しく思26ひ給27ひてしか28ば、何時しかも一所にて、思ふやうに29聞え承はりて、心安30き遊びをもとこそ思ひ

校異　1イ出。2因ナシ、因考異を。3一字イか、二字因ナシ。4因考異ナシ。5イナシ。6、因は有。7因考異おせ。8イえ。9因面。10因の院。11因ナシ。12因何。13因る。14國イんど。15因へアリ。16因う。17因へ。18因のアリ。19因面。20イはアリ。21國る。22因る。23因面。24因のアリ。25因面。26因う。27因へ。28イナシ。29國てアリ。30因く。

しも皆1具し給ひけん」と笑ひ給へば、大將もいと心よく打ち笑ひ給ひて、「何事をかは隱し聞2え ん3と4の覺えずなり5て侍る名殘り、京極はしか御耳留まるべくも侍らぬものを。高き物面白くば、朱雀門、羅鋭などを、如何に絶えず見る人侍らまし。靜かなる所なれ6、時々も罷り移りて、心安く7 8と思9ひ給ふるなり」など聞え給ふ程に、入日のいと赤くさし入りたるに、犬宮白10い薄物の細長に、二藍の小袿11を12給ふとて、丈は三尺の几帳に13立たぬ程なり、御髮は絲を搓り懸けたるやうにて、細腰にはづれたり、扇の小さきさゝげ給ひて、兒大人ども三四人添ひて、あれ14所15に〳〵とて、簾の下に何心なく立ち給へるに、風の簾を吹き上げたる、立てたる几帳の側より、片傍が16を〔○顏〕の透きて見え給へる17容態、か18を〔○顏〕いと花やかに美しげに、あなめでたの者やと見え給ふを、19み念じ給はで、笑みて見遣り給ふに、大將怪しと見20を21うせ給ふ。あらはなれば、「いと不便なりや」とて立ち給へば、「何の不便なるぞ。若き時は、22打は23へ24れて、ほのかに人に見え給へるこそ美しけれ。世25中にのゝしり給ふ人も、むげに見ぬは、心地むつかしき時は、いでや如何有りけんと見ゆるものなり。いみじう世に物思ひ26出で來ぬべき世なめり」とて、飽かず美しく覺え給ふ。「ま27だえぞ見え給ふ」とて入り給ひて、御28そのと〔○乳母〕達に、「いと淺ましう、

校異　1墨ニテ「ら板」と傍書ス。「見馴らし」カ。2イゆら。3以下二字宏物。4イも。5囫にアリ。6国ばアリ。7囫行ひをもアリ、囫考異もアリ。8イも。9囫う。10国き。11以下四字囫着給ひ。12三字イ着給ひ。13イ足ら。14宏考異心。15国々に、國まく〳〵に。16イほ。17國イう。18イほ。19イえ。20国お。21イこ。22イナシ。23イづ。24国ナシ。25囫のアリ。26國てアリ。27イたこそ、國イたえう。28イめ。

しか〳〵なむ有りつる。いみじきわざなり。近うあ1はぬわざ、いと悪し」と宣へば、「蝶の御簾のもとに飛び侍りつるを、此の幼き人々の、我も捕らむ〳〵と騒ぎ侍りつるを、御覧じつるならん」と申せば、「いと此の大人どももいはけなしや」とて出で給ひぬ。「片思ひはとこそ言ひ侍2なれ。口惜しきわざ3」と宣へば、「まめやかに、いといみじう美しうおはしつる樣かな。何を思すらん。彼所におはする兒は、此の御同じ程ぞかし。いと臈く物し給ふに、思ひ煩ひ侍りぬるものを」など宣ふ。「氣色をかしげなるべし。内侍の典知り聞ゆありき」とて、ゆかしう如何ならんと覺え給ふべし。中納言4院に宣5へる、「吾が君〳〵、かの御手の限りを盡くして敎へ給6ふらんは、さる事は有りなんや。人に實になべて聞かせ給はじ。只片時の程いと聞き侍らまほしきを、必ず聞かせ給へ」と懇に聞え給へば、「吾7る8君佛、隱し聞えさせず。いと面白き事は有るべき事に9も侍らず。雨10院11上も怪しう聞し召して仰せられつる。此の侍る所はいと騒がし12う、宮達もあわたゞしうおはしまして、人繁ければ、たゞ犬宮一人を彼所に渡して、仲忠が敎へ奉るべきなり。内侍の督も、身も13あつしう14物し給ふうちに、あわたゞしき人の掖ひなどせられて聞ゆ、15上も心静かにも物し給はじ。16大宮もいと17おほけなくおはすれば、は18る〴〵しく19えやは習ひ給はざらん。今は昔のや20うに聞かまほしき樣も、え彈きなされずや」「さても何時か渡り給ふべき」「相撲の事、國々21さかしき事有

〔校異〕1イら。2国るアリ。3因かなアリ。4因殿大將殿。5因ふ。6イへ。7イが。8イナシ。9イナシ。19一字イナシ。二字因考異ナシ。10因方のアリ。11因のアリ。12因く。13國耻か。14國もアリ。15イと。16因犬。17因いは。18イか。20國イと。21因騒が。

て、今より何事1も世2中を響かすこそいと妬けれ。小さき3事も物いと4ほしげなるを、大人に作りてぞ有りける。萬づ5事怪しく珍らかに物し給ふ人にこそ6あれ。女子も如何に見るかひ有りと思すらん」など宣ふ。

7大將8宮に、「中納言の此の京極の事にて物し給へるに侍り。かく上下かねてより9事々しう、公私と物し給ふを、思ふやうに彈き傳へ給はずば、如何に口惜しからん。生まれ給ひし時よりだに、如何ならんと安からず人々は物し給ひしを、異なる事なくば公事を物せず侍らんとて、院に暇申し侍りしを、來ん10月よりとなん思ひ侍る。犬宮は、いとよく離れ添り給ひてあらんと宣ふ11をさへ12は見13におはしまさば、院宮達また誰も騒がしう侍らんに、本意なかるべし。おはしまさせで、たゞひ14ひころ〔〇一所〕をなむ渡し添りたるとて、門も開けは15つ〔〇侍〕らじと16て17す」と19聞え給へば、「幾久しさかは」と宣へば、一如何でかは。いととくは18見習はせ給は20じ。物の心詳しく見21せ給ひてこそ。内侍の督四つより三年こそ異遊びせられで習ひ給ひ22けれ。23所になり給24はぬ、いとよく、さりともいととく彈き給ひてん。今25まで習ひ給

校異 1因にアリ。2因のアリ。3国子共の。4国をか。5因のアリ。6國イこ。7国かくてアリ。8因殿アリ。9國イかど。10因月。11イ御前。12因に、因考異の。13因考異給へアリ。14イとと。15イべ。16因ナシ。17国ナシ。18国ぞアリ。19因皆。20国ん、國こ。21イさアリ。22以下三字国ぬこれは七、因ぬれこれは七つ。23イし。24一字イひ。二字因ひぬれば、因考異ふ犬宮、國ふは。25イナシ。

まめやかに聞え給へば、さてあべい事なら1ぬは、宮も此の事を心殊に如何で2と思す事なれば、「さらば念じてこそあらめ。いと忍びて、あからさまになど3い、などか物せざらん。なほ此所には聞かせじとなめり。督の大殿、如何でか心静かに聞か4んと常に物5する事はあらずや。その程だにさらずば何時」と宣へば、「如何は、さこそは。それも未つ方になん忍びて6も渡らせ給はんを、此の人々聞き付け給はむや、7むつかしう、人々の物し給はんにこそ、8た〔○御〕前をだにとて過し侍らん9」と聞え給ひて、今ぞ思ふやうなる心地し給ふ。宮「久しう見奉らざらんを」とて、明けぬれば暮るゝまで、犬宮10雛遊びし給ふ。「外にては戀しく思ひ給ふべしや」と宣へば、「如何は。琴11の12心まほしければ、念じて13 14あらん。密かに15おはせ16よ17。この雛にもや聞かせじとする」と宣へば、いと哀にをかしう覺え給ひて、「などてか。率ておはせ。大將18をのをばき19ゝとぞ20聞ゆる。雛遊びは時々21せし給へ。琴を心に入れ給へ」とて、「いと面白く彈かんと思せ」など聞え給ふに、久しく見奉り給はざらん事のいみじう戀しく覺え給ふべきを、打ち22見守り奉り給ふに、涙のこぼれぬべければ、今少しも23え聞え給はず、苦しと思すまじき事を語らひ給ふ。

【校異】1イねば。2イかアリ。3イは。4国せアリ。5国し給ふ。6因ナシ。7因考異やかま、因考異かま。8イお。9イとたりアリ。10イ雛。11因考異ナシ。12イ彈か。13イやアリ。14イおはせむずる、国おはすらん、因考異おはす、因考異おすける。15因考異はアリ。16國イじ。17国かしアリ。18一字国ナシ。二字イナシ。19イく。20國イきしの身に。21墨ニテ「を板」ト記セリ、因を。22イ見守。23因ナシ。

下簾も香の地に薄物重ねて、小鳥蝶などを縫ひたり。右大殿も諸共におはして、三日1過ぐして歸り給ふべし。右大將殿も御前いかめしう調へ給へり。左の大殿の御方にも人々の容貌よきを仰せられ、院よりも四位五位六位、容貌よく年若き、內裏の藏人經たるも選びて、かの一條京極なる所に渡り給ふなるに、仕うまつるべき由仰せ給へれば、我も／＼と、賀茂の祭はさるべき限りこそあれ、これは左2の3右の大殿、院調へさせ給ふに、世4中に物の覺5えあ6り人々、「此の中に7參8らず知らざらんはいみじき恥なり」と申し、裝束を調へまどひたり。な9(ま)〔〇馬〕鞍より10は初めて、經營きて急ぎたり。大將、「督の殿の御前どもは、若やかなる女郞女色の下襲を著よ」と宣ふ。「宮の御方のは薄き二藍を著よ」と宣ふ。女房車ども、督の殿の上﨟11三車は、紅の打合に、はしの織物、次々のは朽葉、香襲色の12摺の大海の裳なり。宮の御方のは、上﨟13四14車有るに、紫15苑色の袿に、赤色に二藍の16うらきぬ〔〇唐衣〕、次々のは薄二藍、女郞花色などの17お著て、青18(ず)り〔〇摺〕墨摺19の20せ三つの裳なり。童も同じく著せたり。21夏の綀の上の袴著たり。

〔書詞〕此所は大將殿の御方、中の御殿。人々參り集まれり。

酉の時なり〔〇底本墨書以上ヲ繪詞トス〕。殿の中宮達殿ばら出車し給ふ、居集まれり。大將殿は出で居給

〔校異〕1國イ修理。2イナシ。3因右。4因のアリ。5イる。6国る。7以下四字国交。8三字イり交、因考異ナシ。9一字イニヨリテ補フ。10国ナシ。11国四。12因地アリ。13因車アリ。14因つ。15異苑。16異か。17イを。18一字国ニヨリテ補フ。19以下四字因ナシ。20一字イナシ。21イ殿の料。

「1日なく侍ら2じ。仲忠が是は渡し奉るにこそ3侍れ」とて御し開え給へど、「知りてあ4ひなし」とて、かねてよりしか思ひ給へりければ、なほ廿五なり。時なりて、殿は御車寄せさせ給ふ。宮の乗り給ふ御几帳、左大殿大将5とさし給へり。乗り給ひぬるすなはち、大将九條殿に馬を打ち6おはし7て、南の廂に出で8居給へるを、「早や〳〵」とて乗せ給ふ。几帳も殿二所してさし給へり。宮の御方々の人々見て、「殿をば聞ゆるに限りもあらずや。か9ら言ふばかりもなく、めでたき大将の10御様よ。帝にて子を持たらむも、めでたくも有るまじからむ。此の11子もてかしづき給ふに、いみじきものかな」とめであへり。次々の車どもも乗り續きて出で給ふ12儀式、げにいとめでたうあらまほし13うめでたし。14君見15渡し給ひて、「いかめしの人の御幸ひや。一人にてもかく子を生みけむよ」などて、我が姉宮を思ひく16(ら)ぶるに、から子孫まで、我がまゝに17實ごり滿ちてのゝしる、かゝる仲らひにて見るにも、よく物を言ひ思ふべくもあらず、あだを見るぞ心憂きやと思せど、もとより怪しきまで御心よく貴18におはすれば、さるべきにこそあらめ、梨壺のみ19時々に見20て來てん、げに言ふとも、先づ21皇子を生み給へらまし22く、如何にかはあらまし」とのみ、身の憂きのみ思す。殿宮の御方に入り給ひておはす。

校異 1国便。2国ん。3イはアリ。4因考異い。5國も。6イてアリ。7因考異ぬ。8國イナシ。9イら。10因もてなし給ふアリ。11イから。12因考異氣色。13因き樣なり。14因宮。15イ出だ。16一字イニヨリテ補フ。17國イころ。18国なる宮アリ。19イと聞く。20国聞き。21[王]一のアリ。22国かば。

1宮の三尺の几帳さして2〔下り〕給ふ。大將、「乳母抱き3て下り給へ」と宣ふに、「いな。宮の御樣に4下りむ」と宣ひて、小さき5御扇さし6給ひて、靜かに7ゐざりおはす8か樣、9〔今からいと艷かし10く、せさせ給へるを、11〔いと美しくゆゝしく覺え給ふ。殿ばら12 13東の對14釣殿〕に15い〔〇居〕並み給へり。16かういと艷かしうせさせ給へり。

三日の17よ18うこび〔〇喜〕のは、宮の御前の殿上人まで19同じ、なべて20の左21大22臣、二日のは右23大24臣、三日のは大將25。宮の御前の、内侍の督、犬宮、26淺香の折敷27と十二、紫28檀の高杯、薄物の打敷なり。上達部の御前29の盃度々になりぬ。督の殿の御方より、心殊に設け給へるかづけ物、南の庭より取り續き歩みたる、色々にし重ねたる、いと淸らにうるはしく、薫物の香など匂ひめでたし。六位の藏人にも織物の三重襲の小袿、二30〔重〕襲の袴、帶刀には薄物の小うち31〔ぎ〕〔〇袿〕、一重襲の袴なり。これより32〔下〕には更にも言はず。上達部殿上人33につ34け35供は御隨身御前の人々、皆かづけ給36ひて、樓へ皆おはす。

校異 1イ色。2二字イニヨリテ補フ。3因添りアリ。4國イおか。5因ナシ。6イ隱しアリ。7三字因考異ナシ。8イる。9十六字因ニヨリテ補フ。10因考異う。11廿一字イニヨリテ補フ。12因はアリ。13国東。14国のアリ。15イゐ。16十四字因ナシ。17以下五字因御賄。18一字イろ。19因おし。20因ナシ。21因のアリ。22因殿。23因のアリ。24因殿。25因殿アリ。26イ淺。27国ナシ。28国檀。29因に。30一字イニヨリテ補フ。31一字イニヨリテ補フ。32一字イニヨリテ補フ。33以下五字因のさぶらひ。34一字国ぎ。35一字イしに、国下。36因ふ督の大殿の御方の御前には大將殿の御方よりかづけ給ふ又の日。

なし。「見さして歸るべき事なくなん。これを朱雀院嵯峨の院に御覽ぜさせばや。如何にいみじう興ぜさせ給はん1か。2濱の3石には、春は花、秋は紅葉4盛りなどには、かの惜しま5せ給6（ふ）手は、え留め難くこそあ7んべけれ」など宣ひて、夜に入るまで立ち8こらし給ふ。月の水に寫9りたるを、宮の10伯父の右の衞11門督、

むべこそはすな12とぞ有り13し14思ほゆれ雲井の月もうつりけるやと（〇宿カ）

大將、

我が宿を過ぎずと思へ15ば月影の水の上ぞと見ればかひなし

異人々も詠み給へれど、騷がしくて聞かず。（〇以下因考異ナク、下ニ出ス）督の殿の御方の御前には、大將の御方よりかづけ物は賜ふ。又の日、督の殿16左怨み出だし給ふに、年々の草はや17つ（〇八重）葎の板敷よりも高う生ひ、栗の木のつまの草は高18ら生19い20たはぶれて、下21こま（〇樣）に22生い凝りて、人影もせず有りしを思ひ出で給ふに、大將23の、二方に引き續きて率て渡り給24ふべくもなし給へる25御さま（〇樣）、

校異　1イナシ。2イ間。3因考異木。4イのアリ。5國イて。6一字イニヨリテ補フ。7因ナシ。8イ暮、イ見。9國イろも。10因御アリ。11国門。12因人。13因と。14イとアリ。15因ど。16以下三字イそこら見、国古へ思ひ。一字國古へ、國イぞ。17因へ。18イう。19ひ。20国倒。21異ざ。22イはびこ、因考異生ひな。23國イナシ。24イひ造り。25イさ。

出で入りし給1ふいき2を3い〔○勢〕見4立て給ふに、年頃5思ひ忘れ給へ6り7、古への御有樣、萬に思ひ出で給ふ8、え念じ給はず、涙の溢れ給へば、忍び給ふ氣色を、「ゆゝしう、か9くる事10忌みあへ給はじと11は思ひきかし。さりとも念じ給へ。12よべこせまろが仕りしは、怪しうはあらぬは」と右の大殿聞え給へば、「さら13ずば、14御有るまじくやは。大將も15惡くや」と答へ給へば、「さてそれは誰が子にかあらん」などて、たはぶれに聞えなし給ふ。大將いと思ふやうなる心地し給ふ。〔○以上〕

三日院より白銀の髯籠廿、白銀黃金して、16若栗松の實17榧棗など作り入れさせ給ひて、宮の御許に、「覺束なき程になりにける。騒がしき程過ぎて、犬宮の物習はれん手つきのゆかしきに、如何でか18なむ。此の髯籠は白髮になりにける程も哀になん」と宣はせたり。督の大殿にも同じ數にて、「淺ましく忘19れ20てや。此所には何時となくのみ、

羨まし明け暮れ人と結ぶらん髯籠の樣は影21と離れ22ず

末の世にこそ23なるべ24にけれ。聞かまほしき事どもあらんかし」と25かゝり給へり。御使藏人に出であひ給ひて、東の對にて、よき程に醉はし給ひて、26御返取らせ給ひて、前に押し立てゝ、西の對にていとい

校異　1イへる。2以下二字国ほひ。3イ今。4国搔り。5イをも、国面。6因考異る。7国しアリ。8因にアリ。9イか。10イえアリ。11因ナシ。12四字因ナシ。13國に。14国さ。15因惡。16因毬。17因榧。18イとアリ。19国らアリ。20イにアリ。21因も、22イで。23イ流。24イかり。25イ書き。26國イ世。

藏人、「亂れ足は動かれず侍り。右に1かづき給ふ物は、簑虫のやうにてや、なぐめき參らん」と云ふ程に、内よりふと、

　雨の足は2村雨なるを簑虫3と何むつかしく懸けていふらん

藏人、「物も覺え4果てずや」とて、

　「朝夕5日照りみ輝く大殿に6鳴く7つきものかげにや簑虫

ことわり〳〵」とて逃げて、8倒れもこよひつゝ往けば、内にもをかしがり、大將も笑ひ給ひぬ。庭の9ままにかづけ物を落し往けば、大將人召して車に入れさせ給ふ10にや。督の殿の御返、「11畏まりて賜はせつる。

　老の世に12流れて清き呉竹の末のよにこそ結ぶ名もたて」

とぞ有りける。

四日の夜13明なるばかりに、宮歸り給ふ。忍びや14るにて、さるべき四15五六人16ばかり五位十人ばかりして、大將いと覺束なく覺え給ひけれ17ど、萬に聞え慰め奉り給18へ、曉に歸り給ひぬ。二19宮は、「いとつ

〔校異〕1國イ歸し。2イ時雨なるをや。3イの。4イ侍ら。5因に。6因考異なる。7イべ。8イ倒。9因前。10因なし。11國イに因。12因考異馴れてぞ。13イ夜半、国半。14イか。15黑書「位カ」、イ位。16三字因ナシ。17イばと。18イひて、因ふ。19因のアリ。

「かゝる耳いかで聞かじ。此の程はすべて門鎖して、公私事も聞かじ、異事もなく思ひ惑ふ1人を、かの聞かれんに、かゝる事なし給ひそ。明けぬ先に早2々おはしね。宮3君、若君如何に戀しう思し給ふらん。それをだに、此の程は渡し奉らじとあるぞわりなきや」大殿、「紛らはし言なし給ひそ。爰に4琴教へ5へ6ん」からに、親とある人の中をも、皆取り離つ。怪し7とて居給へれ8ばと、片時も見奉らでえ9知らぬ。宮をも急ぎ渡し給10ふ。11夜もたゞ此所に12もとこそあ13んめれ」14殿「よし聞か15ん。16いでやしばし17ぞ念18ぜん。19げにや參らでられぬ20」と21「今己22も、天下に言ふとも、忍び／＼23は時々參24ふで來ん25とす」とて、物憂26くて出で給ひけり。明かくなりにけり。大將27とう／＼見28歩き給ふ、29片方云ひ奉れば、たゞ兄弟のやうにて、これもいと30よげに、若う艶かしき御容貌なり。31殿32「これ33は本34はし末のまゝか」「しか侍り」「いと面白くこそ造られたりけれ」昔屋ども35なく36倒れ、所々に37はしと38（み）（部）などの高き草の中に朽ち倒れて、念誦堂の柱39（40の）み所々立て渡し、寢殿の41瓦はあ42か43間無44き間交り

校異 1 国もの。2 イくと。3 図のアリ。4 図琴。5 一字国ニヨリテ補フ。6 國べからず。7 以下八字図うこそ宣へれ。8 二字イど。9 図ぞあ。10 図へ。11 図我。12 二字図ナシ。一字國イナシ。13 図らむ。14 図督のアリ。15 図じ。16 図今。17 図こそ。18 図じ給はめ。19 図大將の彼所にまた。20 図をアリ。21 図宣へば大殿アリ。22 図は。23 図に。24 国う。25 イず。26 一字国げに。二字図考異げに。27 図殿大殿の御前に參り給へば御供にて所々。28 國歩。29 図樣。30 国晴。31 図大アリ。32 図やがて督の殿の御方に入り給ひてアリ。33 國も。34 イの礎石歟、図の礎石。35 図皆。36 国倒、國イ立た。37 国ナシ。38 一字イニヨリテ補フ。39 一字イニヨリテ補フ。40 二字國イナシ。41 イ勾欄。42 イる。43 図所。44 図く散り落ち。

て、いといみじかりし、丈よりも高かりし草[1]・[2]も蓬がな[3]る〔〇中〕を分けて、入りおはして見[4]みよらし
に、屋の室所々朽ち明きたりし[5]かう、月の光[6]に[7]漏らで居給へりし程を見付け給へりし事、わりなく出
で給ひにし折、心地の思ひ出でられ給ふに、いといじみう胸塞がる心地し給ひて、涙のつぶ〳〵と落ち給ふ
を、大将昔思し出で給ふなめりと見給ふ[8]に付けては、〔〇以下底本ナシ国ニアリ、上ト重出トス〕〔昔の藪も
そこら見出だし給ふに、年々の草は、八重葎の板敷よりも高う生ひ上り、軒のつまの草は繁く離れこ、[illegible]
に生ひ懸りて、人影もせずありしを思ひ出で給ふに、大将の、かく二方に引き續き、常て渡り給ふべく造り
なし給へる様、出で入りし給ふ勢ひ見奉り給ふに、年頃思ひ忘れ給へる古への御有様、萬に思ひ出で給ひ、
え念じ給はず、涙のこぼれ出で給ふを忍び給ふ御氣色を、「ゆゝしう、かゝる事え忌みあへ給はじ」と思ひきか
し。さりともと念じ給へ。うべこそ、まろが仕うまつりしは怪しうはあらぬはや」と右の大将聞え給へば、「さ
らずば、さあるもじうやは。大将も悪くや」と答へ給へば、「さてそれは誰が子にかあらむ」などたはむれに
聞えな給ふ。大将殿、いと思ふやうたる心地し給ふ。右の大殿はかゝるにつけても〔〇以上〕何事も片時
忘[9]られ給ふ[10]夜な〳〵物の覺え給へば、我も涙のこぼれ給ひぬべけれど、[11]人々の見奉れば、よく〳〵念
じ給[12]へど、「いと堪へ難かるべ[13]きを」忍びて時々は物せん。如何」と宣へば、「よ[14]く侍[15]なり。右様に從ひ

校異 1 国考異ビアリ。2 国ナシ。3 イか。4 イ給ひ。5 イより。6 以下四字国見て。7 三字イて。8 五字国
ナシ。9 イナシ。10 イ世無く。11 イさぶらふアリ。12 国ふ、国考異ひつ。13 国し。14 国り。15 国め。

て取り申させ侍らん。暇の1た2わかたに3、院4に切に5申し給へり、た6か〔〇只〕今はおよずけ給はねば、夜もさるべ7かば、かゝる8おち〔〇折〕は如何となむ思9ふ給ふる」と申し給へば、「なほ難かるべきなり。此の思ひには劣りたりける。10辛しや」と宣ひておはしぬ。十七日なり11し。

〔〇朱書〕　文化十二年乙亥九月以本居氏藏書挍合畢橡樟園興之　〔〇花押アリ〕

校異 1以下四字国度ごと、國わりなき。2一字イれ。三字國イわりたき。3因をとアリ。4因の上の。5因宣ふを。6イだ、國イる。7イくつ。8イなり。9因う。10因考異憂う。11国かアリ。

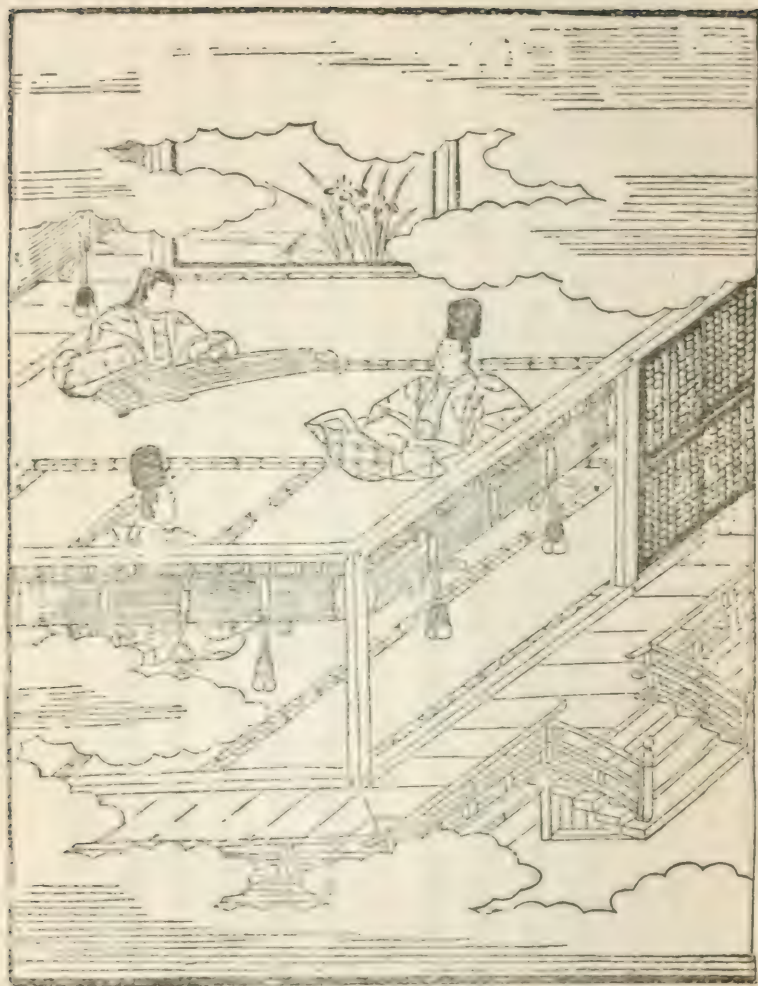
楼の上　下

一名　高殿

かくて、つとめての御使、こ1く〔〔此所〕〕にて参らせ給ひ」て、とばかりありて、樓へ二所渡し奉り給へり。督の殿2も、大宮の御方のも、大人十二人3までさし續4きたり。5白銀の透御袋に御薫物入れたり。先づ督の殿上り給ふ。6股階に御手を取りて上せ奉り給ふ。7青鈍8ひつる唐綾の御衣一襲、紫苑色の夏の織物の袿、紅の三重襲の9御袴、大將白き綾の單、紅の打袿脱ぎ垂れ給へり。几帳のき1外れたるより10過かに11几帳より御容12さい〔〔額〕〕、七尺餘の御髪の擎しかけたるやうなる、いみじうめでた13う見ゆ。中納言14君と云ふを、「一番1侍が給こ」とて、15東の樓に大宮抱き奉りて、「几帳を高う16女なさせ」と宣ひて、これも同じごと、な17そ〳〵と人歩み續きた18る。御衣19はした色の20小さき袋、綾の打袿一襲、尾花色の細長、御袴いと長し。奉て1上り給ひて、琴取り寄せて奉り給へば、「誰に聞かせん」。いづら」と宣へば、笑ひ給ひて、「こゝに21侍り」とて、御簾にさし据ゑ給へり。内侍の督見奉り給22ふに、おはせしよりもいとこよなく美しげになり勝り給ひけり。氣高23う清らにおはする樣、24たよりはいとこよなうおはしけりと哀に

〔頭注〕1イこ。2國のアリ。3イ几帳。4國考異け。5十四字國ナシ。6夏段。7以下五字玄ナシ。8以下二字國考異へ。9國イナシ。10異はつ。11國見ゆる。12イた額、異たま。13玄し。14イのアリ。15玄東。16國ナシ、國皆。17イ如。18玄り。19玄離。20十四字國ナン、〔〔板本一行分ヲ脱セシカ。21異侍。22國へる。23國考異く。24一字國脱。三字國ナシ。

見奉り給ふに、靜かに、兒の御有様ともなく、おほどかなり。先づかの治部卿の習はし奉り給ひしりうかく風を犬宮の、1おふ2を大將のにて、彈かせ奉り給3はす。先づ督の大殿、二つながら取り寄せて調べ4よと宣ふ、音の限りなく面白し。大將犬宮5りうかく6奉り7て、彈き始め奉り給ふに、御手はいと小さきに、彈き鳴らし給へる音、更に心もとなからず、いとかしこく心得給ひて彈き給ふ。片時に8調べ9は10給ひつ。次に又曲の物一つ教へ奉り給ふに、いと同じく彈き取り給ふに、督の大殿、「11さべきにてかくおはすると見奉り給ふ12に、ゆゝしくなん」とて彈きたて給ひ掻き合はせ給へる程に、泪の落ちつゝ宣ふ、「昔四つにて習はし給ひしに、心には入れながら、程もなくて、乳母の膝に居ながら、手どもは彈き取りて、13水をよく彈き傳へ14る事は、七つよりなん大人の15如く16の音になりぬと宣ひし。これは大人だに17琴の音を、かくうるはしうは彈き18立つる事は得せぬものを」と聞え給ふ。大將かくおはするを本意は叶ひぬべかめり、嬉う覺え給ふ事限りなし。「19又彈き給ふべけれど、苦しくもぞおはする。今日はこれを」と聞え給ふ。三度と聞ひ給はず、年月を經て、上手に彈きおきたりける人の、今人の彈くを聞きて心得るやうなり。年頃も宮の彈き給ふを、20添ひ居て、彈かまほしうし給ひしものなれば、聊か苦しくも覺え給はず、御心に入れ給21ひつ

校異 1国細緒風、2異せ。3国ふ。4国試み給、国考異させ給。5イにアリ。6国風アリ。7国給ひアリ。8以下三字国習ひ果て。9一字国考異ひき。10イ彈きアリ。11以下四字イ遮り。五字國さへ聞かで。12國イと。13イ昔。14国たアリ。15イ琴。16國イ常。17国琴。18國イた。19国まだ。20國イも。21国へ。

る様限りなし。
又の日、宮より侍従の乳母の許に、「いと覺束なく、夜の間は如何あらんと1、習ひ給2ひつらんや。3え聞かぬも怪しうなん有りけるを、夜や彈き給4へらん。いと戀しうなん。有樣宮へ」とあり。櫻におはする程なりけり。「さるべき事あらんには、釣殿にて手5を叩け」と宣ひ置きければ、中納言といふ、よき若人なり、みやきと云ふ童に御文持たせて、釣殿へ行かんとて、御許達に、「さても6我7 8が覺えよ。人に異なり9し。かばかりの事を、手10叩きて呼び奉らんずるよ」など笑ふ。釣殿の南の端な11り、帽額の簾の12中に、長押の下に居て、童は勾欄に到りて13 14叩けば、大將おはしたり。見給ひて、「硯此所にありや」「侍ふ」とて參らすれば、御返、「畏まりてなん。御氣色のいと恐ろしう思ひ給へりしかば、え聞えさせで、覺束な15きは更に聞えさせん方なくこそ。如何と物せさせ給16ひつるは身に勝りてなん。これに覺束なき事は慰め侍りぬべかめるを、まことにいと哀にこそ見奉れ。なほ17も18 19事ぞとも思ひな20がらに、21秋の夜を眺め明かさん22とも、23束が〔〇答〕なん24つむやと宣はせためるは、戀し25と26侍る身をこそつみ侍れ」と聞えさせ給27へ、やがて人の居たる所までおはして、さし覗き給ひて、「大貳の君や。人々の28御中に菓物召させ

校異　1因なむアリ。2因へ。3因見。4因考異ひつ。5因鳴らせ。6国わ。7因らアリ。8イら。9イかアリ。10国鳴らし。11因る。12因ナシ。13因手アリ。14国鳴らせ。15イさ。16イへ。17イナシ。18因考異〳〵アリ。19以下十字因ナシ。20国らず。21二字因考異ナシ。22一字国事、國ナシ。二字因事は、因考異事とて。23イと。24國イへ。25国く。26イ侍め。27因ふ、因考異ひ。28因考異ナシ。

て、引き散らさせ給へ。胡簇六例の[1]打たんかし。後めたう覚えて宣ひたりける、只今の隙に[2]は、思ふやうに」とて、「弾き給ふべく見ゆ」とて、げに御心地よげに[3]思しておはしぬ。侍従の乳母と云ふは、嵯峨の院の御子の兵部卿にておはせしが御女なり。[4]此所行侍従の童にて[5]忍びがたきなりし[6]宮の御[7]同胞の宮の、いと忍びて、容貌いみじく美しげなれば遊び給ひしに、乳を[8]只何しまゐ〔ら〕(参)りけれど、乳母とすべき様ならずとて、名はつきたれど、宮のいとらうたき者にし給へけるなり、御返問え給ふめれば、「御琴はいとよく習はせ給ふにこそ侍れ。殿の御気色もいとよげにこそ見奉れ。浅ましく雲居遥かにてこそ、え[10]承り侍らね。帥の君聞えさせ給へ」と聞えつ。宮見給ひて、いと嬉しと思さる。「怪しの心ときめきや」とて打置き給ひつ。

例の夜さりの御宿直は、様に参らす。大将、「苦しくも聞え給ふ[11]さ[12]い[13]らに、侍従ばかりは召さん[14]よ」と帥ゑ給へば、「[15]いな。遊びをこそあらめ。なほこれを、宮の弾き給ふやうに月の見ゆるまでこそ弾かめ」と宣へば、いと嬉しと思さる。御宿直人下仕四人取り[16]續きて、宿直衣着て参る。上臈二人先に三尺の几帳さして、様に上りて参らす。御まかなひは、例の大将仕うまつり給へば、「あな見苦し。中納言[17]の侍従を」と宣ふ。

〔校〕1 倶イ雲。2 因てアリ。3 因仰せ。4 イ兵衛、因此の。5 因御宿直。6 因宮のアリ。7 因イ腹。8 因産らし走りこり。9 因る。10 因イとけこまけ。11 以下三字イ更、因さぼ此所。12 一字因は。13 一字因す。14 因に。15 イ雲、因御ひとな。16 イつぎ。17 因ナシ。

へば、「何か」とてまかなひ1〳〵參り給ふ。中納言は御2衣か3ひ取りて參りておほ〔〇下カ、居カ〕りぬ。犬宮の御方にも、同じきうるはしく裳唐衣著た4る御乳母二人あり。大將取りつぎて參り給ふ。御菓物ばかりを參りて、殊に參らすべきに、大將の居給5ひつる6を所に、かたちよく髮長くて、髮一本に結ひたる7を、此の童のよき程なる四人、かけ8そにして、南の方の山の、木の根に造りかけたる反橋の方より參らす。少し下りたる勾欄に出でて參る。繪に書きたる9いと10面白し。かくて、多く11も彈き習ひ給ひぬべけれど、夜更に、只日に二三を數へ奉り12給ひつゝ過ぐし給ふ。

13 14庭の山、前栽いと面白くなり行く。犬宮南の山の方を見15は〔〇出〕だし給ひて、獨語に、「宮諸共に、え見せ奉らぬよ」と宣ふを、大將聞き給ひて、いと哀と思して、「今、此の琴いとよく習はせ給ひてん時に、渡り給ひて、諸共に御覽ぜむ」とぞ宣ひし」と宣へば、恥かしうて物も宣はず。夕暮16間などに、內侍の督も大將も打休み給ひて聽き給へば、琴を習ひ給ふる、いとになく、聊か誤り違へ17る所もなく彈き給へり。二所ながらいと悲しくゆ18ゝしく19覺え給ふ。

如何なる時にかあらむ、督の大殿に、「下仕20面白や、及び21しやゝと聞え給へば、召した22り。23こ24そは

校異　1イし。2以下三字國含嗽。3国い。4異り。5イへ。因考異へりつ。6イナシ。7三字イ男。8因考異ナシ。9国ご。10因考異いとアリ。11因考異彈きも。12因ナシ。13因考異此所はアリ。14因日數添ふまゝに、因考異ナシ。15イい。16因ナシ。17因考異たアリ。18イか。19因考異思ひ。20五字イを召しちやを呼ば。21一字イば。三字國イナシ。22イる。23以下三字因考異去年より。24一字因れ。

奏らすやうに思ひたりしを、おぼろげにはあらじ。人々しう如何にやなど仰せられし。怪しき心に」など聞え給へば、「さて有り難くて、今よりしか教へ奉りたらんこそ、いとになき傳へならめ。こ1め宮達の、遊びにのみ心を入れたる、さておはする事。かの梨壺の宮は、いとな2ゝしう美しげにも書き給3ふ、書も讀み給ふなれば、春宮4おし(○教)へ奉らば、いとよくさやうにおはしぬべきを、皆人は、5ひき〴〵に思ひ6(い)どまれてある身なれば、宮達心に入れず、物習はし奉る人もなかめり」「たい〴〵しう、誰7はさは思ひ奉らん。か8はし(○學士)こそは明暮參りて仕うまつらめ」あて宮「いさや。先づいと怪しきは、學士には讀まじ。大將源中納言にこそ書も讀み、何事も習はめ。かほ醜き人には向は9じ、憎しとあめる。何でふ事ぞ。手ばかり10かは大將のもとあめりし、いとよう書き似せ給へるめりとぞ、11御主宣ふめり。書も何も行正の中將のをぞ貸し給ふ。いと心剛く今めかしき人々のをのみふさ12い給ふ、心づきなし。源中納言はしも、内々に聞けば、今より哀に宣ふ13とあめり」など聞え給ふ。殿は、「美しうもおはします」など聞14き給ひて、「此の人達は、皆宮をば限りなき物にこそ思ひ聞えさせ給ふめれ。中納言も、此の犬宮、同じ15詞の幼き16身こそ生み給17ひたるを、いみじうかしづき物にし給ふな18るが、いかで宮の御遊びに參らせんと思ふに、目に近きわたりの、19後に參り給へらんに、定めてこよなく思ひ貶さん事など宣ひながら、さる財の王の傳に

校異 1イの。2異つか。3因ひ。4因を。5因考異方々。6一字イニヨリテ補フ。7異か。8イく。9國ば。10因ナシ。11國見えしと。12國イは。13因も。14イえ。15イ程。16イ御子、國御子を。17因う。18一字イりし。19因内裏。

1んこそ、世に有難き節の御遊びの2ゝなど、めでたきを持たらひては、いと美しげたる3、賜べ、まろにと云ふにも見せじ。思ふやうありとぞ物4宣ふなる」など聞え給ひて、出で給ひぬ。

頭中將5いら、〔〇戯〕して歸り給ふとて、6餘所ながら車止めて見給ふに、げに此の樓、いといみじき見物にぞあるかしと、「いとらう〱じく叩きて、かく聞えて、ふと來ね」とて、

「かゝる人がやどを見んとて玉ぼこに目をつけんこそかたは人なれ

と思ひ給ふれば、罷り過ぎぬる。川原よりなん」とぞ、おどろ〱しう叩かせて宣へり。いといたく妬がり給ひて、

「九重をいかで分7けけん蘆づつのからき袂のくちをしき身は

よう過ぎさせ給へり。寄かせ給ふべき所もなくなん。まめやかには今自ら參りてなん」とて、うつしに乘せ給ひて、走らせ給8ひつれば、御門下り給はぬに、聞えけ9る。

〔國〕、此10（所）は内侍の督の御方に、右の大殿より白き色紙に、言多く恨み聞え給へり。大人童居並みたり。あざやかなる11裝束ども色々12雜ひたり。大宮の御方には、御櫛匣殿より、雜ひ重ねて、九日の[illegible]供に持て來たり。大人童几帳そばめつゝ、物語讀み遊びしためり。〔〇底本イ此所マデヲ繪詞トス〕

〔校異〕1イて。2イ師、イ具。3イがアリ。4イし給。5國は。6國イ三所。7イくら。8國へ。9國り。10一字イニヨリテ補フ。11國裝。12十九字國イナシ。

佛の御日、內侍の督御堂に參うで給ひて念誦し給ふ。御前にて年老いたる人1各香取り散らして、著き居たり。

大將內裏よりも2度々召あれば參り給ふ。先づ院に參り給へり。「いと覺束なしや。國々のなるべき文どもあなるものを。さなる大事あらん日は、參3らるべきものなり」「4いかゞ、走り參るべく侍5り」「6如何に7習ひ8心べからんや」「9しる、いとよく心得つべく侍り」と啓し給へれば、いとよう笑ませ給ひて、「うつくしき事かな。內侍の督のとゞめらるゝ手なめるを、皆彈き移したらんは、10心と思ふやうなるべきかな。さても何時ばかり習ひ給ふらん」「11くにつけて物し侍らば、と12ても13侍りぬべけれど、幼く物し給14ふは、心靜かに物を心得させつゝ侍るべけれ15ばなん。時の移るに隨ひて、曲の物などは習ふやうう侍れば、またさる節會などに參るべく侍16るべければ、すが〳〵とも得」「珍らし。げにさもあらん。いと面白かんなる。いかで見ん」と宣はす。女御の里にぞおはしける。17夜さり宮におはしたりけるに、二18宮と遊び給ひて聞き入れ給はず。「院の內に久しう侍ひて苦しう侍るを、犬宮の御事も聞えん」と宣へば、二19宮かたはら痛がりて入り給ひぬ。むづかる〳〵出で給へり。大將20打見聞え給へば、「逆様なりや。人の21か見聞かん

校異 1イ名々、因名、因名。2國イどゞ。3イナシ。4因答へ。5因る。6因犬こそアリ。7因琴アリ。8イつ。9イしか、因考異答へ。10因い。11イ公、因心。12イく。13因果てアリ。14因へば。15國イや。16イり。17因夜。18因のアリ。19因のアリ。20イ恨み。21イナシ。

事こそ恥かしき。いと嬉しきに、見でぬ無期にあらん」大将「今御物忌などのついでに。いとむつかし。人
人物し侍1り。それに暇のいるべく侍2るぞなん」「さて如何」「いとうつくしう弾き給3へるめり」など聞
え給ふ。暁に右の大殿に4。宮5君も若君も珍らしがり悦び給ふ。6右大殿7の「淋ましく覚束なく、果て
は御返もなかめり。いと覚束なきをば、九日の物忌しにいと忍びて物せん」と8、「よう侍なりと菊の9宴な
れば、參るべく侍り」など聞え給ひて、たい10らんに立ちながら「如何に」など聞え給ふ。つれづれに見え給
ふ猶暇なれば、暇案司11始めて、菓物さるべき物など、御方々に參らせ給ひて、急ぎおはしぬ。
かくて、檀の色々いとをかしくなり行くを見給ひて、「12色のもかくやあらん。宮見奉り給13ひつるか。或
しうしも忘せよと宣ひしを、今は忘れやし給ひぬらん。御文14も賜へかし」と宣ふまゝに泣き給ひぬべけれ
ば、「な泣き給ひそ。御文侍り。それには、15よく習ひ給ふや。今はさらば16渡り給ひて見奉らんとなん侍り
つる」と聞え給へば、いと嬉しと思ひ給ひて、いとよう弾き給へり。いと心苦しう、道理なりとて、面白き
曲ども17取りて見せ奉り給へど、殊に例のやうにも見給はで、心にしみて琴を弾き給ふ。月のいと明かに、
空澄み渡りて静かなるに、山の18木陰水の聲、19やうやう風涼しく打吹き立てたるに、いとおとな20くしう

【校異】1闕ぐ。2渇りて。3イふべか。4イ參り給ふアリ。5イのアリ。6国ナシ。7国ナシ。8国宣ふアリ。
9宣。10一字イる、異ば、国め。二字衍考異め。11イばら召し、国ども召し。12イ宮野、国宮の。13
賓へ。14国イナシ。15国か。16五字国イナシ。17イもて、国取う出。18国イ行。19国イつか。20イく、
国ナシ。

彈き合はせ給へるを、大將督の大殿も、折も心細くなりゆくに、涙落ちて、1事の心2さし隔てまつり給3ひ4泣き給ふ氣色を、犬宮、「まろを宣へど、宮穏しく覺え給ふべかめり。母君も泣き給ふか」と内侍の督5に聞え給へば、皆いとをかしくなり給ひぬ。「苦しう思ひ給ふらん」とて、「下へ」と6聞え給へば、「月あかきには、なほ7見て久しう彈かん」とて、夜中までおはす。下り給ふにも、犬宮を樓の端まで8抱き奉り給ひて、乳母人々參る、抱き移させ給ひて、督の大殿の御手かけさせ給ひつゝ、下し奉り給ふ。「人々あるものを」と宣へば、「かくおはしますだにいと畏きを、異人の兒ならば、かくもおはしますまじけれど、院の御心ばへのいと忝く萬におはしますに、かひ有りて、心殊に思ひ給ふる程に、いと9け〔○不〕便に侍10り」と申し給ひて、例の御送りし給ひて、「11物聞し召さ12ざめる、いと〳〵惡しき事」とて、手づからさるべき樣に調じて參り給ふとておはしぬ。

かく心得給ふまゝ13、いと畏く、聊か苦しと14思し15立てで、萬の折々にし16かから曲の物彈き給ふ樣いと惡し17く、前栽も山の木どもも紅葉ち18、爐の紅葉今色づく、樣々に面白く、風やう〳〵荒19々し、山の中より落つる瀧も、靜かなる所にて聞き給へば、萬物の音に合ひて哀なり。督の殿、昔思ひ出で給ふ事多くて、

校異 1 三字因琴。2 イ教へ、添り、因教へさし。3 国ふ。4 因てアリ。5 國イナシ。6 因てアリ。7 因寢で。8 一字因抱。二字國イナシ。9 イふ。10 因る。11 國イナシ。12 国せけ。13 国にアリ。14 國覺え。15 イたら。16 イるから、因るう。17 イナシ。18 イしアリ。19 一字イく、二字因く。

「何方ぞや、1木の葉高くてあるに憂しと宣ひしは」と宣ふまゝに、涙こぼれ給ふ。大將「かの未申の山よりこそ醒り歩きしか」と聞え給ふ。御硯引き寄せて、

　山おろし2の風もつらくぞ思ほえし木の葉もみち〔○紅葉カ、道カ〕もや3ゝと見しかば

と書き付けてを〔○置カ、起カ〕き給ふ心地も4ふと悲し。

　引き當てゝ峯たに分けし心には紅葉の錦を事とやはせし

疊に哀に思す事限りなし。大宮も、楓の琴の上に散りおほひたるを、

　まろが彈く羨ましとや5此の上に楓も

と6は7ゝり8、「9はつか10と11ぞ思ふ」と宣ひて、末も宣はぬを、督の12殿、「如何にか。なほ宣はせよく」と13て、

　かゝる音を彈かん14

と宣はす。木の葉15松風の荒き音に、いとかしこく合はせて彈き給へるを、大將かなしう聞きおはす。十月時雨に紅葉掻き16くづし、とゞまる17東かれはれなり。大將、督の大殿打休み給へるやうなる折なり、

校語　1イ此の時か。2国イナシ。3イく。4国い。5イ琴。6以下二字国ばか。7二字イに歟。〔○イハ以下歌詞トスルカ〕8因宣ひてアリ。9以下二字イ散る歟。三字異恥かし。10以下四字因ナシ。11一字国ナシ。12因イほ。13因宣へば。14因とかアリ。15因散る。16因茂く。17イ木の葉稀。

もを、記しおき給へる1時は、肝絶2らて悲しき事數知らず、大將の御有樣、公私の天下3童の才容絶心有樣を見聞く4、少し思ひ慰む心地すれど、これをゑ見せ聞かせ奉らぬ、悲しうかひなき事、如何なる人か5み6こと〔○帝〕と申すとも、さらぬ人も、八九十餘までの命有りて、めでたき末の世をも飽くまで見給ふ7ならん、心憂く悲しくもあれと思ひ續けて悲し。如何なる身とかなり給8へらん、一生の間歌を9も10見給ふ11、わづかに誦じ12寄せ給ひし法師しても讀みか13ら〔○講〕ぜさせ給ひし提婆品最勝王經、此所にして日々にかの御爲めに讀ませせん、14世界はか15くせ16む、やう／＼17年もねび行く身に、限りては思ふ事もなし、心靜かにて、我も18陀羅尼念じ奉る事せん、すべて萬に尊からん事、いかで此所にてせんなど、來し方行く末まで哀によろづ思ひ臥し給ふ。

かくて宮に、大將覺束なく哀に覺え給へど、限りなき大事を夜晝思ひ給ひて過ぐし給ふ。月に四五日交ぜ19になど、夜おはすれど、宮、「戀しき人をだに見ぬに、見20まほしの樣や」とて、格子もあげさせ給はねば「怪しき勘當かな」とて、勾欄に居明かしつゝ歸り給ふ。右21大殿、さるべき折やとて、22とくとも23あればおはすれど、督の殿、「若き人だに24子を思ひて、打ち延へ獨り臥25をせらるゝに、いと見苦しからん」とて

校異　1 國日記。2 イえ。3 イにての、國にて一の、國にて。4 國にアリ。5 國イか。6 イかど。7 イあ、國ナシ。8 國ひつ。9 以下二字國詠み。10 一字イ讀み。11 國考異はアリ。12 國さ。13 イう。14 國施餓鬼。15 國考異か。16 イさせアリ。17 國イとして。18 イ絶えず。19 國などに。20 國苦。21 國のアリ。22 イナシ。23 イす。24 國イな。25 イ物。

積みたり。人々、「此の年頃、いとかゝる雪は降らずかし。これに歩きたるをば、おぼろげならずかし」と云ふを、督の殿、哀昔かゝる年ありきかし。いとさる1にはいかでか2ふ「〇ら」言ふなゝ開かで、山へこそ3行かざらめ、川4釣ら5めとて、強ひて歩み出でておはせしを思ひ出で給ふに、雨の脚よりもけに6多7し。ひに涙の落ち給ふも、ゆゝしう覺え給へど、え念じ給はで、

山8はさえ川邊の氷雪しみて涙の雨と降りし9やるかな

と覺え給ふを、犬宮、「な泣き給ひそ。まろも念じてこそあれ」と聞え給へば、大殿「宮をばいと戀しうや思ひ聞え給ふ。いかゞ10はや」「11降りし雪の降るまで見奉らねば、いと侘びしけれど、12きゝのな泣きそと宣へば。宮は雪をぞ山に作らせ給ひて、まろと二13宮と14は竝15べて見侍りしかし」と宣ふまゝに泣き給ひぬべければ、異事にまぎらはし給へば、いと黒う艶かなる御衣に、薄蘇枋の唐綾の御細長に映えて、清らに、いよ／＼美しげになりまさり給ふ。雪16山造らせ給ひて、17雛遊など諸共にして見せ奉り給ふ。大将人よりもと18ゝ宮に罷出給へるに、例の入れ奉り給はず。19侘びて、源中納言の方におはして、「身もすくみ20にて侍りや」とて、21絹え入り22給ふ23に、「げにいみじう侍り。24輝くやうにぞしつらひたりける25」

校異 1国ナシ。2異と。3国入ら。4イへ入、国へこそ入。5國げ。6イこぼ。7因う袖。8國イネ。9国める、因宿。10イありし、国ぞや。11一字国あ。三字因ナシ。12一字イま。二字国君。13因のアリ。14因ナシ。15因び。16國イに。17因雛。18イく。19異笑ひ。20因考異ナシ。21因たゞ。22因に入りアリ。23イナシ。24因かゝる。25因やとアリ。

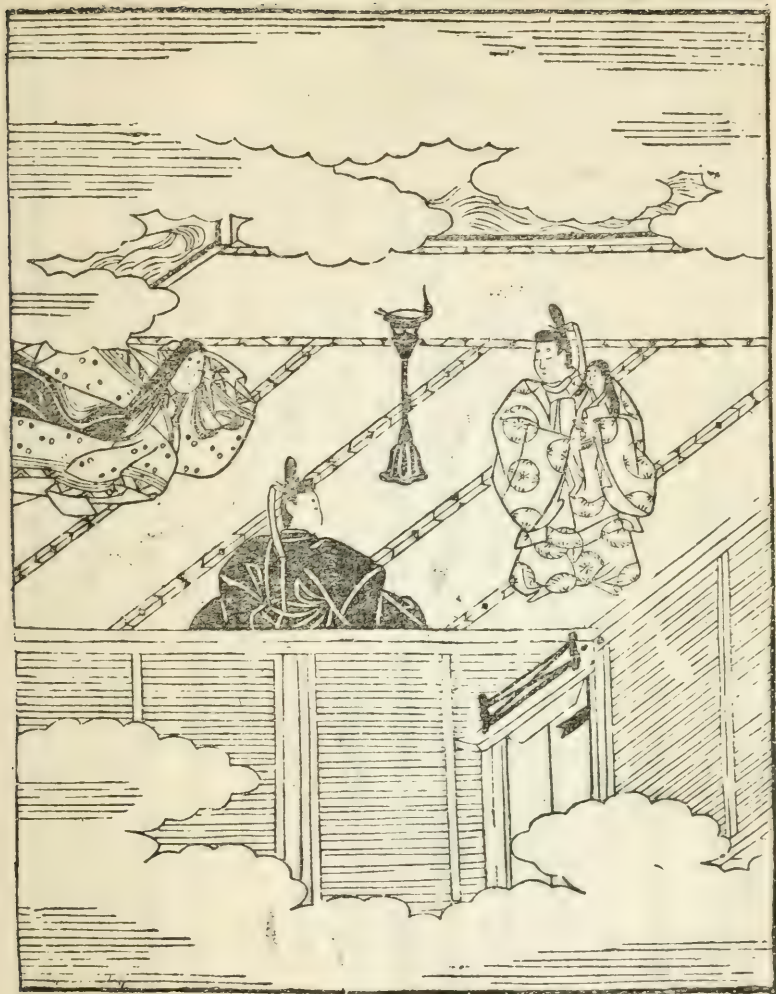
笑ひ給ひて、「先づ御衣設けさせ給へ」と1て2寄り3つゝ、屏風にかけさせ給へば、「いと怪しう、女房にな
し給はんやことて。中納言、「身に餘りたる4な事したらん人ぞさはあらん。擬屑の人は」など5て笑ふ／＼、
御前の長御櫃の火多く起させ給ひて、御衣架に懸けたる袿ども6五つ引き襲ねて、「これは濡れず」とて着7
給へれば、「例の物狂はしさ。今大人／＼しう8にはせんや。さてもいみじき宮の御心かな。さはれいと嬉
しき夜なりか、誰共に9明かさん。」など疎くもぞ思す。例のまゝにてあらんかし。いづら10寝11しもまた物
も12食ますや。師の君、13灯寄かあり。御賄せられよ。中納言14君達15し。「いづら／＼」と宣へば、「いと
わりなき世かな。さば如何はせん」とて、色打目16にもえならぬめでた17き18装束きて、師の君三尺の几帳
引き添へてゐざり出でたり。よき童べの容いと鮮かにて、灯よき程に取りなさせて、御達は參らせ給ふ。大
將は恥かしと思ふらんとて、打ちゑばみて居給へり。師の君をばいとやむごとなく、大納言の御女にて、心
殊にして、我だに賄もせさせずと宣ひし物を、いとほしう思す。中納言の君と云ふは、周方が19（たゞ（のりなき））
より、主殿の御達參る。童べもこれは又ことなり。いづれとなく淸げに目留まりぬばかりなり。大將後向
きながら、「誰のこら21人に22 23はか24り25し26ふ27のやくはし給ふや」と宣へば、「常よりや」と忍びやかに聞

［校異］1以下二字兩取。2一字田取。3着て。4イナシ。5安ナシ。6異をアリ。7兩せアリ。8イお。9イ
り。10以下三字イ女房ら。11閑く。12兩考異たば。13玉日暮るゝを、要日暮るゝな。14イのアリ。15國
イて。16高など、國イナシ。17國く。18國イさこ。19一字イニヨリテ補フ。20國う。21兩考異師の君。
22國もアリ。23一字イも。以下五字兩考異いと恭しや行き所もなくとかうし。24一字脱く。25兩考異し
アリ、兩考異てアリ。26一字イナシ、要ひ。27兩考異なアリ。

え給へば、「さて何ぞ。殿上も許し聞えんかし」と宣へば、中納言、「いと辛き事」とて皆笑ひ給ひぬ。御藥參り、御菓物など參り1て2給ひて、二所臥し給ひて、中納言、「子3守臭からぬ衾4取て來」とて、香の唐櫃よりしみかへりたる持て參りたれば、二所打ち著給ひて、樣々にをかしう怪しき御物語し給ひて、中納言、「いで、その督の殿の手の限り彈き給ふらん聞かせ給へ。6物習ひ給6はん程も聞かまほしきものかな。夜7習ひ給はん程も」「易き事、さて御姫君には何をかは敎ふる」「琴のはしを8調べんかしと思ひしかど、中々なる事は知らせじとて、腹立たしくて、異事は9惜しうともとてなん」「あひなの御事や。萬の事よりも、かの琴彈かざらんをば何にか10せん。いでまろい11にて見奉らん。さらずとも、12大宮とひとしく敎へ奉らんな」「1314弄じ給15ふぞ」「16い17な18ゝち19秋にも打ち殺され奉らん。眞實20ぞとよ」中納言21の「御傳はしも、げに必ずさるべき事ならん。これはわざとならずともあへなん。先づ／＼顏いと醜し。心劣りし給ひなん」22と23い聞え給ひながら、いみじう我24々のみになきものをと思ひ給ふに、我も物を見知らずやはある、內侍の典の言ひしやうに、げにあなめでたと花やかなる事の少し25も劣ら26め、なべては此のわたりに

校異　1国給ひアリ。2異罷出アリ、国皆罷出アリ。3国持。4イ持。5因考異世に。6因考異ひて。7因考異々あり。8国知らせ。9一字国をか。三字因敎ふ。10因はアリ。11イかで。12異犬。13國なアリ。14因習はし。15因ひそ。16イナシ。以下三字因考異かぐつ。17以下二字因かづ。18二字國ゝし。19イ神、因の神、國神々。20因にアリ。21因ナシ。22以下二字因考異など。23イは。24国ナシ、因考異ら、因考異と。25因考異ぞ。26因考異ぬ、因考異ず。

も、またかば1（か）りの容貌はあらじし、これも怪しうはあらざりけり2とも3や見せ奉らんと思ひ給ひて、如何にせましと思ひ給ふに、「まろがいとよ4〔く〕清らかに見給ひてしを、よ5るなり、勝6る佛な7ど見せ給へ。内侍の典の聞えしは、見苦しう、またあやめも見えざりしをだに、かの大宮見ては、此の離れゆかしく、これに添りては、また大宮並べてゆかしうなんある。行く末の人も今さにぞ8（き）こ〔○聞〕えんと言ひし。かた9にも勝まじう見奉らんかし」と10て、をづ〳〵宣11へば、「大宮は不意にこそたゞかたはらの御姿を見奉りし12か。内侍の典は人に心13劣りせさせて物言ふさかな者なり。さても母君と畫かき給ふめりつるを」と宣へば、大將、「それこそよかなれ。忍びて率ておはして覗かせ給へ〳〵」中納言打笑ひて、「をかしの事や。掘れ者とこそ見給14へれ。さはれ覗され奉らんかし。伯父主達に夢にも見せぬものを」とて、起きてにはかに入りおはして、畫かくとて居給へるを、傍よりふと搔き抱きて、灯の程開半ばかり離りてつい据ゑ奉り給へる容態頭つき、げにいみじうあてに靡やかなり。「いで〳〵」とておはすれば、いと穢まし15と心地し給ひて、立ちて中納言の御方に踊り給ふ程、大宮の御丈にて、髪はいます16う〔○少〕し17ろ丈にはづれ給へる。これに容態小さながら、大人にて、いみじう美しう、中々飽かず覺え給ふ。「18惜しよ」とて、抱きて立ち給へば、「燈臺の灯の明きに、その御顔19」と宣へば、「いかでか、20さまでは」とて抱きながら立ち給21ひつる、

【校異】1一字イニヨリテ補フ。2変今。3イしアリ。4イ明。5イか。6イか。7異ほ。8一字イニヨリテ補フ。9イみに。10因考異かたみに。11内考異ふ。12図ナシ。13異徽。14図ひつ。15イき。16イと。17イぞ、因考異うしろ、因考異そこし。18惜いとほ。19イよアリ。20国く。21図へ。

つや〳〵として、纐のいと薄き唐綾の袿にかゝりたる御髪、尾花の末のやうなり。いとなまめかしき容貌なり。火の明き方に置かくとて獨1(り)居給へりける、事もなげなり。急ぎて入り給ひぬ。犬宮2いと幼げに見ゆ。額し給ひて、け高う勝れ給へる、3げに4今宵しかじと覺え給5ふ。さま宮「いと淺ましく6めでたかなる事どもとて、顔立ち給へば、つい探ゑて逃げて出で給へば、「物に狂ひ給ふためり。萬の人を集めて見せんよりも、此大將には、かゝるわざ7はし給はましや。目見合はせ奉るや」と8て宣ふを、「しか〳〵なん侮りつる。いみじう驚かれなん。いとうたて、し9ふねに10空口11持給へるを、渡りにこそあめれ」とて12怖ぢ驚き給へば、「吾が侍。なほおはせよ。怪しうはあらじ。さても美し13げなる御容貌かな。宮14物同じ年にこそ生まれ給ひし。御髪長15き優り16つ。容貌同じ程を、今少し許り優り給へりと、まろは思ふ事なきを、誰にかはかく17なし聞え許りの女持給18つる。19多からじかし」「左衛門督20いとよしと21」大將、「22いで、さりともえ人23しかじ」な24んど物語り明かし給ひて明けぬ。「此の殿に何事をかまことは仕うまつらん」「異事もなし。25なせに内侍26(の)督の27殿の手の限り彈き盡くし給へらん、犬宮の習ひ28侍給へらむ29は、い

【校異】1 一字イニヨリテ補フ。2 宮のアリ。3 イナシ。4 イこよなしかし。5 玄へれ君。6 図珍ら。7 玄考異ナシ。8 玄ナシ。9 国常。10 國イそう。11 国し。12 イ打ち。13 玄考異き。14 図のもし。15 イさ。16 三字図御かたち、玄考異書陵。17 玄許りめでたき。18 玄へ。19 玄考異覺え。20 図のアリ。21 図かアリ。22 図考異書へ。23 イ知ら。24 図ナシ。25 図なほも、図たゞに。26 一字イニヨリテ補フ。27 異大殿。28 イナシ、国果て。29 イそ。

と聞きあはせまほし1よ」「いと易き事」と宣ひて、「暫し」と聞え給へど、急ぎ2起き給ひて、宮の御方にお
はして、寝給へる間に當りたる格子を打ち叩きて、
「巣守子のか3けらぬ程は冬の夜の鴨の浮き寝ぞ侘びしかりける
さ4も生憎き月を見るかな」と、をかしき聲して詠みかけておはしぬ。聞き給へど「憎し」とて返しも宣はず。
まめやかに月日に添へて、古へ戀しう宮も思す。中納言いかゞ淺ましとて物も聞え給はず。
十二月少し明らか5になる折有りて、6籠り難き大將渡らせ給7へ。「年の始めに獨り8侍9りて、10惡し
か11べし(〇押し返しカ)」、そなたにと思ひ給12ひつるは、後めた13な14く聞え侍るべし」と聞え給へれ15ど、
「院の女御殿辛16こじて17任せ給ひて、18年返し給19(ふ)べければ20なん。犬宮、御車ながら見ん、此方に」
と宣へれど、「御子達のおはす21るに便なし」とて聞き給はず。國々の御22莊より節料に人の奉る絹綿など23
の、督の24君25達、御許人下26に侍ふ人々に、例の御節料より外に、いといかめしう分ち給ふ。女御殿の御
方に、いとうるはしうて、様々に27奉らせ給ふ。三條殿の對におはする御方々28の宮29君の御30許にも色々

校異 1イき。2國イナシ。3図へ。4図てアリ。5図ナシ。6図懲りずまに。7イひつ。8以下二字図居。9以下二字図る。10乗借く。11国るアリ。12図へ。13国ナシ。14図考異う。15図ば。16イら。17イ能出。18イこし、異とく、図牛。19一字イニヨリテ補フ。20図考異便なし。21図考異れば。22図莊。23一字イナシ。二字図考異を上。24図殿アリ。25図考異の。26國イと。27國イきてまつ。28イナシ。29図のアリ。30図方。

に奉り給ふ。内侍の督1の對の宰相殿の御方、なまめかしき様にて物奉り給ふ。御使人々召2(し)て、纓の緒の細長かづけ給3へる、様々に持て4出づれども、又同じごと、御前の庭のはる〴〵と廣きに、三百許り様々にをかしき5鳥ども添へて置き集めたる、例の有様ならず。み6 7の8こなど、いろ〳〵見所有り9調じた10る、督の殿見11ねに、大臣の所にだに、いとかくはあらず、いかめしと見給ふ。院春宮12まより得給ふ物、いときら〳〵し。入道の君の御許、忠君僧都の御許に奉り給ふ。

正月13三日には内裏院春宮大后の宮など14に參り給ふ。御前いといかめしう、御方々の人々物しう見奉15り、宮におはしまして、大宮の御方、次に女御君拜し奉り給ふ。女御、「若うより帝を見奉る。などかはする。此の大將見ることそ哀ならねど、怪しう16やしう恥かしう、命延ぶる17心地すれ」宮の御方に18人爲へば、19分けて女御の御方におはすれば、「こは何ぞ」と見苦しがり聞え給はすれば、「20宮、「大宮おはするまでは見えじとて、去年の秋よりかくなん。靈壺に宣ふらんも恥かしとて、如何に21怨じ聞え給22へば」と聞え給ふ。「げに餘り生憎23く怪しきわざなり」とて、かく24聞え給ふ。「身をつみ給は25むとこそ。身には思ひ聞えん程は思ひまじくや。侍らじとあめること26はり27となん」大將打笑ひ給ひて、「な28ろ(〇伸し)思こ

校異 1 閑ナシ。2 一字イニヨリテ補フ。3 閑ふ。4 閑イい。5 閑物。6 閑遊びアリ。7 イ遊。8 閑具。9 閑てアリ。10 閑り。11 イ給ふ。12 イ御方、閑の御方。13 閑正月。14 イへ。15 イる。16 一字異恥 考異本。三字イナシ。17 閑イこゝ。18 イ入れ給。19 イ蹴げ。20 閑りアリ。21 イえしも、閑え…とも。22 イはず。23 閑に。24 閑イこゝ。25 閑じ。26 閑お。27 閑に。28 イ必。

そ愁へ聞えさせんと思ふ給ふ事侍れ。如何に聞えさせ給へればか1、年の始によろしからん様に宣はすらん。ゆゝしう侍るを、二日2はなほ渡らせ給ふべく聞えさせ給へ」とあれば、宮3々、「世の常ならず心ある人ならば、さりとも皆思ふ給ふやうあらん。なほ早渡り給4へ」と聞え給へど、寄り臥し給ひぬ。女御5大君6に、御菓物7の中の打敷二8枚して參らせ給9ふめれど、參らず出で給ひぬ。中納言立ちながら對10面し給へり。「女御の君おはすれば、如何に、さりとも御對11面は有りつらんな」「さも侍らず。は12ゝ〔○腹〕立たしけれ13ば、急ぎ罷出る14も」中納言「悔しき事をして、その儘にまた目も見合はせられ15で、片言に取り放16たれにた17り」「怪しかりける事を、うたてこそ憎き御心なれ」中納言「かの國讓の事18思し給はず19。帝をだに事ともせられぬ、かのわたり20は」と宣へば、「いでやかの御心に似給へるこそは、いと憎き事なれ。あなか21さや。まろ22う23はからなんやうに、なほあるばかりぞ」など24て出で給ひぬ。左25右26大殿27の厄28年におはするとて、大29饗せられ30ぬは、今二所も、「何かは」とてあれば、「さうぐ〳〵しかるべ31い年かな」と人言ふ。晦日方に、「子の日せよ」とて、二方の人々數多32あり、山に歩33うせ給ふ。日のどかに

校異　1國イナシ。2國イナシ。3イえ、因ナシ。4國イや。5一字イの。二字因考異より大將殿。6イナシ、因より。7因を。8因つ四つ。9因へ。10因面。11因面。12イら。13因ど。14イと、因なり、因考異ナシ。15因ず。16イナシ。17國イる。18イ覺え。19因やアリ。20國イとは。21イま。22イら、因が。23因たら。24國イぞ。25因のアリ。26國右。27因考異は忌み給ふ。28國イね。29異饗、因饗。30イねば。31因き。32イナシ。33イか。

掛けさせ給ふにつけて、盡きせず思ひ給ふる。あなかしこ」と聞え給ふ。かたみに哀に覺え給ふ。
五月節供、右1大殿より2あり。宮の御方の女御に3遣り給ふ。此の4物も、心殊5にな6くて參らせ給へり。君達下仕までも、御頂いと淸げなり。例も督の殿の御節句は7くらてぞ參り給ひける。今は長雨がちなり。靜やかに降り8て暮らす9日、郭公かすかに鳴きわた10り、月ほのかに見えたり。三所ながら靜かに彈き合はせ給11ひつる、いと面白し。此方彼方の人は泉殿に出でて聞く。殿の人々の中にも12とよく琴習ひたる數多あり。何れと聞き分き奉らず。今手の限りを盡くして彈き止めたる折につけつゝ、琴をかへて彈き給ふ。靜かなる音高う響き出で、土の下まで響13く音す。哀に心すごき事限りなし。
六月暑けれど、樓の上は山高き木どもの風いみじう涼し。大宮白き薄物14の單襲著給へり。晦日に御祓し給ひに、二所ながら御前い15るめしうて、河原に出で給へり。右大殿の梨壺の御子も率て出で奉り給へり。大殿の御16孫17に參うで給へ18る程に、平張いと近し。御子君若君と遊び給ひて、「いざ、かの平張に行かん」と宣ひて、御19こ〔○簾〕ふ20に掲げて入りおはします。大宮督の殿の御傍に、三21尺の几帳立てゝ居給へるに、さし覗き給へる、打見合はせ給22へば、ふと後向き給ふに、内侍23〔の〕督打驚き給ひて、胸塞が

校異 1因のアリ。2國イナシ　3因も贈。4イ殿、因殿の。5因にアリ。6イし。7イ暮らして、国暗らうて、因藏人。8因ナシ。9国ナシ。10異る。11イへ。12因いアリ。13國イき。14因ナシ。15イか。16因孫。17因も、國イナシ。18國イり。19イす。20イと。21因尺。22因考異ふ、國イひつ。23一字イニヨリテ補フ。

引かせ給へり。乳母の君も二人して袙許り著て、童べ取り次ぎたり。御髮心もとなしと宣ひし、丈になり給ひにけり。御容貌も變化の物のやうになり勝り給ふ。七夕祭彼方此方とせさせ給へり。內侍の督、七夕に今宵の御供の物少し彈きて奉らん、靜かなる所なりと思すに、一方に君達[1]人々[2]反橋に几帳許りを立てゝ出で居[3]したり。宵少し過る程に、源中納言狩の裝にて、馬にておはして、南の[4]山[5]び[6]榊の[7]外におはして、御座敷[8]るせて、傘かつ木の空洞に置き給ふ。しなん風[10]はし風を我彈き給ひ、ほそを[11]を犬宮、りうかく[12]を大將に奉り給ひて、[13]たくの物たゞ一つを同じ聲にて彈き給ふ[14]。世に知らぬまで空に高う響く。萬の鼓、樂の物の笛箏彈物一人して搔き合はせたる音して響き上る。面白きに、聞く人空に浮むやうなり。星ども騷ぎて、雷鳴らんずるやうにてひらめき騷ぐ。かつは如何にせむと覺え給へど、聞きさし給ふべくはたあらず。御供なる左衛門尉なる者に、太刀を拔かせて聞き給ふ。樣々に面白き聲々の哀なる音、[16][15]（お）な（〇同）じ聲にて、命延び世の[17]榮を見給ふやうなり。わりなく[18]も、かくて聞かざらましかば、如何に口惜しからましと覺え給ふ。左衛門[19]尉は天を仰ぎて聞き居たり。夜いたう更けぬれば、七日の月今は入

校異　1國のアリ。2國達。3因給へ。4以下三字國イ檜垣垣。5一字イの。6因離。7国もと。8イか。9以下五字因ひ、頰杖つきておはす、氣色だつ風冷やかに打吹く程に、督の殿「いざや御供彈き奉りなん」とて。10三字イナシ。11因風アリ。12因風アリ。13イ曲。14因にアリ。15因考異きわざに。16一字イニヨリテ補フ。17國イさかう。18イてアリ。19因のアリ。

るべきに、光たちまちに明かになりて、かの樓の上と覺しきにあたり1て輝く。雷鳴かに鳴りゆきて、月のめぐりに星集まるめり。世になら芳しき風吹き包はしたり。少し寐入りたる人々目覺めて異事2覺えず、空に向ひて見聞く。樓のめぐりはまして種々に珍らしう、芳しき香滿ちたり。3三所ながら大將おはする樓の上にて彈き給ふなり4。下を見5下し給へば、月の光に前栽の露玉を敷きたるやうなり。琴6澄み音高き事風れたる琴なれば、聲の大殿忍びて音の限りもえ搔き鳴らし給はず。色々の雲月のめぐりに立ち舞ひて、琴の聲高くなる時は、月星雲も騒がしくて、静かになる折はのどかなる7なり。開き給ふに働くべき世な8う、曉までも聞かんと思すに、夜中多く過ぐる程に彈き止み給ひぬ。大將次に横笛を曉の出づる限り吹き給ふ。面白き折にあひて、哀にすごう、これも世になく聞ゆ。聞き驚き給ひて、笛に昔我と爭しうこそありしか、殊に好み給はずと聞くに、いとこよなう優り給ひにけりと賤ましう驚き給ふ。曉になりゆく。空靜まりのどかなるに、治部卿の9集10の書の中に、唐土より知らぬ國に到りて、11下りて道を行き給ひけるに、いみじう哀に面白き所々に、四季の花咲き亂れ、ある所には恐ろしくいみじき容貌したる物集まりてあるわたりを過ぎ給ふとて、道のまゝに長く與び續けて、哀なる聲を出だして12誦じ給へる、又13經て後、家の懷しきを眺めて、時につけつゝ作り集め給へる詩を14誦じ給へる、聞き知らぬ人だに淚落さぬはなき15に、まして大將の

【頭注】1 契考異照り。2 國イ思す。3 廿一字契考異ナシ。4 實けりアリ。5 契考異田た。6 國イすと。7 イか。
8 國イり明くる月。9 國主。10 二字契考異ナン。11 契知らぬ。12 國誦し。13 イ歸り。14 契誦し。15 イを。

此の所にて1誦じ給へるは、聲より始めて面白う哀なるに、御直衣の袖まして絞る許りになる。琴の聲樂の聲諸聲にしみたり。諸き2こ覺え給へど、音せずなりぬれば、飽かで歸り給ふ。道のまゝ世3中いとはかなくも哀にて、紀伊國に年經給ひしなど、萬思ひ續けられ給ふ。大將も打臥し給ふ。督の殿も琴に4手を打かけて、聊か寐入り給ふともなき程に、見給ふやう、「昔の物の聲の、さも哀に珍らしゝ聞き侍りつるかな。大將も御樂の聲も哀に悲しうなん。さて今日5門6よ參らん人、必ず召し入れて見給ふべき人なり」と治部卿の御聲なり。答聞え給はんとする程に覺めて、いみじう泣き給ふ。大將まだ寢給はねば、怪しと驚き申し給へば、「いと哀なる事をなん見つる。覺れ給ひて後、夢にだに見え給へと、心細う侘びしかりしまゝに思ひしかど、絕えてなん見え給はざりしに、7只今かくなん見え給8ひつる。此のなん風9はし風は、中に勝れて面白き物にし給ひしを、10木の空洞より出でんとせし11 12と、13さては4昨夜こそ聊か掻き鳴らしつるを聞き給ひけるか。哀なる詩を15誦じ給ひ16しも聞き給ひける17よ。いみじう悲しうなん覺ゆる」とて泣き給ふ。大將も聞き給ひける事と、悲しくて泣き給ふ、道理なり。「人の事、如何なる事ならん。かゝるを見給ひけると思ふなんかひはなけれど、いと哀に嬉しう」など聞え給ふ。御門には、つとめてより、18さべき人

校異 1 因誦し。2 因ず。3 因のアリ。4 國イナシ。5 因御アリ。6 イに。7 因考異ナシ。8 イへ。9 三字因ナシ。10 因か。11 イ時アリ。12 因時。13 國き。14 國イうべ。15 因誦ず。16 因考異けるを。17 因考異にこそ。18 國イう。

人に宣ひて、「如何にもあれ、人の来ん、かくなんと申せ」と宣ひて、今日は寝殿におはす。西の時許りに、車の1門に、馬に乗りたる男、童四人2虫垂れたる3る4人来て、下りて、向なる御厩にて、御門5い〇居りたる人に問はす、「此の殿をば何とか申す」と云へば、「大将殿となん申す」と云ふに、「此の殿に昔より住み給ふ人や聞き給ふ」と問はす。「治部卿の殿となん申し侍りし」と云へば、「此方に物6し給へ」とて自ら逢ひて、「吾が侍。いと嬉しう答へ給7ひける」とて、「かの御夫の後か」8に云へば、「しか。此の御9甥父10のおはします11か」と12云ふ。「さ13るべき古き家司、御厨子所に切に訴へ申すべき事侍るとてなん、昔此の殿に侍ひし下人なん参りたると、これ申14し通し給へ。一生の君と仕うまつり喜び申さん」と云ふ。「かくなむ15」と申16(せ)ば、大将17呼び給ひて、「あるやうあらん」とて、先づ寝殿なる人對に下させ給ひて、我出で給ひて、「ただ此所に参れと云へ」と召し入る。喜びて、いとをかしげなる童の丈四尺に足らぬ程18、髪許りにていと19一尋ひたる、いと清げに20装束かせて、四人後に立てゝ参りたり。これもいと清げに21装束きて、目22さし23整して具したる様、いとゆゑ24くし。年四十許りなり。北の廂に召し大殿大将25君もおはす。大将を見奉るに、げに恐ろしきまで清げに気高う見えて上らず。いと気様かしう、「此方や」と宣へ

[頭注]1 閣門アリ。2 閣具し、類考異略垂れ。3 下りつアリ。4 閣考異人アリ。5 閣ス。6 閣イ宣。7 閣へ。8 イと聞、B とつ。9 閣侍。10 イに聞。11 イナシ。12 閣答、謹答。13 閣げ。14 更すと取申、更考異すと申。15 閣とアリ。16 一字闕ニヨリテ補フ。17 閣開キ。18 閣考異にアリ。19 ひとして、更考異ひとしう。20 果装。21 閣装。22 以下四字閣等に取り。23 閣考異かず。24 イ〈〈。25 閣のアリ。

きた1れど侍ふなど2云ふ。3京の童べを4ようし5ほ6り7がり侍りつる8に、親9あり10、ぞ11て(〇俗)になさんと母にて侍る者どもの中12す、人これら13國の守に言ひ14をどし、何かと15むつかしう申して、16京の方よりも、公方につけて責め17て來し、家を亡し侍り。これらが母の申すは、自ら18某侍らん。此の母若くより宮仕へを仕うまつ19(り)し、身の程怪しきをも知らず、故殿の御果の世まで侍ひて、子供の顔をも、終にはかぐしく見侍らでみまかり過ぎ侍りにき。我らのみ殿をもえ知り奉らず、かく侘びしく愁はしき事。いとも〳〵かしこくて、數多の世の御榮おはしましてなんど申す者の侍りしかば、泣く〳〵思ひ給へ喜びてなんかく侍ひつる」と申す。かのさがのと云ふ女、いと哀に病づきにけるに、子の許に往か20さほしけれども、此の殿の、只一所幼き子を持給うておはしける、え見捨て奉らで、心地21いさや已むと思ひ居りける程に、京に22今日なくなりにけり。申しける事ども、今日弱き給ふにつけても、思ひ出でられ、胸塞がり、悲しく覺え給ふまゝに、つく〴〵と泪のみこぼれ給ふ。大將にも昔聞え知らせ給へりければ、さなりと思すに、いと嬉しと思す。しばしためらひ給ひて、「漏きせず哀なる昔の人の事を物し給へば、いと悲しくなん。何かは昔の人の事覺束なからず23みのし給へばなん。委しき事は人に24もな言ひそ。たゞかの人の

校異 1因る事の。2因申しき。3因此。4国法師。5因考異のアリ。6イし。7因考異し。8因考異を。9因侍。10因し時アリ。11イく。12因しき。13因が事をアリ。14イな。15因考異うべく。16国俗。17イ懲じ、因勘じ。18國イ何し。19一字イニヨリテ補フ。20イま。21イ今。22因てはか。23イ物。24因は。

代とは、とかく寐ね物したる人をこそ同じ事に思はめ。此所をもなど1物心苦しう扱ひ立て給ふ。吾2は大將にぞおはすめる。愁へ歎きたる事ども、いと怪しき事なり。忽にかの攝津守の許にも言ひ遣らせ給ひてん。とく物し給3ひて、今までさりける事。かの人々何所にとも、は4かぐ〱しう聞き置かずなりにしかば、なん今に心には思ひながら、え尋ねざりつる。いとこそ嬉しけれと、かくて物したる」と宣はす。年若く、いと容貌ある下仕へにて5ぞ仕うまつりける。今も田舍びず、よし〱しくかはらかなる顏つきして、髮細許りにて、「かのあらぬ若き人々6も着し7か8皆9々10立ちて率て參り11たり12」「いとよき事なり。さやうの人々の、いとよう仕うまつり13つべき君達物し給ふ」と宣14ふ。15大將かの16有りつるに、「17知り侍ふ」と申せば、「なほよし。18ただに參うで19よ」とて、召し出でて御覽ずるに、いとをかしげにて、白20つくらう〱じき顏したり。「21はと思ふやうなる者どもかな。遊びはすや」と宣へば、「二人は笛をなん吹かまほしう22給ふ。今二人は箏をぞ好み侍る。さやうの事をもし侍りぬべし」とて、かくいと合奏に23はいみじき目をも種々に見侍りつるなり」「いとをかしき事かな。皆一所に置きて、種々好からん舞もせさせむ」と宣ふ。「かの所行幸に侍りし尚侍が妻は、朱雀院の御時、采女24女をなん侍りし。それが25妻は大人と司なり侍りて、

【校】1 此著眞ナシ。2 イ太。3 覧はで。4 兩か。5 腐ー。6 閑目。7 國給へるか。8 イみ。9 イみな。10 イ下りて、國ナシ、國落ちて。11 國侍。12 袁つるアリ。13 國イ心得。14 國ひ。15 袁ナシ。16 國誰々召せば。17 國しか。18 イ此所。19 國來、國イナシ。20 イナシ。21 一字イい。二字國巻異ナシ。22 袁侍る。23 國ナシ。24 國女。25 イ女。

からぶり賜はすべかりし程、淺ましく後の人に横樣に越えられ侍りて、賜はらずなりにし事」ども申せば、「いと易き事なり。今の御代に1も出で立ち2申さば物しつべきを、今は3味氣なし、異樣にていとよく顧みん。子供京にあらば、家をも顧みさせん。誰も〳〵時々は通ひて作めかし。此のわたりにも、4さべき所物せさせん」と宣へば、「限りなく畏き事」と申す。「苦しからん。5物など先づ食へ」と宣ひて賜はす。「守の許には、家元よりよく造りて取らせ、内の物數によりて取らすべきよし言ひにやらん。又6餘の國に院方より領ずる所あり。今よりは時宗に預け知らせん」と宣ふ。督の殿7の搔練の綾の單襲、織物の袿袴一8重賜はす。又絹十9匹、「これは、かの國にあらん人々に物せよ。必ず〳〵京に上れ。さてのみなん思ふやうにあるべき」となん宣10は11かす。限りなく返す〳〵悦び聞えさす。

「畫詞」13大將殿物14し給ひなどす15る所に、16犬宮の襷より下り給ふ17べき有樣、次の卷に見えたり。

大將殿より紅の袿一襲、織物の御指貫、「これはかゝる18御歩きに要ふべき物なめり」と宣はす。きぬ卅19匹。「これは國にあらん人に物せよ」とて、「馬につきたらん者に」と20調布三十賜はす。守の許に、やがて殿の下家司添へて下し遣はす。「人を遣りてしばしもあれ」と宣はすれど、「かく限りなき事を、とく罷りて聞

校異 1因考異は。2因考異てアリ。3イあき。4因るアリ。5因考異先づ物など。6国か。7因ナシ。8因領。9国匹。10以下三字イふは。11一字イナシ。12因此所は寢殿時宗童べ四人御前にありアリ。13以下卅五字イナシ。14以下二字因宣ふ。15以下三字因此所は。16以下廿二字国ナシ、以上ヲ国本文トシテ繪詞トセズ。17以下十二字因ナシ。18因ナシ。19国匹。20因てアリ。

大殿の所々にも聞かせ奉り給はず。1童べは今2よりは四人加へて3 4延べさせ給ひて、夜5ごと調べ整へさせ給6へ。八月十五日と、此の御いそぎ思す。宮渡り給ふべし。内侍の督犬宮の御方々の人々合はせて四十人、童、下仕、例の扇裳唐衣、心殊にせさせ給ふ。犬宮いよ〳〵引き變へたるやうに大人しくおはす。7さな〔〇琴〕はたゞ督の殿と同じ様に、これは今少し音は優り樣に彈き給ふに、今は限りなく此の世に思ふ事なくなりぬと思す。程は八月十日許りなり8。9源中納言嵯峨の院に參り給ひて、「亂り脚病いたはり侍るとて、石山などに參うで侍るとてなん」10と御物語申し給ひて、「しか〴〵して、いみじう世になき物の音を聞き11給12〔へ〕し。珍らかなるまで哀に悲しく侍りし。始めよりは今少し心すごく、まだ聞き給はぬ音どもの侍りしは、なほ祕したる事や數多侍らん。いかでこれ聞し召させ侍らん。今少し高く響き上13ら14ば愼ましかは、いといみじうなん侍るべかりし。官位のこよなく侍るには、かく世15中の16天下に優れたる物の上手に物し侍るなんめでたき事に侍る。17公の御前などにて、打解けて18通じたる折侍らぬを、大方の聲19譜20奏し侍りしよりも、聲の出づる限り、昔の詩ども21通じ22侍りしなどは、すべて涙止められずこそ侍りしか」院、「いと面白く哀なる事かな。いかでこれを思ふやうに聞くべからん」23と、中納言、「犬宮に手

校異 1一字イ童。二字國童。2三字因ナシ。3因とアリ。4因整へ。5二字因畫。四字國事々しく。6イふ、因考異ひつ。7イき。8因けりアリ。9因かくてアリ。10國イナシ。11二字因考異侍り。12一字因ニヨリテ補フ。13以下三字イり侍ら。14二字因考異ナシ。15因のアリ。16イ上。17國イおちやけ。18因通し。19國笛。20イ講じ。21因誦し。22因考異てアリ。23因ナシ。

の限り、此の二年教へ調へて、此の十五日になん1楽人ども集めて、左右と楽して楼より下すべく侍る。かの日2怪なる事ども侍りなん」院の上3も「かの日こそ彼所に俄に御幸4とめ。如何に」と宣はすれば、「ある者の申すは、一5院の、かの日ぞ彼所におはしますべしなど申すなりし。さやうに侍らば、さる御心せしめ給ひてこそよく侍らめ」「如何は。」九月九日6左大將に、さりぬべく7女作らせて見ん、と8くなん、女の裝な9か10など少し物せ11よと仰せたるを、二十12具許りは、3少しよくせさせよと仰せたるを、先づさば14るの家の準備かん。内侍の督の15、いと聞かまほし。右大將いみじき人なり。天下に面白く裏に16なり難き事どもの留りたる家よ」など宣はせて、中納言罷出給ひぬ。17朱雀院は大將に、「必ずかの日行かん、事しからず、中々知らぬやうにて物せられよ、騒がしきやうなり、右の大殿の迎へにもぞとて18あると思ふなり」と仰せられけるに、又嵯峨の院返すがへす恭く仰せられしを、しかなど啓し申さんに、人ただ便なく言ひなしてん、自ら聞え19申して、さらばさりと思はん、おはしまさん樣の用意せんとて、治部卿集の中にある、唐土より彼方天竺より20は此方、國々のかみを、その年頃の有樣を、かの大將書かせ給へる屏風、例に似ず淸らにうるはし。皆ながら唐綾に書きて、紙の錦裏より始めて淸らなり。寢殿に二所21おはしますべ

校異 1イめく人々。2国聞あ、3国ナシ。4イせ。5国のアリ。6国右。7国イ前。8イて。9イナシ。10国ナシ。11国させアリ。12国くだり。13十四字国考異ナシ。14イか。15国考異奉アリ。16国右。17国朱雀。18イミ。19国考異給ひ。20国ナシ。21国なからアリ。

くして、御簾の帽額には、大紋の錦をせさせ給ひ、高く捲き上げて、御濱床に蒔繪して、家も紫檀のを造らせ給ひて、黄金の筋やり、螺1へん〔〇鈿〕摺りたり、玉入れた2る、大方の所の面白きよりも、御しつらひいとめでたし。嵯峨の院3に大后の宮、「七十に餘りぬるに、萬の事聞き見るに、琴の音よきなん飽かぬ。大將の、何時4か有りけん、早う5聞きしを、いといみじく世になく覺えし。ましてかの內侍の督の彈きたらん、いかで聞かでは有るべきにもあらず。御供にて聞かん」と聞え給へば、「如何なるべき事にかはあらん」とは宣へど、止まり給ふべきならず。內裏の女御にておはする、此の大后の宮御腹の若宮6、「いとよき事なり。此所に7と聞き侍らん。必ずおはしませ」と聞え給ふ。8一宮は女御、男9宮の限り七所、二10宮とおはすべし。源中納言、かの七月七日の事をさへ、睦まじき御仲らひに聞え物し給へば、我も〳〵11止まり給12ふべきなくおはすべし。御供の人までは、居13るべき所なし。寢殿の西の廂に大14后15二宮、北の廂には大殿大宮、その御腹の女16君、17宮女御放ち奉りて八所、大殿の18御腹の女君達19五所、母上渡り給ふべき方なり。かく御方々我も〳〵と宣へば、「大20將苦しう宣はんものぞ」と制し聞えさせ給へば、「味氣なき事なり。さるべく21て御暇得給22はで、聞き給はざらんにより、世に聞きがたき事を聞き侍らざらんこそ」

校異　1イで。2因り。3国の。4国にアリ。5因彈。6因もアリ。7イも。8イ女アリ。9因君達。10因のアリ。11因止。12イへる、因へるは。13因ナシ。14因后。15因の。16イ御アリ、因御のアリ。17イ仁壽殿、因今の。18因ナシ。19イ中君三君四君十一君十二君アリ、國中の君三の君四の君十一の君十二の君アリ。20イ殿。21因ナシ。22因ひて。

とて、一人留まり給ふべきならず。東の廂には宮内侍の督殿の女御の御局と思す。左[1]大殿頭[2]男君達四人、宰相七人の男君達、「いとおつかしう責めらるゝを、さりぬべからん物のは[3]こま[4]に」と切に思しつゝ責め聞え給へど、あるまゝに、遁れ聞えざるべう[5](き)方なきまゝに、「明きたる方なきを如何せん」と聞え給ふ。かゝる事を藤壺聞き給ひて、[6]大殿に、「只今自ら聞ゆべき事なん」と聞え給へれば、宮に、「さればこそ、此の事ならむ。如何にか聞えんと[7]すうん。殿許され給ふべうはいとよー。定めて聞し召し忍びて事にてとあらば如何せん。すべていと苦し。大事の聞きにくき事有りぬべかめり。さば渡りなん。彼方には物せらるとて、此方にはた渡り給ひそかし」と聞え給へば、「さもありぬべけれど、久しくをかしき物の音も聞かぬを、さうぐ\しく思ふに、内侍[8]督の弾き給はんは、如何でかゝる折ならでは聞かんと思へばなん」「此所にかく宣はすればこそ」とて、歎く〳〵参り給へり。宮許し給ふまゝに[9][10]か、「まろを彼所に任せて、ただにあらんと思ひ侍りしを、かう放ち据え給ひて、むつかしき事をのみ聞き、有り難う聞かまほしき事を、誰も聞き[11]給へる事。心に思ふ事なく、あらまほしき日を見聞かんこそ思ふやうなるべけれ。十五日大宮内[12]へ侍ふ暇なくて物し給ひ、院[13]の上もおはして、かの手の限り様々弾き給ふが、かなるを[14]そ、后の宮もおはすべかなるに、一人しもおかく安らふまじく侍るなんいと煩はしく侍る」とて泣き給ひぬ許り聞え給へば、

[1]因ノアリ。[2]因ノアリ。[3]イま。[4]因イナシ。[5]一字イニヨリテ補フ。[6]宮左ノ大臣。[7]三字闕イナシ。[8]因ノアリ。[9]イ此所ニアリ。[10]因ナシ。[11]因見アリ。[12]一字イニヨリテ補フ。[13]イナシ。[14]内ナシ。

「いと怪しく。げに有り難き事を聞かせ給はゞ、いとよき事にこそ侍らめ。大后の宮も必ずやおはしますらん。時にのぞみて、あるまじなど人申さば、如何侍るべからん。御暇は」「上は御氣色は侍1り。昨夜いみじう聞えしかば、知らずな2んとも宣はず。これはかりは、天下に宣ふとも3にがくはえあらじ」と宣ふ4折に渡らせ給へり。大殿隱に居給ひぬ。「明日の夜さり必ず迎へ5給へ」と宣へば、「さればよ」とて出で給ひぬ。いとまめやかにおづかり申し給ひて、御暇強6ゐて聞7へ給へば、「はや。いとよかなり」とて、「出で給ひなば、やがて彼所に物し給へ。萬の人の思はんよりは、大將の朝臣の思はんぞをかしきや」「皆人も聞き給はぬに、一人物し侍らばこそさも思ふ人も侍らめ。大后の宮より始め奉りて、おはせんには」と申し給へば、「それはさしもあらじ。げにかの宮おはせば、8さあるばかりに宮ぞ物し給はん。よし聞かん、さもあらじとて、また内侍の督の琴聞かぬ人は世にはあらずやあらん」と宣はすれば、藤壺大后必すおはせんなど人知れず思す。9源中納言、今は人にも殊に見え交り給はぬを、かくなど聞き給ひて、「夜の御事ならば、忍びて參らまほしくなん承る」とて、

「死に返り思ひ10初めにし世11中の飽かぬ事こそ哀なりけれ

もしさるべくば12ならひ〔〇習ひカ、並びカ〕なんや」とあり。見給ひて、萬の事より、如何樣にして聞かせ奉

校異 1國る。2因ど。3三字イ行かで。一字國ナシ。4イかり。5國イナシ。6因ひ。7因え。8國イナシ。9因新。10イ過ぎ。11因のアリ。12因參り。

らんと思ひ給ひて、「喜びて承りぬ。1吾が佛2の間3へさせぬ程に、いとゞ/\珍らしく侍りし事は、いでやげに、

年經れど誰も忘れぬ憂き世には4樹ぞ事の何か有るべき

まめやかに世5中の哀に心細く覺え給へば、しるしばかり幼き人に月頃物し侍りて、忍びたる所侍り難くも、あながちにてもと思ひ給ふるをと聞えさすれば、6南7檢所の法師も心地なんし侍る」と聞え給ひつ。世に安からず8 9宣ふ。寢殿は此の北の方10の御女達宮達、如何樣にてこれを聞かんと思し給はぬなし。忍びてと思せど、11二所おはしますべき儀式、心異なる有樣を言ひ騷ぎ、「12こくばくの限りなき宮には嬉くして渡り給ふべき事あり」とのゝしれば、13う(□乙)食ひたるまで、「如何なる事ならん」と見聞かばやと思ひ言ふ。

右14大15將の16二宮梨壺の御方一17所にとて、大后の宮供に渡り給はんとす。十四日の夜18さり院の女御大殿の御方々、大大一人五二人御供にて渡り給ふ。御達は例の19車にて、その車は數かず、南の方20の山21の蔭に立て並め22(た)り。二御方の男君達姫君達、御車ながら、「所さゆかし。かの下り給はん有樣、かくな

校異 1因吾。2イに、異え。3因え。4國イなから。5因めアリ。6諸本、國た。7因考異見。8イとテアリ。9因のゝしれば西方々。10國達。11底院二所。12國こゝ、因考異そこ。13一字イとこ。以下五字底考異蟾山がつ。14因のアリ。15イ殿。16因ナシ、因考異此の、國イ小。17因つアリ。18イ前略、底冠戟の。19因儀式。20國イナシ。21國ナシ。22一字イニヨリテ補ツ。

隙なくよそひ續けたり。母屋分けて、二にしつらひて、はし〔○端カ、階カ〕立てり。さるべき大將達大殿ばかりぞ內には。1さての上達部は拘欄の簀子にぞ居2たるべき。3太政大臣の4大殿も、「院の上のおはしまさば參りて聞かん」と5し給ふ。一6院は、嵯峨の院おはしましぬと聞7き給ひて、後に御對8面あるべきにて、おはしまさんとし給ふ。東の對は、一院おはしまさん、殿上人藏人所にせられたり。明け9ゆくまに、御方々、南の方、池中10らま〔○島〕釣殿、未申の堂の11方、左右の反橋、欄の樣など見給ふに、限りなく面白くめでたしと見給ふ。北の方を見遣り給へば、遣水12、枝ざしをかしう、珍らかなる木ども小松ども、遣水の此方彼方に多かり。對などは此方には見えず。遥るゞと庭の13樣14にて15白く面白きに、苔生ひ紅葉の木ども見ゆ。藤壺見給ふに、大殿はいかめしう上﨟しう造りたる事こそあれ、見所えかうはあべきならず。16內侍の17君、狹くてむつかしく思すらん、此方を見遣り給ふに、いといみじく面白く見給ふ。18二19宮20何事21思すらんと、女御の君は、春宮おはせ22ず、后にもなり給はぬを、心よからず思しゝに、大將の有樣容貌、帝と申すとも23ゝろひ難く24思したるを、少し猛く思すに、今日の有樣此所の造り樣、人のいみじう言25ひし、げに26聞え給ふ。

校異　1因おはす、因考異居給ふ。2因給へる、因考異ためる。3因太政大臣。4因ナシ。5国宜。6因のアリ。7因かせ。8因面。9國イの。10イー。11國イナシ。12因をかしう落しアリ。13以下三字因たとしへなく。14二字イナシ。15国廣。16以下十六字因彼方。17イ督與、国督。18イ三。19因のアリ。20因はアリ。21因をも思ほさねど。22因ねば。23イし。24國覺え。25次へる。26国と思ひアリ。

23未の時ばかりに嵯峨の院おはしましたり。右大将参り給ひて、御階に御車寄せて、右の大殿、大納言三人、中納言宰相五所、源中納言、宮達、いといかめしう清らに、大人々々しく1 2そろ〳〵しく3て、引き連れておはします。七十二におはしませど、いと清らに若く、只今ぞ五十ばかりと見え給4へる。御鬢白からず、御顔少し打伏し給へ5る、いとよく笑ませ給ひて、「いと面白き所と昔見しを、ゆかしきになむ物しつる。かの池の釣殿は、此度は丈ぞ高くなりにけり。いと哀に、たゞ同じやうなりや。7我見し限を見し人あらじ8かし。あや、かの宮内9の宰相の朝臣有りける。覚ゆや」と宣はすれば、「さ侍り。山の木ぞ高くなり侍りける」と申す。一院より、右馬頭なる人御使にて、「10左大将の朝臣の家に渡りおはしましたりと承るは、まことにや侍らん。内侍の督の幼き人に11琴12を調べて、今兄の所へ賜り侍るを、かゝるついでならでは聞き難く侍るを、まことに御遊侍らば、参りてと思13ふ給ふるを、例あれの事ならば、14ひくなくや侍らん」とある御返事、「承りぬ。此所にもまだ聞き知ら15ねば16大王のゆかしき人も侍り。兄の習ひ給ふらん聞かまほしくて、物し給17ひつるに従ひてなん参うで来つるを、嶋18前も覚束なきを、必ず御遊あるべし。例はあやと覚え侍19り。」と聞え給20へば、大将御迎へに参り給ふ。左21大殿右22大殿、それより外はあ

【校異】1イぞアリ。2以下二字イぞから、要きら、要考異らう、聞そろ。以下六字要考異ナシ。3一字要考異ナシ。4聞イふ。5為り。6聞イナシ。7要我が。8三字要考異は。9イ物。10要右。11異ナシ。12異数へ。13要ら。14イ便。15要考異ずなむ。16三字要ナシ。17イへ。18要而。19要る。20イひつ。21要のアリ。22要のアリ。

る限り御供に仕うまつる。すなはちおはしましたり。太政大臣の大殿次に參り給ふ。院の御子達、此の御匣の1だに七所、清らに美しげにて、五所は御冠し給へり。二所はまだ童にて、打續きて居給ひぬ。2嵯峨3の院は御物語御だ4へ〔〇堂〕の5御ゆ6る〔〇床〕の上にて7、一院は清らにうるはしく、猝やかにおはします。御覽じ廻して、「人々皆殘りなく物するに、内裏には誰か侍はるらん」左の大臣、「大藏卿源朝臣、藏人少將信方、さては六位の男どもなん侍ふ」と啓し給ふ。車東面を8げ際にて、西は三四町まで立てたり。次々の下人ども道なく見ゆ。

午限りて西の初に棚より下り給ふべし。樂人も皆平張に集りぬ9と、一院御覽にて、右大將左の大臣に、「時やう〳〵なりぬめるは。いづら、遲し」と度々仰せらるれば、左の大臣、頭中將、右近、藏人少將、此方彼方に罷りて、「早とぞ仰せよ」と宣ふ。立ちて車の行事す。西の方の錦の平張10 11大鼓12打ちて、靜かにやうやう樂し出づ。八人の童、四人は13くさ〴〵の14裝束す。四人は胡蝶。左右に立ち出でて、いとをかしう舞ふに、吹物彈物當てゝ賜はす。宮達、「手〔〇立ちてか〕遲し」と宣ひて、吹き彈き合せ給へ15り。院大將を召して、「かの人々も早や物せられ16よ」とて、車寄せて、かの西東の反橋に寄せさせ17ん、一院の上は氣色お

校異　1因御子。2以下十九字因ナシ。3一字因考異ナシ。4イた。5以下三字国見ゆる床。6イか。7因考異し給ふアリ。8因ナシ。9因ナシ。10イよりアリ。11異大。12因ぞアリ。13因孔雀。14因裝。15國イる。16イよアリ。17イて。

よりも遥かに見ゆるいと目出たし。左の大臣、几帳1に添ひて、はつかに犬宮の御容體を見給ふに、いみじく美しげに目出たう見え給ふ事、あて宮の兒におはせしにこ2よなう優り給ひて、あてに艶かしう、見驚くばかりいみじ3き者かな、4こくばくの君達、一二の宮ばかり5にてぞ、品勝りて6は7え給ひしかど、まだ小さき程に、いとかうは見え給はざりき、これはゆゝしく8つげ〔○變化〕の物と見え給ふ。樂の際、御前の皇子達より初めて、彈物吹物、聲靜かに等しくて、面白き事限りなし。嵯峨の院御屏して拍子打たせ給ふ。9院時々唱歌し給ふ。かゝる事又あらじと見え聞10へたり。御車寄す。四位五位殿上人階より下りて、11牛かけて寄せたり。一院、「かの車辰巳の隅の拘欄放ちて寄せ12させよ」と「頭中將」13と宣はすれば、左右大臣先に立ちて歩み給へり。右大將犬宮の御車14引き給へり。右大將右の大臣几帳さして下し奉らんとするに、「例の儀式あるを」とて、御氣色賜はり給ひて、先づ督の大殿下り給15ふ。16へぎ〔○次〕に犬宮の御17臺寄す。左の大臣手かけ給へば、次々の人下りて寄せたり。几帳夕日の透影より、内侍の督、紅の18黑むまで濃き唐綾の打給一襲、三重の袴、龍膽の織物の袿、唐のこま〔○高麗カ〕羅重ねた19る、ちず20か〔○地摺〕の裳村濃の腰さして、唐の21いといふ〔○木綿カ、優カ〕ある色の二藍重ねて、唐衣著給へり。犬宮唐撫子の唐

〔校異〕1國イナシ。2國イま。3國イう。4因こゝ、因考異そこ。5因こそ。6以下二字国見。7一字因見え。8イへ。9国一アリ、因一のアリ。10国え。11イ手。12因考異ナシ。13イに、國イも。14國イナシ。15国ひ。16イつ。17因車。18國イく。19国り。20イり。21国織物の赤。

綾の袿一襲、1きから〔〇桔梗カ〕色の織物の細長、三重襲の御袴。内侍の傍ゐざり寄りて、下し參り2給ひて、御衣引き繕ひなどし給ひて、ゐざり入り給ふ透影、3犬宮玉虫の巣より透きたるやうに、あな目出たと見えたり。小さき扇さし隠し給ひて、ゐざり入り給ふを、一院几帳のほころびより御覧じて、いと美しと思す。内侍の君4、容儀端やかに艶かしう、あな清らの人やと見えたり。只今廿餘ばかりに5て、襲6の裾に溜りたる髪篦々として、御細からず丈こちたからぬ程にて、引き添へられて居ざり入り給ふを、左の大臣几帳さし給ふまゝに見給ひて、いといみじ7にける人かな、年の程大將の妹と云はんにぞよき、仁壽殿の女御には容儀気配も勝り給へり、昔の心ならましかば、かゝるを見過さましやと姫ら[illegible]給8ふ、9かく思したり。此の四人の童、一人は容貌色いと白く美しげにて、舞ひ勝れてかしこくすゐを、御前より初めて、「彼はいとをかしき童かた」と興し給ふ。院、「いと小さくて、かしこく舞ふ者かな」彼此所に召し寄せて、樂も静かに仕うまつらせよ」と宣ふに、左の大臣、「四人は此の家に侍る童なり」と啓し給へば、「いとをかしく整ひて、いかでかくあ10るらん」と宣ふ。皇子達御方々これに目をつけて見興し給ふ。御階のもと近くて、「更に、さばかりの程にて、かく舞ふな11ら」とめで給ひて、左右大臣衵脱ぎて賜へば、皇子達殿上人同じく脱ぎかけ給ふに、舞ひさして逃げて行けば、「彼留めよ」と召すに、恥ぢて參らねば、人々12弄し給ひて、大將

校異 1異背けり。2関イナシ。3関ナシ。4次のアリ。5関見ゑアリ。6関考異ナシ。7イかり。8関ひ。9異笄。10関イナシ。11イし。12関興。

に、「誰1る子ぞ」と問ひ給へば、「しかぐの者どもの、兄弟の子どもに2侍り。鄙びて、かく罷3り出つるなめり」と啓し給ふ。宮達上達部、「宜なりけり。時用はいと清げに侍りし者なればにこそ有りけれ。聲いとかしこく出で侍りし者なり」と申し給ひて、4とせば、參りたり。「笛なんよく吹く」と申し給へば、「いとをかしき事かな」とて賜ふ。四人ながら5 6といとをかしう、吹かぬ笛なく吹き立てゝ、まだ小さきも、顏容貌愛敬をかしげにて、かゝる才をいと美しくすれば、院の宮達、我もぐと7怨じ給へば、左の大臣春宮の御弟の宮達も、かゝる事するを、さしもあらぬをだに8なし給ふ、二人をだにと思ひ給へど、同じやうなる宮達の請ひ領じ給へば、えともかうも宣はぬを、9藤壺、中に10髮勝りたる二人を、いかで宮二11宮に奉らん12と、容貌は勝るも13えありなん、小さくて樣々をかしく14、宮達15のもてなし給ふに、嵯峨の院さへ、「一人は院に侍はせん」と宣ふを、羨ましく思して、二16宮の御簾のもと近くおはするに、「かの笙の笛吹くは春宮に奉らん。横笛吹くは我得てんと大將に宣へ」と聞え給へば、大將17の居給へるに、はた「かく」と宣へば、「いとよく侍るなり」と聞え給ふ。18院の五19六20宮「21得んとするなり。いかでか」と宣へば、七22宮、「さば、此所に得んとしつる者をば不23用なり」と、宮、「さば、24宮あらんずるや」と宣へば、「かの今四人侍

校異　1 イか。2 因てアリ。3 因ナシ。4 イ召。5 国いアリ。6 イナシ。7 イ得んと宣。8 イもてアリ。9 イありつる。10 因も。11 因のアリ。12 イナシ。13 因また。14 イてアリ。15 因ナシ。16 因のアリ。17 國イナシ。18 国一アリ、因一のアリ。19 因の宮アリ。20 国のアリ。21 因我もアリ。22 因のアリ。23 国益。24 イ見でや〔〇文ハ見てや〕。

ふもいと上く侍り。「それらなる」と申し給へば、二香、それは難もえせず、悪ければ辛きなり」と宣ひて、互
に「幼くおはする」1とぞ宣ふ。院の宮達、或るは「上に申さん」など宣ふ。院の上何れともなく美しと見
奉り給ふ。

かくて日暮るゝ程に、2一陸床より下りさせ給ひて、内侍の督3几帳のもとにおはして、「浅ましく覚束な
くゐてなして、年頃も目4らこそとてたん。今日は昔5も時々聞かまほしき事も絶かずなりしかば、所せか
ましくとて、車など物せしかど、かひなくて止みにき。今は心安き様にてだに、如何にと人知れぬ心ざしも
ありき6ゝはよなく7使ひ落されたるばかり、世に口惜しう妬き事はなくなん。よしや思ふ8こそ及ばざら
め、聞かるべき物の音だに、身の慰めは、かくてなさるゝこそつらけれ」と宣はすれば、内侍の督、「いとも
畏き9返す事を、明け暮れおろかならず思ひ給へながら、年頃は宮若君達の御事などと10て見給へし程にこそ、
時々もえ参り侍らで。御箏はいと11よく聞かせ給ふべかりけるは、ほか〴〵しうなりにて侍れば、はか〴〵
しう12も侍らじ。如何に侍らん」と聞え給へば、「いとかしこく13も14延べ給ふかな」とて、「かやうになん致
へつるとて引き寄せて聞かせ給ふかく(□)へかかし。かのほそをの曲の物、今三つ四つ15いと16ありしも、更
になん忘れぬと、中務宮の御時、七月七日の夜、まだ聞えぬ物の音なんありしと物せしかば、すべて、りう

［校異］1イとさん。2御帳アリ。3イのアリ。4覚ら。5異ナシ。6以下二字イこ、宝賢こ。三字頭書異はか。
7イ思へ。8異心の中アリ。9イ御せ言。10イかく。11此字異なし。12左字異ナシ。13以下五字頭書。14
同字異宣へる。15イは。16以イる。

かくの調に初めて、かの七日の夜の事、今宵聞かせ給へ。いつか又かゝる夜の事あらん。嵯峨の上年頃ゆかしうせさせ給へる、殘り少き御世になり給ひたる、かくておはしましたる[1]、いと畏き事に、人知れぬ思ひ過しも心留めて思されれば、只今日やその驗見ゆべき。何事も思されぬにつけても、有難う聞えし事ども[2]宣ふべし。事ども今日の夜の御心ばへにこそ、いよ／＼限りなく覺ゆべけれ。大將の朝臣の喜びなども言ひてまし。なほ樣々に心憂くこそ思ほゆれ。此の聞ゆる事どもは、さ思はましや。如何に」と宣へば、「げに道理と聞えさすべき、おろかならぬ事をこそ何[3]とか啓し侍らましか、[4]事より外にと思ひ給へしなん。まことに琴はあまた侍りとも覺え侍らぬを、りうかく、ほそをばかりこそ。それは大將折々に[5]聞し召され侍らんものを」と聞ゆ給ふ。右の大臣心安からず見奉り給ふ。左の大臣の心ばへ[6][7]今になほたゞならじはやと思ふに、右大將心もとなくこそ覺ゆれ。かのりうかく、ほそを、又かの治部卿の朝臣の集の中に、今かみ〔〇紙カ、上カ〕に書き消たれたりし、さいこ[8]く〔〇西國カ〕に思ひ屈すべしとありし[9]見つゝに、[10]度々[11]せさせ給ふに、いみじく淸らなる高麗の錦の袋に[12]てあり。取り渡すに、匂ひたるがえならず奉り給ふ。「今一つあり」と仰せらるれば、ともかくもえ啓せず。內侍の督、いかにすべきにかと思ひ煩ひ給ふ程に、嵯峨の院近くおはしまして、「大將の朝臣に物せし事ども、傳へ聞き給ひ[13]せんや。昔の人の勘事、罪[14]あ[15]さるを、

校異　1國とアリ。2異もアリ。3丙考異かは。4丙と。5丙仕うまつりしをアリ。6丙考異はアリ。7丙いか。8國イも。9丙御厨子。10丙とアリ。11異責め、丙考異召。12丙入れアリ。13イけ。14丙にアリ。15イま、丙た。

今は殘りなくなりにたる身なるを、此の身に免し給はゞ嬉しくなん」など宣ふ樣、らう〳〵じく愛敬づかせ給へり。「いと畏き事」と1聞え給へば、「さらば、かのりうかくよりしてなん風はし風など云ふなん、雷鳴にて、大將中納言の弾きし琴の2ころなんあまたある心地せしを、宮の雲の騒がしくらうがはしき事有りとて、彈きさして隱3るゝ世に彈4き給は5なん、いと聞かまほしき。又はし風などは、ほのかに聞きて、こと〔〇事カ、琴カ〕の樣に聞6きたる人なし。もしそれにやあらんと思ひ當に傳へ聞くやうなん7めりし。それ今皆聞かせ給はゞ、此の世にも世々にも盡きず嬉しくなん。8うれを聞かせ給はで、後の永き世に人に聞かせ給はゞ、世中に限となんすべき。

今は9のみ限りと思ふ來の世にもとの慎をとくもきかなん」

内侍の督、源中納言聞き給ひて、かく啓し給はん事の、いかでかは怪しく思ひ給ふ。御返し、

二葉にて思ほえぬかな結び松打ち10かけてこそ人はひくらめ

なん風にはあまた調ありとも思はえ侍らぬ」となん11申し給ふ。朱12雀院は氣近く懷かしくて、萬の道理なる事を宣は13せ、嵯峨の院は御年高くかたじけなくおはしまして、古へをかけて遁れがたく宣ふ。いかゞすべからんと思ひ煩ひ給ふ。14東宮[illegible]は、ほそを、はしふ、二つの琴を立てゝ宣ひしやう、「世中今は15かぎりの。

【校異】1 要害して。2 異心、国響。3 イる。4 図考異かず。5 図ナアリ。6 図考異さ。7 異本。8 イこの。9 図身の。10 イ弾。11 図考異聞え。12 図雀。13 イで。14 イ故。15 イ限。

のさいは1つ〔○幸〕2に極め、3次には世に云ふかひなくなりさ4そ5らへん時にを」と6のさらし7を覺え獸の中にして、ほそ8お風の聲の物の限りは彈き9き。はし風は今手觸れ10一下調べ始めし11に、人々聞きつけて物せ12しかば、彈きさしてき。今さ13るべき年の程に物し給は14ぬ大將の御樣15 16見給17ふ、內侍の督になさせ給ひし御心ばへ18限りなく、昔の人の宣ひし19間の有樣を思ひ出で給ふに、今日の有樣、位を去り給へど、二所の20帝、これを聞かせ給ひにおはしましたり、式部卿21宮22を始めて、こ23くばくの、時にあひ盛りとおはします內裏春宮の上達部集ひ給へり、后と聞ゆる中に、勝れ給へる太皇大后宮、女24王、25右26大殿27北の方を初めて五所、女御には式部卿28宮の御女を加へて三人おはす。たゞ人は公私のやんごとなく重き者に思はれたる太政大臣29左30大臣上達部の限り十五人、三位左右大辨頭藏人31殿上人多くあ32り限り33の某、聞き知り給ふもさらぬも數々計りなき中に、さてもほそ34お風は、少しもなくとも、その曲の物の果の音を彈かん事は35、はし風に手觸れ36ん事、昔の事思ひ出づるに、心碎けて悲し。七日の夜

校異 1 国ひ。2 国の、因を、因考異ナシ。3 国ん時また。4 国す。5 國イう。6 イのたうび歟、因宣ひ、因考異宣ひ置き。7 イを狼、因かば洞の。8 因を。9 以下十五字因給へ。10 以下二字イなとて、国ずとて。11 因考異を。12 因られアリ。13 因考異ナシ。14 因考異ず。15 因考異をアリ。16 以下三字因も。17 因考異ひ。18 因もアリ。19 因なし。20 國御こと。21 因のアリ。22 因ナシ。23 因ゝ。24 國イ主。25 イ左歟、国左。26 因のアリ。27 因のアリ。28 因のアリ。29 三字因ナシ。30 国右アリ。31 因すべてアリ。32 イる。33 因殘るなし。34 因を。35 因いと易しアリ。36 イなアリ。

は七夕に奉る1べきには、犬宮に聞き知らせ奉らむ2、それもたゞ忍びて掻き鳴らしゝなり、かく帝と申せど、世に心憚に思れは給へる院の一3宮、犬宮の御4お5ぢとなり、6この日北の方と思へどゝ、なほ心ゆき7きはまる事とも思はえず、二所の帝かしこくとも、はし風は暫しと思ひ亂れ給ふ。

十五夜の月の明かに隈なく靜かに澄みて面白し。「心もとなし」と數多度嘆き宣はすれば、先づ習ひ始めのりうかく8を秋の調に彈きな〔〇〕鳴カ、鳴カらし給ふ。音高りき、清涼殿にて彈き給10ふには勝れて、世になく面白く明かなり。萬の樂の音を11確し、諸々の面白き聲を調へたり。12舞樂の聲、尚達御方々りうかくの聲をほのかに聞きしもえりしかど、「まだかうはあらざりき」と驚き給ふ。耳に入り心にしみて面白き事、かゝる事あらんやと優れて聞ゆ13べきに、ほそをを曲の調にて一彈き給ふに、いろ〳〵14に雲しほ〳〵降り、雲忽ちに出で來、星15騷ぎ、16空の氣色17恐ろしげにはあらで、珍らかなる雲立ち渡ると、暗に居給へる人々、頭くて人氣に暑かはしく覺え給へる、忽ちに涼しく、心地頼もしく、命18延び、世中19も日出たからん聲を集めて見聞かんやうなれ。同じ調ながら、清かに澄み昇りたる聲、心細く哀にて、上は空を響かし、下は地の底を搖がす。四方の山林に聞き分れて悲しう哀なる事、世20中は常なき事21に忽ちに思ほえ22て、

【校異】1國イ次。2異とアリ。3國のアリ。4國を。5異ほアリ。6イ大臣のと。7國様き。8國風アリ。9國く。10國ひし。11異考鎮はアリ。12イ二所の上ぐ、異二所の上。13國次。14國の。15國イ清き。16國聲。17國消日。18異もアリ。19異ナシ。20國のアリ。21異もと。22國イナシ。

涙落つる事留めがたく哀なり。帝より初め奉り、そこばくの上下、聞き給ふに涙落さぬなし。此の琴の音聞ゆる事、雷・風に随ひて、近くは内裏に、1みそかの殿の御階に2就かせ給はんとする程に、心細う悲しう哀なる物の音、風につけて聞ゆるを、驚き怪しがらせ給ひて、「殿上3の人、此の物の音は聞てや。何処にかあらん。いと怪し」と仰せ給ふ。「しか侍る。いと怪し」と申4(す)。強5ゐて6給へば、7東辰巳の8方9にの聞ゆ。蔵人の少将、「面白10き事も、京極の大将の家の琴の声、内裏まで聞えんやは。怪し」と、明けに11方に聞きて、哀がり涙落さぬなし。上もいと悲しくおはします御心にて、「なほこれいと怪し。蔵人所衆中の男ども、少将松方、使に早からん馬早や召しに遣はして、これが奏する12をさして13罷りて、目に見えずとも、その程を申せ」と仰せ給ふ。帝限りなく哀に思されて、かつは物の変化にやとまで思14せど、涙落させ給ふ事限りなし。高きもさらぬも、侍ひ給ふ御乳母内侍命婦蔵人。下の品のも、泣く泣く哀れに怪しと思ふ。上げ端に出でさせ給ひて眺めさせ給ふ。人々も侍ふ。15空の気色も例に似ず、哀なる声の聞ゆる事、萬の事静に思ふ心皆忘れて、たゞひとへに物悲しうて、昔の哀なる事のみ思ほゆ。

少将は、御厩の方に馬を16打ちて行けば、京極なり。道は二三町を限りに、人隙もなく立ち満ちたり。官門はいとど居積むべき隙もなし。人の中をわけなくて分け17行く。近くて聞18くは、まして三四倍を合せて、

〔校異〕1イ夜。2聞イわ。3関ナシ。4一字イニヨリテ補フ。5関ひ。6イ聞かせアリ。7関ナシ。8関方も
9聞よ。10一字イく。二字関くと。11イ随身。12関方アリ。13関参。14関して。15空者毘雲。16関早め
アリ。17関てアリ。18関けば。

様々哀なり。云ふかひなげなる姿したる者も、哀がり面白がり居たり。1かくして參りて御階の下にて啓せんと2ゐに、樂の聲琴の響3に聞き付け給ふべくもあらず。強ひて聲の限りを出だして、「藏人少將藤原の信方、內裏より侍ふ」と申す。內侍の督とく聞き付け給ひて、琴を彈き止み給ふ。上達聞き付けさせ給ひて、「4何ぞ」と問はせ給ふ。「しかぐ\聞え侍りつるを、上聞し召し付けて、此聲の聞えん所を尋ねて5奏せよとなん仰せられつる。此方に聞え侍りつれば」と啓す。御洟どもかませ6給ひて、「いよ\/\珍らかなりける事かな」と人々驚き給はぬなし。「內裏に覺束なく思さるらん。とく參りて奏せよ。昔ほのかに聞き侍りしに飽かず覺え侍りしを、さりぬべき折になど聞きて、物して侍るを、耳近く哀に聞き侍りしが、內裏まで聞し召しける」7など仰せらる。院の御前より初め參りて、例の8錦9木の香ばしくて、皆御酒など度々參れり。暫し有りて、嵯峨の院、「更に今宵なん露心地に思ふ事なく覺ゆる。昔內裏にて折節の節會花の宴の折には、面白くかしこき文を興じ、萬思ふ事なくて、身を任せて年月を過ぐし10し、折々の面白かるべき11神樂を12せし、琴彈13るせしに、朝臣の世よりなん有り難く勝れては覺えし。此の琴の聲になむ世に心もなく物覺えつるに、今宵なむ天14もかくやあらんと覺ゆる」と宣ふに、源中納言、「ほそを風は犬宮の産屋に大將のたゞ聊か搔き鳴らして侍りしは、たゞ面白くなん侍りし。今宵聞き侍るには、何れなれど調殊に變りて、又なく

校異　1イ辛うじ。2イ思ふ。3國イナシ。4因何、因考異な。5因考異申。6國イナシ。7因かなと。8以下七字因儀式に事加へ。9一字国ナシ。10因ナシ。11因遊び。12因ナン。13イか。14因の樂アリ。

樣々に哀に侍りけり。まして七日の夜の琴はいみじくこそ1は侍りしか。2これを聊か掻き鳴らし給へらん3(樂に合せて此の童4べ四人舞ひて侍ら5ん6)いかに面白くになく侍らん」と啓し給へば、これに勝りて、げに如何ならんと7思ほす。一際哀なる事を心深く思ほす御心に、ましてまだ聞かせ給はぬ樣の、いと珍らかに聞しく思さるゝに、世々を經とも忘れ難き人かなと、いよ〳〵淺ましき御心惑ひて、「さて、かのはし風をなほ掻き鳴らし給へ」と宣はす。

夜半8ばかりになり行く。切にとかく啓して遁れ給ふを、切めて責め給はず。「何かは、せめわざ〳〵の事のあらんかし」とて、いと近く居ざり寄らせ給ふに、いとゞむくつけく、世を何とか、今はまして思すまじき御心な9るに、思ひ煩ひて、「いと怪しく、更に珍らかなる樣の侍らぬを、10秋11城の左の大臣、春日詣などに、皆聞き12なしたるなん侍らん、大將に仰せ言を」と申し給へば、いとよく打ち笑はせ給ひて、「と13てこそ、かく14[illegible]し聞15ゆべ16けれ」と17て、大將を近く召して、責めさせ給へど、とみに立たねば、「一陸の御許されなめり。早う」と宣はすれば、内侍に昔同を打ち鳴らし給へば、立ちて樓に昇りて、取りて參りぬ。嵯峨の院やがて取らせ給ひて御覧ずるに、琴の樣も例に似ず清く目出たう、美しげなる琴を、昔よ

校異 1國イナシ。2前考異か。3十七字**イ**ニヨリテ補フ。4國ナシ。5國ば。6前考異はアリ。7國イアり。8國イナシ。9前考異れば。10以下三字前あいなう侍るに。11一字國イ仲。12**イ**鳴ら。13**イ**と。14御教へ。15異文給ふ。16**イ**かれ。17國イぞ。

り同じ唐土に渡りて持て上りたりし1速行が琴どもに2似ず、治部卿の數多渡したるにも3似ず。御手ず4きびに、緒を一筋鳴らさせ給ふに、響きいと珍らかなり。怪しとて次の緒を搔き鳴らさせ給ふに、露ばかりの音もせず、聲もなし。いと恐ろしき物にこそあめれ。上達も5危ふがり給ひて、几帳の內へさし入れさせ給ひつ。內侍の督賜はりて、引き寄せ給ふに、先づ淚落ちて、昔宣ひし事思ひ出で給ふ事ども有り。強ひて淚を念じ、心を靜めて彈かんとし給ふ。こ6くば7くの皇子達上達部見て、これを8如何ならんと心を惑はして思ほえ給ふ。御方々、或9かはみ10し〔〇耳〕挿みをし給ひて、ひ11な〔〇晝〕のやうなる御殿油を押し張りて、端近く居給ふ。內裏の御使も、山中に入りて多くの年を過ぐしけん例のやうに覺えて、12ま參るべき心地もせで居たり。此の琴は、13何の作り出で給へ（る）14し琴の中の、15勝れたる一の響きにて、山中の16山人の勝れ17よりし手は、樂の師の心整へて、深き遺言せし琴なり。たゞ初めの下れる師の18惜しみたる調一つを、先づ搔き鳴らし給19ひつるに、ありつるよりも聲の響高く勝りて、雷いと騷がしく20ひらめきて、地震のやうに土動く。いとうたておどろ〳〵しかりければ、たゞ緒一筋を忍びや21るに彈き給ふに、俄に池の水湛えて、遣水より深22さ二寸ばかり水23流れ出でぬ。人々怪しみ驚きぬ。一筋は面白く、二筋は悲しく、

校異　1イ瀨。2 因もアリ。3 國イナシ。4 イさ。5 国怪し。6 異こ。7 國イら。8 因いか。9 イる。10 イみ。11 イる。12 イ歸り。13 因か。14 國イナシ。15 國すゝ。16 イ仙。17 国た。18 イ教へ。19 イへ。20 国鳴り。21 イか。32 國イき。22 國イのアリ。

哀なる事初めよりは勝れたり。此の音を聞くに、愚なる者は忽ちに心敏く明かなり、怒り腹立ちたらん者は心和かに靜まり、荒く烈しからん風も靜かになり、病に沈みいたく苦しからん者も忽ちに病おこたり、動き難からん者もこれを聞きて靡か1ませんはと覺ゆ。いみじき岩木鬼の心なりとも、聞きては淚落さゞらんやと聞ゆ。源中納言いといみじく、萬の事2覺えず、心にしみて悲しく覺え給ふ。一院の上3の御(〇何カ)御目より、淚雨4よりもしげく5落ちさせ給ふを見奉り給ふに、6如何に聞し召すらんと悲しく覺え給ふ人々多く、見7惑し給へば、一人としてもおろかに思ひ泣き給はぬなし。大將はいまだ此の年頃聞き給はぬに、親とも覺え給はず、氣恐ろしきまで悲しう覺え給ふ。四人8の童べ細く和かなる聲の面白き9出だして、秋の野の虫の鳴かんよりも哀なる事を云ふ10を、同じ聲に合せて舞ふに、いよ〳〵哀がらせ給ひて、御扇して拍子打たせ給ふ。朱11雀院の、

面白く哀に何なき事を聞きて苦しくは12何のなに(〇何カ、名にカ)せん(〇底本歟トシテ提頭セズ)

といと目出たくをかしき御聲13繼り合せて14誦せ15させ給へば、嵯峨の院、

哀なることの驗の見えざらば何をか後の形見にはせむ

と聞えさせ給へば、人々めで聞ゆ。「今暫し」と宣はすれば、「日頃亂り心地の惱ましく侍16りけるにや」とて

校異 1 靡ざらんや。 2 圖則は。 3 宮は。 4 寅考異の如く。 5 要落。 6 イげにアリ。 7 圖イまほ。 8 圖イナシ。 9 圖をアリ。 10 圖考異ナシ。 11 圖雀。 12 圖ナシ。 13 聲に。 14 圖誦せ。 15 圖イナシ。 16 イるけ。

彈きさし給ひつ。朱1雀院なかく此度は、いよく飽かず覺えさせ給ひて、内侍の督に、かく、

琴の音の飽かざりしより白雲の下り居て今日ぞ嬉しかりける

御返事、

「塵積る山も何せん雲かゝる殊の外なる宿を嬉しみ

と2は身にこそ思3ふ給ふれ」と聞え給ふ樣のいと目出たければ、いかで萬にかゝりけんと思はす。

犬宮にりうかく4、かゝる大方の聲に合せて彈かせ奉りて、試みんと思して、彈かせ奉り給ふ。院の上、「變る5仲は」と宣はす6るりうかく7を、「曉の調に物し8侍9り」とて、我彈き給ふやうにて、彈かせ奉り給ふ。曉になりにけるに、いといみじく面白く、樂の聲皷の聲を暫し整へさせ給ひて、皆一度に押し入るるやうに消ちて、たゞ琴の聲の限り上に昇りて澄み10彈く事、大將の御手よりは勝りたり。大將の11みぞ人知れず怪しと思ひ給ふ。源中納言の、「怪しくりうかくの聲は、曉なれど少しこそ變れ。此のかう樣の音は、大將は同じやうに12え傳へ給はざりける事かな」と宣ふを、近き程なれば、一院の上、「げにまだ聞かざりつ。萬の樂の聲、皆13けに、琴の聲の限り、聲々に面白う哀なるは、さる調を離れて有りけるには、かの樂にぞ。今少し樂の聲高く14仕れ。怪し15樂の音のた〔弛カ、垂カ〕れてあるか16」とて遣はす。「樂の音、例限りあ

校異1因雀。2因考異ナシ。3因う。4因風をアリ、因考異をアリ。5イなる。6因れば。7因風アリ。8二字因給ふ。9一字因る。10イ響。11國イぞみ。12因はアリ。13因消ち。14異仕うまつ。15因くアリ。16因なアリ。

れば、曉に合せて仕うまつる」と申す。たゞ琴の聲は様々の響數多に分れて、面白う1て、笛の聲は沈み2細う聞ゆ。ほの〴〵と明け行くに、風の音はせで、空少し霧り渡り澄みたり。折の面白きに、琴の聲3は4そて哀なり。内侍の督一度にかくと聞かせ奉らむとて、「いとよう彈かせ給ふかな」と聞え給ふに、驚かせ給ひて、几帳の帷子ふと引き上げて御覽ずれば、内侍の督の彈き給ふにはあらで、容貌の明きに、大宮の5いと白う美しげにて彈き居給へるなりけり。早やかくなり6けりと見給7ふに、いといみじくかなしく覺えさせ給ふに、泪こぼれさせ給ふ8、念じ9て、「これは此の兒の彈くなりけり」と宣はするに、「如何に〳〵」と人々驚きて、實に、物のついではいみじかりけるものかなと聞き驚き給ふに、げに道理と聞えたり。「たゞの人は、一生を濟ひ10てな11く(〇習)ふとも、更にえかくは侍らじ。これはさるべくて彈き給ふなりけり」と聞ゆ。12右の大臣、此の中に勝れて嬉しう覺え給ふ事限りなくて、「喜びにも涙止められず侍りける」と啓し給ふなれば、女御の君一13宮14の御心、いと哀に嬉しく覺え給15ひて、嵯峨の院、一巻は讀へずしめりけり。いみじう聞かまほしと思ひし昔の手を彈き、末の世にかく有り難き事の習まれぬる事」と聞え給ひて、いとにたく上手に吹かせ給ふ高麗笛を、これに合せて16つ(〇次カ、着カ)かせ給ふに、更に兒の彈き給ふやうならず手づからとげける事と、いみじく哀なるに堪へず、と位にせで、立ちて舞はせ給ひつゝ、

校異 1 異本ナシ。2 閑てアリ。3 以下二字閑わき。4 一字異ナ。5 異本異ナシ。6 閑にアリ。7 閑本異はする。8 閑をアリ。9 閑させ給ひアリ。10 閑居アリ。11 イら。12 閑左。13 閑しアリ。14 閑イナシ。15 イふ。16 イ吹。

姫小松ひきつることに忍びあへず白き1頭の新羅舞2せん

と宣はするに、右の大臣、

雲の上の下にも通ふ末の世にひき留めつることの嬉しさ

式部卿宮、

此の世にはあらぬ事とぞ思ほゆる空には響き水3の流れて

右大将、

琴の音4に昔に澄める曉は水も流れて悲しかりけり

となん。人々ありけ5るを6書かぬ7 8は本のまゝなり。源中納言は大將に、「何事をか思ひ給ふ」と聞え給へば、藤壺の御局を見遣りて、「いかでなほ物をば思はぬぞ。心9かるの御心や」と宣へば、「10いさや、などかは。11いさゝ12聞きなさん」とて笑ひ給ひぬ。13流れ14て出つる水明くるまゝ15にもとの如く干ぬ。16朱雀院今宵の内侍の督の祿にいかなる事をせん、犬宮に、いと上手に同じごと彈き給ふにつけても、いかで17珍ら18しかな19る事をせんと思す。万兩の黄金も惡く思して、嵯峨の院に、「世を去り侍りて、今宵の祿

校異 1 因白髮。2 國け。3 四字異流れつゝ。一字国も。4 国の。5 因れど。6 以下十字國ナシ。7 因考異さアリ。8 以下五字国ナシ。9 国憂。10 国答。11 国かゞ。12 國ナシ。13 以下廿字因ナシ。14 以下三字異出ていつる。一字国出で。15 一字國イナシ。16 因朱雀。17 イかアリ。18 因ナシ。19 因考異ナシ。

をこそえ心のまゝに侍るまじけれ」と申し給へば、「げに如何はあるべからん。此所には世を去りて久しくなりにたり。大將を人より越して、大臣になして、此所にて大饗せさせたらん、昔の禮を少し殘しと見るべきを、かの正身には、正二位の加階を物して、珍らかなる事を留め置かんなむかの身には[1]〈榮〉あるべき。中宮權大臣此所に聞えむ」。「内大臣[2]右大將藤原[3]朝臣[4]それがし、内侍の督正二位に加階し給ふべし。家の大饗に準へて、内侍の督の家に大饗許されん。殿のまゝに女[5]たい來たり合ふべし。その[6]宣旨を[7]朝め[8]て、嵯峨の院も率し下す。かの日の設け物は院より送るべし。家々の太政大臣同じく傳へて用意せさするべし。[9]朱雀院の女一[10]宮を男に準へて、四品の位賜ふべし。このよしを仰せ給ふべし」と聞かせ給ひて、[11]左[12]右大臣[13]左大將のそば聞かせ給はで、官位をこれに聞き付けて近う召して惑ふに、二三人は聞き出でて奉り給ふ。右大將その御氣色を賜はりて、「仰せ言は限りなく畏けれど、更に此の度の大臣の宣旨は承はらじ」。強ひて御顧み候はゞ、添く御幸せしめ給[14]ひつる、畏まらん侍めに、所に宣を賜はらん」と度々啓し給へば、[15]朱雀院は嵯峨の院へ、「啓せらるゝまゝにも」と聞え給へば、たゞ御消息にて左大將召して、嵯峨の院内裏に奏せさせ給ふ。「年高くなり侍りて、心地のはれ〴〵しうなく侍るに、此の内侍[16]督の家、昔見給へしゆかしさに参うで來て、琴彈かせて聞き侍るに、珍らかなる事どもなん。[17]故治部卿の朝臣、公

［校異］1イナ、國イて。2肖ニアリ。3國のアリ。4四字國考異ナシ。5國大饗ある。6異宣。7異本召し。8イしめアリ。9國朱雀。10國のアリ。11國ナシ。12異本異ナシ。13國右。14國へ。15國朱雀。16異のアリ。17國イ故。

人として侍りし後だに、身を公に隨へて唐土の使に參うで、逆の風に遭ひて多くの年1父母の顏も相見ずして、悲しき目を見て、たま〳〵歸り侍りて後、同じきやうに、幾何も侍らぬ程に亡くなり侍りにき。內侍の督男ならましかば、一度2に大臣にもなさまほしくなん今宵の事に3思4ひ給ふる。これいと〳〵易き事に侍るを、唯今宣旨下し給へ」と奏せさせ給ふ。「その冠に5は、右大將の朝臣、大臣にと思6ひ給ふ7と、度々遁れ申せばなん、故治部卿の朝臣三位になん侍りし、ぞ8ら〔○贈〕9位の中納言になさせ給へ」と奏せしめ給ふ。一院は、「嵯峨の院の御幸侍るに、對面賜はらんとてなん物し侍る。いたはらんと思ひ給ふる童四人、10左11衞門尉に12缺侍らんに、これ同じ13く侍らまほしくなん」と奏せさせ給ふ。事の由を奏す。委しく問はせ給14ふ、聞し召して、「げにいと珍らかなりける人の琴の聲なり。輕々しからずば參りても聞くべかりけるをとなん覺えし」と宣ひて、嵯峨の院の御返、「畏まりて承りぬ。げに難く例なき事に侍15(り)とも、仰せられん事はいかで。ましていと易き事どもに侍り」右大將の事を聞かせ給ひて、「なほ用意ある人なりや」と宣はせて、治部卿16中納言になさせ給17ふ、京極に冠賜ふ。內侍の督の事も奏し給ふまゝなり。朱雀院の御返、「かねて仰せられ氣色承はらましかば、自らも參り侍るべかりけるものを。衞門の官どもは行く末の缺も心もとなく侍り。今もたゞ仰せられんになん」と奏せさせ給ふ。左大辨立ち歸り參りて啓すれ

校異 1 因月を經てアリ。2 國は。3 因はアリ。4 因う。5 國イしアリ。6 因ふ、因う。7 イれど。8 イう。9 因官。10 因ナシ。11 因右のアリ。12 因成し。13 因うはなさ。14 因ひ。15 一字イニヨリテ補フ。16 因をアリ。17 因ひ。

ば、宣旨1のと2かく下りたるを、院の上達も喜ばせ給ひて、上達部の中に告げさせ給3ふて、宣旨高く讀むを、内侍の督聞き給ふに、治部卿の所に、涙落ち悲しくて、身の内侍の督になり給ひしよりも嬉しく覺え給ふ事限りなし。右大將4此の事の喜びの由奏せさせて舞踏し給ふ。嵯峨の院は忽ちに思すやうに花やかなる事の、大將のなきを5なほ飽かず思さる。御方々より童べの舞ひつるにかづけさせ給ふ物、色々6心地過ぐ、樣々なる被物。搔練の目出たく打ちたる、朝ぼらけにいと／＼をかし。御方々、「世に又類なく物し給ひける人かな」と宣はぬなし。大宮の彈き給7へる樣を、親宮の、かの五十日の御參りし程の、昨日今日と思すに、8今宴なり。嵯峨これを我が御子と思はましかばと思す。

院の上二所、左右大臣宮達上達部御供にて樓御覽じに登らせ給ふ。嵯峨の院は西の端よりおはします。9上の皇子10上達部左右分けて、御後に歩み續きたり。樓の香ばしき匂限りなし。御方11を御覽じ渡すに、なかしく艶かし12。見所ある樓の中の有樣御覽じて、「いみじくをかしく、目出たく13したるかな」と仰せらる。まして嵯峨の院はうら／＼じく花やかにめでさせ給ひて、「琴の音を聞くと此所の有樣を見るとこそ天女の花園もかくやあらんと覺ゆれ」と宣ふ。朱雀院靜かに御覽ずるに、猶飽かず目出たければ、「げに此所に、帝王よあしからん人の居るべき所の樣にはあらざりけり」と宣はす。やんごとなき限り隙なく樓の廻りの勾欄

校異 1 國ナシ。2 イナシ、國イと。3 國ひ。4 イ二。5 國イナシ。6 イ濃く薄く。7 遊びつ。8 國いと。9 國宮異一說のアリ。10 國達アリ。11 國々。12 國くアリ。13 國イかアリ。

に侍ひ給ふ。山の高き1より落つる瀧の、傘の柄さしたるやうにて、岩の上に落ちかゝりて沸き返る2下に、をかしげなる五葉の小松、紅葉の木、薄ども、濡れたるに從ひて動く、いと面白きを御覽じて、朱雀院、

　住む人も宿も分かねばまとゐして世を盡くすべき心地こそすれ

右の大臣に、「羨ましの家の主や」と宣へば、いと3とく、

「やゝもせば枝さし勝る木の下にたゞやどり木と思ふばかりを

今日よりはましていと畏くこそ」と啓し給ふ。心ばへ哀なりと聞かせ給ふ。

嵯峨の院樓の上にさし上りて、いといかめしき森のやうにて、櫻の木有り、「哀此の木見るこそいと恐ろしけれ。昔十餘歳にて、春ごとに來つゝ書見るとて、見困じて下りつゝ遊びし。いで、此の4樓な5らば及びなんや」とて、

　6春來ては我が袖かけし櫻花今は木高き枝7見8つるかな

近う侍ひ給ふ源中納言、

　かねてより雲かゝりける櫻花9むべこそ末の木高かりけれ

宮内卿年七十な10る、「哀昔を思ひ出で侍れば、あの岩の下の松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしう。

校異 1國イナシ。2因考異尻。3國イど。4因考異樓。5因く。6國イ村菊。7因をアリ。8國ナシ。9因う。10二字因考異り。

ましで引き植ゑ侍りしぞかし」と1奏し給ふ。七八2本ばかりして、上（かみ）にひらみたる松を見遣り3て、宮内卿兼躬（かねみ）、

　引き植ゑし子日の松も老いにけ4り千世の末にもあひ見つるかな

此の歌を嵯峨の院いみじう哀がり給ひて、一院に、「此の返しには、民部卿を數多（あまた）の人望み申すなるを、此の朝臣を5必ずなさせ給へ」と6奏せさせ給ひつ。「これ7のみこそ古人（ふる）の留（と）まりたるはあれ。いと哀なり」と申し給ふ。「いみじう面白き所なりや。時々物して、さるべからん折に、左大辨に文作らせて聞かん」など宣はすれば、人々、「げにをかしう侍らん」と啓す。

歸らせ給ひなんとす。朱雀（すざく）院大宮の御方に御對8面（めん）せさせ給ふ。内侍の督大將、「いと忝き御幸（みゆき）を、いかゞ仕うまつるべからん。唐土（もろこし）の集（しふ）の中（なか）に、9小册子（こさうし）に所々繪書き給ひて、歌詠みて、三卷（まき）ありしを、一卷（まき）を朱雀院に奉らん。嵯峨の院には如何（いかゞ）」と宣へば、「高麗（こま）笛を好ませ給ふめるに、唐土（もろこし）の帝の御返賜ひけるに賜はせたる高麗笛を奉らん。上達部は例の作法（さはふ）の御10裝（よそひ）あり。若くおはします宮達には、なべての樣（さま）にはあらず、いかでをかしき樣ならん物こそよからめ」と聞え給へば、「しか用意して侍り」とて、皆樣々に奉らせ給ふ。唐（から）の色紙（しきし）の繪は、一卷といへども四十枚ばかりなり。紫檀（したん）の箱の黄金の口置きたるに入れたり。御覽じて、

校異1因考異中。2因尺、因考異本。3イ給ひアリ。4國イる。5因考異ばアリ。6因考異中。7國イナシ。8因面（め）。9國こざかしき。10因裝（よそほひ）。

「此所にこそ、今宵の物には不死藥1でもがなと思へ。さても、これはいと見まほしく思2ひ3のに」など宣はす。嵯峨の院の御前の袋は、色より初めて、いと清らにうるはしき錦の袋にて、4瑠璃5鏤き箱に入れたる、透きて見えたなる、人々興じ給ふ。上も好ませ給ふ物にて、いと7よし。式部卿8宮三所の大臣には女の裝ひ、衣箱に入れたり。さての外は例のごとなり。皇子達には白銀の小唐櫃を作りて、黄金の透箱袋に入れて、昔ながらの鉤着けて奉り給ふ。珍らかに驚かしうし給へり9と云ふ。嵯峨の院、「面白かめ物の音ななかなかになん覺ゆる。今一度10だに、いかで必ずとなん思ふ。それは11東宮の梅の花の折をなん物し給へ12にや」と宣13はす。朱雀院近う寄らせ給ひて、「いと飽かずのみ思ひ聞ゆるを、いかでか又かやうにては聞ゆべからん」。大宮のいと興じ給へる音ひは聞えん方なきに、なほ限りなき御志14籠りたる身をこそ任せ奉らんと思へんと、まめやかなる事どもを有りし聞え給ふ樣なれば、あはれにまめ〳〵しう宣ふを、御容今めかしからず、心寛かしき15れに聞え給ふ。右の大臣16も、とくら出17でさせ給ひなんと、心安からず覺え給ふ。

嵯峨の院、内侍の督には、小袿一襲に女の裝ひ、又女の18裝束卅19具、皆女房裝束具したり、女房の中に遣はす。朱雀院、衣筥一よろひに唐綾織物の夏冬の20裝束、又女房の中に女の21裝束廿22具、藏人・下仕四

【校異】1國にて。2以下五字國ふ物かなと。3以下五字國よきのになど。3以下二字イ給ふと。4國侍れ。5イのアリ。6國りと。7又御氣色アリ。8國ウアリ。9三字國ナシ。10國イナシ。11國東の年。12イ折アリ。13國考異上。14國もアリ。15イ程。16國は、字考異ナシ。17國だ。18イ裝。19國具。20國裝。21國裝。22國具。

人、織物の汗衫1れう(〇綾)の2表の袴具したり。左右の樂人皆二人の御方々より祿賜ふ。事皆果てゝ歸り給ひぬ。御方々、飽かずいみじかりつるものかな、常にかゝる物の音を聞3き、此の人の容貌有樣を、如何ならんとゆかしく、飽かぬ心地し給ひて歸り給ひぬ。大將の御心ばへも珍らかに、いよ〳〵世になき樣にて、親も子をもてなしかしづき給ふ事と思し宣はぬなし4。5次の巻に女大饗の有樣、6大法會の事はあめりき。季英の辨の女に琴教へ給ふ事など7殘れ8(り)。一つにては多かめれば、中より分けたるためりと本にこそ侍るめれ。

校異1イれ。2国ナシ。3因く。4国となんアリ。5以下六十七字因ナシ。6以下四字因考異ナシ。7以下三十二字因考異も多くあるべけれどさのみは煩はしうてさし措きぬ又事のついでに聞ゆべしとぞ。8一字イニヨリテ補フ。

うつほ物語　終

右宇都保物語全部借田中道麻呂以二箇正本定巻次第
校合之本以校合畢

天明四年甲辰三月十三日　本居宣長

右宇都保物語全部廿巻以本居氏蔵書校合畢

文化十二年乙亥九月十日従四位上荒木田神主興之

附錄

例言

藤田德太郎

一、日本古典全集本宇津保物語の附錄として、桑原やよ子の「宇津保物語考」及び殿村常久の「宇津保物語年立」を收めた。

一、兩書とも、此の物語の研究書としては重要なものであり、逸すべからざるものであるが、從來活版に精刊せられる機會がなく、從つて多くの研究者の目にはふれなかつたのである。

一、「宇津保物語考」一條は、水戸彰考館文庫本を底本として、これに、帝國圖書館本、及び竹柏園本をもつて校訂を加へた。

一、「宇津保物語考」の寫本は、決して少くないものであるが、特に此の三本を選んだわけは、それが、校訂を加へる上に、自分に取つては甚だ便宜であつた爲めであると共に、また、此の三本は、他本にない著しい特色を備へてゐたからでもある。

一、竹柏園本は、村田春海の本で、井上文雄舊藏本であり、最も由緖の正しい本である。但し、この本文には誤寫の點が散見して、他の兩本よりも、必ずしも善本と云ふ事は出來ない。これは、春海の奧書に云へる如く、「この頃人して俄に寫させつれば、書きたがへるもありなん」と云ふ理由によるものであらう。か

う云ふわけで、今此の本を底本としなかつたのであるが、その本文は、最も「宇津保物語考」の原形を示すものと思はれる。即ち、此の本の含む部分が、「宇津保物語考」の原書の範圍である。

一、併し、水戸彰考館文庫本と帝國圖書館本とには、竹柏園本にない、後人の書加へた增補の部分が澤山ある。これは、「宇津保物語考」の原書だけを見るのには、原形を損ふものであるが、併し此の物語を研究しようと欲する者に取つては、甚だ貴重な研究資料に富んでゐるのであるから、今此所に、此の兩本によつて、その增補の部分をも、共に收める事としたのである。

一、底本に採つた水戸彰考館文庫本は、小山田與淸の自筆書入のある本で、即ち、「宇津保物語考」に、朱で、與淸が特に書入を加へて、その硏究を、增補訂正し、終に、山岡明阿の考、賀茂眞淵の「宇津保物語考」、及び、屋代弘賢の「空穗物語考」を書加へたもので、桑原やよ子の考の他、これら諸家の考說をも知る事が出來るのである。此の校訂本では、弘賢の朱で書加へた註記は、すべて、（圏、……）と云ふ形式で、適當の箇所に補入しておいた。勿論、原本通りの形式で、原本通りに、これを組入れる事は出來なかつたので、適當に整理按配したのである。

一、帝國圖書館本は、「宇津保物語考」の原書の中間に、狩谷棭齋本、及び、難波本の、各卷の標目や、縣居翁說を收め、終に、又、此の物語に關する考說が記してある。此の增補者は誰であるか明かでないが、中間の增補の終に、正路の署名があり、且つ、その文章の中に、「我友淸水濱臣」とあり、終の考說の中に

も、濱臣の意見が記せられてゐるので、恐らくこれは、右の正路の書き加へたものであらう。然らば、正路とは何人であるかと云ふと、恐らく、村田春海に學んで、清水濱臣とは同門であつた、植村正路の事と思はれる。當時學事に趣味を有した君侯に菅見正路があるけれども、此の正路は菅見氏ではあるまい。

一、以上の如く、此の三本は、それ〴〵に特色があつて、これを一所に集成する事は、此の物語の研究者に裨益する事が大である。のみならず、その傳本の關係も密接であつて、竹柏園本が春海の本であるのに對し、水戸彰考館文庫本は、春海の門弟なる弘賢の本であり、帝國圖書館本は、同じく春海門の正路の本であり、これに、眞淵、俊明、貞丈、弘賢、與清、濱臣、その他の諸家の說も集成せられ、見られるのであるから、猶ほ便宜があると思はれる。

一、此の校訂本では、著しい誤脫の他は、殆ど底本のまゝにして、これに、㋑として帝國圖書館本により、㋺として竹柏園本によつて、括弧内に校異を示し、又括弧内に圈點を附して、その下に校訂者の註記をし、所々に記入しておいた。明白な誤謬は、斷らずに、他本で訂正した。又、校異は、底本の漢字の讀み明瞭でないものを、他本によつて、その讀の示されたやうな所を記してあつて、必ずしも、文字の相違の箇所ばかりではない。また、中には、「の」の有無の如き類似たものは、一例を示して、他は類推して貰ふ事にし、校異を悉す事を省略したものもある。

一、句讀點及び濁點は今新に加へたもので、原本には殆どない。又、組版の便宜の爲め、讀み易いやうに、

形式を變へて、原本の體裁とは違つた所がある。

一、諸本に共通の朱書入が存し、これは、水戶彰考館文庫本の、與清の朱書入と違つて、原書にあつたものと思はれる。此の部分は、(朱)と頭に記して、その下に書き記して、與清の朱書入と區別した。

一、水戶彰考館文庫本、及び帝國圖書館本によつて、增補の部分を加へた爲め、賀茂眞淵の考說が、兩本で重複して出でた。これは既に、「賀茂翁遺草」や「海錄」にも收めてあつて、活版になつてゐるが、今重複をも厭はず、寫本のまゝに收めたのは、寫本の體裁を損ふ事をおそれたが爲めである。但し、此の眞淵の考說は、一枚の紙片に記された眞淵の自筆稿本も傳へられてゐて、今竹柏園に藏せられる。

一、「宇津保物語考」は、以上三本の他、無窮會所藏の二本がよい。その中の一本は、「宇津保物語卷次第」と題し、次のやうな奧書がある。

此の一卷はさゞ浪の屋の大人の書集められしものなり。
ことし文政二とせう月十三日に寫させてひとわたり本に讀あはせぬ。　(〇花押)
此本賀國大人より借得ておちたる條またたがへるところ〳〵うつしとゞめたるは慶應四とせう月七日の事也　　安昌

又、他の一本には、「宇津保物語考桑原氏刀自著」と題し、次のやうな奧書がある。

此一卷はさゞ浪の屋の大人の書集められしものなり。

此ふみは川井房郷ぬしのもたるをかりてうつせる也。
天保のとゝせとふ年の秋なか月　隆子
明治十四年十一月十三日以右本一校了
井上[illegible]次郎

即ち、何れも、清水濱臣の本より出たもので、これも、此の「宇津保物語考」の諸本の中では、重要なものである。清水濱臣は、此の物語の諸本の校訂本を作り、又、註解をも物してゐて、此の物語の研究者であつた。同じく此の物語の校本を遺し、且つ、此の物語に關する考説をも記してゐて、此の物語の研究者の先達なる、山岡俊明、田中道麿、屋代弘賢、狩谷棭齋等と、並び稱せられる古物語研究者の一人である。なほ、「宇津保物語考」は「宇津保物語目録」とも題したものがある。又、「宇津保物語[illegible]考」と題した寫本は、靜嘉堂文庫にも藏せられる。元來、此の書の原題名は定かでなかつたらしく、竹柏園本等には内題がなく、たゞ外題に、「宇津保物語考」などと記されてゐるのである。故に、表題を缺く時には、その題名が不明となるから、右の如く、種々なる書名をもつて呼ばれたのであらう。これらの名は何れも、此の書の内容の一部を示したもので、此の書は、此の物語の卷次に關して、自己の説をも述べ、又、他の古寫本等の巻序をも記した部分が、一半を占めてゐる。併し、此の書の他の重要な部分は、專ら、人物の系圖を記した所であつて、此の點から云へば、此の研究書は、「宇津保物語系圖」と題して差支へないものであ

る。實に、此の物語の複雜な人物關係を系圖として示した、最初のものであらう。併し、此の書には、系圖、及び卷次に關する研究はあるが、年表的研究は全然缺けてゐる。此の缺を補ふ爲めに、今、附錄として別に「宇津保物語年立」を加へる事としたのである。

一、「宇津保物語年立」一卷は、殿村常久の著、文政三年の本居大平の序文があるから、その頃の刊行であらう、なほ、淸水濱臣の序文がある。內容は、年表と、各卷、及び人物の年代に關する考證があり、終に、物語中の矛盾せる點を指摘してゐる。此の刊本は、あまり世間に流布しては居らず、さう多くある本ではないから、今家藏の本によつて收めた。これは師岡正胤の舊藏本であつたと思はれる。校訂に當り、句讀點や濁點を新に附したが、その他の點は、殆ど原本の通りになつてゐる。

一、右の兩書によつて、此の物語の系圖、年表が備はり、又、諸家の說をも知る事が出來る。これに、細井貞雄の玉琴、或は玉松を拌せ見れば、舊來の研究は殆ど盡きてゐるのである。しかも、細井貞雄の研究は活版となつて弘く世に知られ、研究者に便宜を與へてゐるのに、此の兩書の如き好著が、學者に利用せられない事を遺憾に思つて、此所に收載したのであるが、此の兩書だけでも、此の全集本宇津保物語の讀者の活用に委ねられる時は、その功益の甚大なる事を信じて疑はない。

昭和八年四月五日　　校訂者識

（要、桑原氏刀自は、桑原隆長〔立朝臣〕といひけるくすしの母なと、源明経がいひたりき）。

桑原氏刀自著（○此ノ行竹柏園本ニナシ）

うつほ物語、悠りましに見侍りつれは、大臣公卿時めき給ふおほかれど、これの御子誰の御末など、さだかならねば心もとなく、まして、みかど后おはしませども、たゞ並給へる御うしろみなど、とりたてゝ心うる事も侍らず、大かた、としかげのぬし藤原のかねまさの北の方にて、その御子なかたゞの朝臣生れ給ひしより此かた、おひ出て位まし給へることの（仔みアリ）、みるにたよりあることゝもし侍る。後の事などありしやうに聞給へながら、昔とふべき人もさぶらはねば（刊ど）、かへすがへすもみ侍りしに、昔の事かきつられたる書の數々、さま〴〵に、よろづの道（司言アリ）とし月にそへてかはりゆく世なれば、みる物（刊ナシ）につけてしらぬもおほかり、又かんなもうつしあやまれるかきにしもあらず、まして浮き心をたどられど、心ばへみえて、昔も今も人の心のおなじ樣にや、くまなくおしはかりさとれる所あり、今み給へしらぬ事など、げにさと思ひあはする事有（刊なり）、うち見つゝ、わが心にかよひてをかし。後々のついでおぼつかなく、これやかれかなどゝとめつゝみ侍りつれば、上下のたがひ後のつぎ〴〵などみだれ入たるもあり、又つくろひみるべきにもあらず。まして系譜などは、たゞしきことにし（刊ナシ）侍るを、これが（イ刊ば）やみにたど（刊れヌリ）ることゝもにてさきらかならねば、たがへるもおほからむと思ひ給へ（刊ひ）なむを、わが子むまごなど、此物語を見侍る時のたよりにもと、しるし侍る。げにおよばぬことをはるかにおもひあぐらすもかた

はらいたしや。

板本卷之次第

○藏びらき上之一上之二　一、中　二、下　三。○樓の上上之一上之二　四、下之一下之二　五。○菊の宴上下　六。○藤原の君　七。○たゞの村鳥　八。○たゞこそ　九。○吹上上　十、下　十一此卷上下(チ四字ナシ)(イ違アリ)○祭の(チナシ)使　十二。○嵯峨の院上中下　十三。○梅の花笠　十四。○初秋上下　十五○こしかげ上下　十六。○あて宮　十七。○國ゆづり上之一上之二　十八、中之一中之二　十九、下　二十。

都合二十卷、上下をわかちて(チナシ)三拾卷之。此次第のごとくにては彌見わけがたし。よりて私に次第す。

私に定る卷之次第

藤原の君　たゞこそ　こしかげ　藏びらき下　祭の使
梅の花笠　吹上　菊の宴　初秋　あて宮
たゞの村鳥　藏開上中　國ゆづり　嵯峨の(チナシ)院　樓の上

一藏びらきの下

此卷、藏びらきの下にあらず。其故は、藏びらきの卷の初り([不][刊]に〻)なる([不]か)たゞ中納言、後に大將とみゆ。藏開下の卷に侍從とあり、又あて宮東宮に參り給はぬ先の事有、これによりて、くらびらきの下にあらざる事しるし([刊]をしれり)。としかげの卷の後に見([刊]侍りアリ)てよろしかるべきか。

一梅の花笠

•此([刊]の)卷の末、いときよらにあまたといふより下は、あて宮の卷の末なるべし。

一たづの村鳥

•此([刊]の)卷の末、ふぢのかゝれるを松の枝ながらをりてといふより下は、梅の花笠におなじ。

○
○○

- 先帝
  - 中務宮　御母不知。藤原の君の卷に先帝の御はらからの中務の宮と有。
  - 嵯峨院　(圖、樓上下ノ二)　御母不知。梅の花笠の卷におりさせ給ふよし見ゆ。
  - 朱雀院　(圖、同上)　御母不知。樓の上の卷に、院御子たち、此御はらに七所九所かうぶりし給ふ、

二所は又(手またこ)わらはにて打つゞきてゐ給へりと有。又さかの(手嵯峨)院の巻にに壽殿の御腹に御子八所おはしますよしみゆ。何れをいづれと知がたし。其間少し事の知たるを下にのす。

式部卿宮
御母不知

右馬君
母不知。祭の使の巻に式部卿の宮の右馬(手のアリ)君と有。此人なるべし。

女
母不知。樓(手のアリ)上の巻に宮の女御、此人歟。さかの(手嵯峨)院の巻に手車をゆるされ給ふよしみゆ。初秋の巻に朱雀院の式部卿の女御と有。

中務宮
御母不知。

兵部卿宮
御母不知。

女
母不知。樓の上の巻(手二字ナシ)に侍從のめのとゝ聞ゆ。同じ巻に一宮の御はらからの宮かよひ給ふよし見ゆ。

三伊國ノ
源氏すゞし
又すゞし共、すかしとも見ゆ(手有)。同人歟(手と見ゆ)。紀伊國種松が女、吹上の

巻に、帝神泉に紅葉の賀きこしめしゝ（[石]たる）時、正四位右近（[チ]のアリ）中將にたされぬ。初秋（[チ]のアリ）巻に宰相中將、たづの村鳥に中納言。（[图]、國ゆづりノ下中納言）。

（[图]、大宮）

―若宮
男宮とも女宮とも（[チ]四字ナシ）なし。棚の上に大后の御はらの若宮と有。

―女一宮
御母后の宮。藤原の君の（[チ]二字ナシ）巻にまさよりの北（[チ]のアリ）方に成給ふ。大宮ときこゆ。

―女二宮
御母不知。

―女三宮
御母不知。后腹か。かねまさの北方に成給ふ。

―女四宮
御母后宮。日の宮と聞ゆ。今上の后に立給ふ。承香殿に住給ふよし國ゆづりの巻にみゆ。

（[图]、サガノヰン）

―今上

御母后宮。餘の卷々に東宮とあり。さがの院の卷に今上とみゆ（圀以上十二字、國ゆづりの下ニさがの院トミユ）

―二ノ御子

御母不知。やまひして法師に成給ひて、西山におはしますよし、さがの院（圀四字、國ゆづりの下）の卷に見ゆ。

―彈正宮　　（圀、帥宮國ゆつりの下）

御母。

（圀、○）　　（圀、五宮同）

（圀、○）　　（圀、常陸太守）

―七宮

御母中の君の姉女御（圀三字、女御）と嵯峨院卷（圀四字、國ゆづりの下）に見ゆ。

―八宮

―九宮

御母更衣と嵯峨院卷（圀以上四字、國ゆづりの下）にみゆ。

―女一宮（朱）―（圀、いぬ宮）　　（圀、國ゆつりの下御產）

御母仁壽殿女御きさよりの女。菊の宴卷に一ノ内親王と聞ゆ。たづの村鳥(丑のアリ)卷になかたゞの北の方になり給ふ。樓の上の卷に男にをそらへて四品に叙し給ふと有。

―女二宮
御母不知。

―若宮
御母藤壺女御きさよりの女あて宮ときこゆ。(圏、東宮に立給ふ、末に内と見ゆ)。

―二ノ宮
御母同。

―三ノ宮
御母なし壺の(丑ナシ)女御、かねまさの女。

―四ノ宮
御母藤壺(丑のアリ)女御、若宮に同じ。

(圏、五の宮御母そきやう殿、樓の上ノ一ニおり給ふ)

○

―太政大臣
諱とゝなし、藤原の君(丑若宮)卷に右大臣顯、國ゆづりの卷に薨し給ふよしみ

ゆ。祭の使卷にてはまさよりの弟歟、猶可考。

―さねまさ

母不知。藤原君卷に中將。國ゆづり（チのアリ）卷に（チナシ）大將、民部卿と聞（チ見）ゆ。

―某

藏開卷に童とみゆ。

―さねより

母不知。國讓（チのアリ）卷に中將、後宰相。

―さねたゞ

母不知。（異、源國ゆづり）。宰相ときこゆ。後新中納言。（異、國ゆづり板上ニ中納言）。

―女

母不知。國ゆづり卷に宮の女御ときこゆ。

―某

母北方。父君の山へ入給ふをこひかなしび死給ふよし。

―女

母北方。國ゆづりの（チナシ）卷に、後に東宮の御くしげ殿に參り給ふよしみゆ。

（宋、板閣ゆづり中ノ二右大臣トアリ同下の一二位）

（眉、板本閣ゆづり下右大臣贈正二位左大臣贈従二位ないしのかみ三位）

―まさより

（眉、としかげ七十ウ左大將）。藤原君（[チ]のアリ）巻に、昔藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましける（[イチ]り）、よろづのかんだちめ（[イ]へ、[チ]の）みこたちむこにとらんとおもほす中に、時の太政大臣のひとりむすめに御かうぶりし給ふ夜むこどり、かぎりなくいたはりすませ給ふほどに、時の帝の御いもうと女一のみこときこゆる、后ばらにおはします、父御門母后の給ふ、たゞいまのみるめより、行さきなり出給へる人也。わがむすめ此人にとらせてとの給ひてむこどり給ふと有。同巻に大將かけたる正二（[イチ]三）位大納言。としかげの巻に右（[イチ]左）大將。たづの村鳥に右大臣贈。さがの院（[チ]の巻アリ）に左大臣と見ゆ。祭使巻にさがの帝の御時中將とあり。

―たゞずみ

梅の花笠巻にさたずみ（[イ]とアリ）あり、同人歟。母宮。藤原君巻に左大弁。たづの村鳥に大納言。（眉、菊ひらきの下ニ右エ門督にたゞずみの中納言）。

―もろずみ

母同。藤原君の（[チ]二字ナシ）巻に右兵衛のすけ。梅の花笠に右衛門。たづの村（[イチ]鳥アリ）に左大弁。

―すけずみ

母同。藤原の君の卷に右近中將。藏人頭。たづの村鳥に宰相。

―つらずみ

母同。藤原君卷に右衛門佐。又左近中將頭かけたりと有。

―あきずみ

母おほいどの。藤原君卷に右兵衛佐。梅の花笠に左衛門佐。(木、坂國ゆづり下
四位、又兵部大輔)

―かねずみ

母同。藤原君卷に兵部大輔。梅花笠に少將。

―なかずみ

母宮。藤原君卷に侍從。としかげの卷の下(木、七十七)にらくそん舞し人。

―八郎

誰ともなし。母おほいどの。藤原君(手卷アリ)におほいどのゝ大輔と有。

―きよずみ

母同。藤原君卷に式部のせう殿上人と有。

―よりずみ

母宮。藤原君に右兵衛尉藏人。梅花笠に右衛門尉。

（国、仁壽殿）

―ちかずみ

母おほいどの。藤原君に大夫とあり。（国、藏開下右近中將、國ゆづり上の一廿二）

―女

母宮大ゐ殿（刊君）と聞ゆ。朱雀院の仁壽殿の女御腹。藤原の君に御せうとの今の帝につかふ（行う）まつらせ給ひける（行り）。男四人、女三人、七人の宮たちの御母にて、一の女御、御とし三十一と有。

―女

母おほいどの。藤原の君の卷にせんだいの御はらからの中將の宮の北方と有。

―女

母同。藤原の君の卷に右のおほい殿の頭の宰相の北のかた。

―女

母同。藤原君の卷に右大臣殿の太郎左近（刊のアリ）中將源のさねよりの北の（刊ナシ）方。

―女

母宮。藤原の君卷に民部卿（刊ナシ）の北方。子二所うみ給ふと有

―女

母同。藤原君卷に左大臣藤原のたゞまさの太郎の北方。

—女

母同。藤原の君卷に右大臣殿の太郎右(イ左)衞門のかみ藤原のたゞとしの北のかた。

—女

母同。左衞門督に奉り給ふ。

—女　(圖、藤壺)

母宮。九の君。あて宮と聞ゆ。又あてこそとも。あてみやの卷に東宮に參給て藤つぼと聞ゆ。後(チナシ)

—女　(圖、さまこそ)

母宮。さまこそと聞ゆ。源氏すゞしの北の(チナシ)方。たづの村鳥(チのアリ)卷に大將のさまこそ、せんじにてすゞしに給ふよし有。

—女

母おほいどの。

—女

母同。

(図、そて君)

―女　母宮。そで宮と聞ゆ。又そでこそとも、(不又そで君とありアリ)。

―女　母同。けす宮と聞ゆ。たづの村鳥にこなたの十三の君とあり。

―某(不女)　母同。みやあこ君と聞ゆ。開鐵の卷に六位とみゆ。(宋同下、くりのかみかけて左エ門尉、同卷に五位又侍從)。

(図、太政)―(図〇)

右大臣　誰ともなし。

(宋)

―(図、某　中將、としかげの上にみゆ。)

―たゞまさ　母不知。としかげ卷に(図、廿許)右兵衛佐におはせしは右大臣におはするとあり。嵯峨院卷におほきおとゞ(不)(千)とアリ)見ゆ。

―たゞこし

（[果]、—某）—嵯峨院（[チ]の巻アリ）に大納言とみゆ。

—宰相中將　誰ともなし。

（[果]、—某）—藏人少將　誰ともなし。

—女　此四人さがの院（[チ]嵯峨院の巻にみゆ。

—かねまさ　母不知。としかげの巻にわかこ君（[果]、十五斗）と聞ゆ。年十五ばかりとあり。同巻の（[チ]ナシ）下に右大將。祭の使巻に左大將。さがの院巻に左大臣とみゆ。北方はさがの院の女三の宮。御子あまた有よし。後京極にとしかげの女に住給ふ。（[果]、[国]ノ下左大臣。）（[イ]藤原のうへ。右大將藤原かねまさと申す。年卅ばかりにて云々アリ）。

—女　母不知。まさよりの北方おほい殿か。嵯峨院巻に中將の朝臣もかねまさがあねのはらからとあり。

（異、トシカゲ也
治部卿 樓上一 三二 卅六ウ
同 三 六上 二一ウ

なかたゞ
母としかげの女。三條京極に(チナシ)としかげのあれたる家に生れ給ひ、五才にて母と丶(チナシ)もに山に入、うつほに住給ひ、十二才にて父君に逢奉る(イり)、京に歸り、十六にて冠し、なか(チたり)たゞといふ。殿上せさせ給ふよしとしかげの卷にみゆ。同じ卷に、十八にて侍從になりぬと有。吹上卷に正四位右近中將(異、初秋の卷に宰相中將)。藏開卷に中納言。國ゆづりの卷に大納言の右大將。同卷の下に左大將。(異、板國ゆづり下左大將從二位て

―某
母嵯峨か(チの)女ともなし。宮の君と聞ゆ。樓の上になかたゞ石つくりの樂師にこもり給ひし夜琴出し給ふよしみゆ。

（異、ナシツボ）
―女
母宮。としかげの卷に東宮に參り給ふべきよしみゆ。初秋になし壺と聞ゆ。男御子生(イうみ)給ふ。

（異、イヌミヤ）
―女
母朱雀院の女一宮。いぬ宮と聞ゆ。(異、板國ゆづり下 乙子ノ日 百ノ日)

―某
母同。

○ 橘の(イチナシ)ちかげ

たゞこその巻に左大将かけたる右大臣と有。初の北方一世の源氏の女うせ給ひて後、たゞつねの北の方たゞつねうせ給ひてひとりおはせしに通ひて住給ふよし。

たゞこそ(イたゞ君ともアリ)

母一世の源氏の女。たゞこその巻に十才にて殿上せさせと有。後出家。くらまに(イの)山ごもりし給ふ。吹上の巻に帝紀伊國ふきあげに行幸の時めし出て、後阿舍(イチ闍)梨ときこゆ。

女

母不知。かねまさのおもひ人。藏開巻に一條のかねまさの家に住給ふ。柑子に文いれてなかたゞにうちつけ給ひし人。

○ 源のたゞつね

たゞこその巻に左大臣と有。

○ たゞつねの北方

誰の女ともなし。たゞつねうせ給ひし後、ちかげ通ひて住給ふよしみゆ。たゞこその繼母。

○ 平まさあきら

平中納言と聞ゆ。

―もとすけ

初秋の卷に平中納言殿の太郎もとすけの君權少將と有。

○源すけなり

藏びらきの下に左大臣と有。

―なかより

（初、としかけ六十八ウ、さがのゐん四十三）。同（于）しアリ、卷にすけなりのおとゞの二郎と有。かすが行幸の時和歌の題書し人。梅の花笠卷に右近（于）のアソン少將。同卷に帝の御使に祥の家になかたゞの母へ文もて參りし人。國讓に中將。後山こもりし給ふ。（圖 國ノ下ニ源少將法師トイヘル考合スヘシ）。

―女

―某

母北の方。

―某

同じ。

―女

同。

○在原たゞやす―

宮内卿と聞ゆ。あて宮の女房右京(［不］［チ］兵衞)が父。嵯峨の院の卷にすりのかみ。(［朱］、國の下同)。

―女

母不知。少將なかよりの北の方。藏開の下にたゞやすの娘を世のなかに名高く聞ゆるありけりと有。

○清原大君―

としかげの卷に、昔式部の(［チ］ナシ)大輔左大弁かけて淸原の大君有けり、御子ばら(［チ］はゝ)にをのこ(［チ］子アリ)一人もたり(［不］けりアリ)と有。

―としかげ―

母宮。としかげの卷に心さとき人と有。七才になる年高麗人にあひてふみをつくりかはし、十二才にてかうぶりし進士になり、式部(［チ］卿のアリ)丞になされぬ。十六才になる年唐(［チ］土アリ)に渡り、三十九才にて日本に歸り、式部(［チ］のアリ)少輔になされ、殿上ゆるされて、東宮の學士になされぬ。後式部太輔

下ノ二七十六丁
(［朱］、樓上ニ故治部卿トミユ)

にて左大弁かけ（チ）又治部卿かけアリ）たる宰相と有。樓（チのアリ）上卷にぞうるの中納言。

女

母一世の源氏（チ女アリ）。かねまさの北の方。な（イチほ）り川の西なる家にすみ給ふよしとしかげの卷にみゆ。初秋の卷に内侍のかみ。國讓に三位。樓の上に正二位。

○一世の源氏――女

誰ともなし。　母不知。としかげの室。

○かみなびのたねまつ

吹上卷に紀伊國室の郡にかみなびのたねまつといふ長者かぎりなきたからの有（イなし）にて、たゞ今のまつりごと人と有。同じ卷にいつゝの位給はりて紀伊守になされぬと有。（室、讀開下簡料奉る事）。

女

母源のつね有の女（イ因女）。さがの院の女藏人。源氏すゞしの御母。吹上の卷に内の藏人つかうまつりけるおはいに源氏一ところ生れ給ひける、母うみ置てかくれぬ、帝しろしめさず、はゝ（イみこ）そうせずなりにけりとみえり。

○源のつねあり――――女

大納言と吹上卷にみゆ。　母不知。たねまつが妻に成給ふ。

○ゆきまさ

（圏、としかげ六十八ウ）。藤原（チのアリ）君の卷に殿上立り（イチ童）はなぞのと（イチ云アリ）。六才（イチ十）にて唐（チ土アリ）へ渡り、六歲（チとせ）過て日本へ歸り、後式部（チのアリ）丞かけたる藏人。しばし有てかうぶりえて右兵衛佐になりぬと有。初秋卷に少將。たづの村鳥に宰相中將。（圏、國ノ下頭中將）

○藤原すゑふさ

とうゑいく（イチと）号す。祭の使（チの卷アリ）にけさ（イチた）うの大弁。なんかけの大臣の一男とあり。文章生。こゑよき人。たづの村鳥に右近（チのアリ）少將。式部（チのアリ）省（〇少日カ、丞カ）。文章博士。春宮の學士。內東宮院の殿を（イチ上）ゆるされたり（チる）とあり。（圏、國ゆづりノ下右大弁）。

○ちかまさ

（圏、としかげ七十七左近のぞう）。らうすけと号す。初秋卷に只今のびはの一はらう（チ二字ナシ）少將こそ侍（チめアリ）れとあり、此人か。菊（チのアリ）宴にかうぶり給はりて大內記東宮の學士になされぬとあ（チと）り。

（圏、あきなりの左のおとゞ樓の上下ノ二六十九）。

（圏、まつかた　としかげ六十九
ときかげ　同上）

〔一〕以下は底本及竹柏園本ナシ、帝國圖書館本ニヨリテ入ル。宇津保物語考ノ原書ニ後人ノ増補セシモノナルベシ〕

一　としかげ　むかし式部大輔左大弁かけて清原の大きみ有けり　九十四枚

二　藤原の君　藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり　六十九枚

三　かすが祭り　かゝるほどに年月すぎてその時のみかどもおりゐたまふ　二十八枚

　　たゞこそ　かくて又嵯峨の御時に源のたゞつねと聞ゆる左大臣おはしけり　三十九枚

四　祭りの使　かくてとのより祭りの使いでたち給ふ　五十五枚

五　吹上上　かくて中宮よりおほき大殿のその日の　百卅七枚

　　吹上　かくて紀伊國むろのこほりにかみなびのたねまつといふ長者　五十六枚

　　吹上下　かくて八月中の十日のほどにみかど花の宴し給ふ　三十一枚

　　きくの宴　かくて霜月の朔日比殘れる菊の宴　八十五枚

六　あてみや　かくてあて宮東宮に參り給ふ事　三十五枚

七　たづのむら鳥　六月ばかりにうちのみかど仁壽殿にわたり給て　四十一枚

八　沖つ白波　かゝるほどに左大將殿のなかのおとゞにきみたち上達部御子たち　百十八枚

九　くらびらき上　藤中納言は衞門督なれど裝束きよらに　百廿五枚

十　くらびらき中　かくて二日ありて大將殿うちのおほせられしふみどもゝたせて　六十七枚

十一　くらびらき下　かくて右大將殿にかへりあるじし給ひ　七十一枚

十二　國づゆり上　かうてけふは左の大殿の大饗　九十六枚

十三　國ゆづり中　右の大殿には御むこの殿ばら宮ばら　九十枚

十四　國ゆづり下　かゝるほどに平中納言藤大納言藤宰相などおはしたり　七十枚

十五　樓上上　かくてつとめての御だいこゝにてまゐらせ給て　百三枚

十六　樓上下　三條右大臣殿のかの一條殿のたいどもにゐ給へり　七十二枚

此卷のついでは狩谷望之がもたる古鈔本にして、おのれも此古本をもてうつして、今の印本、又、一

難波本新校正目錄　文化三年丙寅春三月補刻

としかげ一　今板本十六の卷ノ一　古本一の卷　むかし式部大輔左大弁かけて

としかげ二止　今板本十七の卷ノ二　古本一の卷　さもえせずましければ

藤原の君　今板本七の卷　古本二の卷　むかし藤原の君と聞ゆる

たゞこそ	今板本九の巻 古本三の巻	かくて又さがの御時に
梅の花がさ 一名春日詣	今板本十四の巻 古本四の巻	かゝるほどに年月過て
嵯峨院一 正本國譲下巻	今板本十三の巻ノ一 古本五の巻	かくて中宮よりおほきおとゞの
同　二 同　下巻	同　二	山ごもりはとしごろ
同　三 同	同　三	このよにも上どはありけり
ふきあげ上 正本下巻	今板本十の巻 古本六の巻	かくて八月中の十日のほどに
ふきあげ下 正本上巻	今板本十一の巻 古本七の巻	かくてきの國むろの郡に
まつりの使	今板本十二の巻 古本八の巻	かくて殿よりまつりの使
菊の宴一	今板本六の巻ノ一 古本九の巻	かくて霜月の朔日ごろ
同　二止	今板本六の巻ノ二 古本九の巻	はづかしくなる人もなし
あてみや	今板本十七の巻 古本十の巻	かくてあて宮東宮に參り給ふこと

巻名	板本・古本	書き出し
初秋一 一名とばかりの月、又すまひの節會、又内侍のかみ	今板本十五の巻ノ一 古本十一の巻	かゝるほどに左大將どのゝ
同　二止	同　二 同	草の中に笛のねし侍るを
たづのむら鳥 一名おきつ白なみ	今板本八の巻 古本十二の巻	六月ばかりに内のみかど
くらびらき上の一	今板本一の巻ノ一 古本十三の巻	藤中納言は右衛門督なれど
同　二止	同　二 同	大將のおとゞいづくよりぞや
くらびらき中	今板本二の巻 古本十四の巻	かくて一二日ありて
くらびらき下 正本嵯峨院	今板本三の巻 古本十五の巻	かくて右大將殿にかへりあるじ(ママ)給ふ
樓のうへ上の上	今板本四の巻ノ一 古本十六の巻	かくてつとめての御だい
同　上の二止	同　二 同	あかつきがたなり
同　下の一	今板本五の巻ノ一 古本十七の巻	三條右大臣どのゝ

同　下の二止　同同　二　一めりきかしなどずんじ給ふ

くにゆづり中の一（王本上卷）　今坂本十九の卷ノ一（古本十八卷）　右の大殿には御むこの殿ばら

同（同）　中の二止　同同　二　春の花あきのもみぢ

同（王本中卷）　上の一　今坂本十八の卷ノ一（古本十九の卷）　かくてけふは左の大殿の大饗

同（同）　上の二止　同同　二　かくて御しかしこまりて

同（王本藏開下卷）　下　今坂本廿の卷（古本廿の卷）　かゝるほどに平中納言

縣居翁說

うつほ物語六の卷と十の卷に同じ事重れるを考るに、今ある卷のついでいとみだれたるを、それがまゝに本にあり、又卷の名をもみだりに書しもの也。それが中に、此六と十はことにみだれたり。そのよしをいはん料に、先五より十までのついでをあら／＼あぐるに、

五の卷　二月廿日左大將殿春日詣あり。

八の巻（今の六の所）

是を六におくべし。そのよしは、はじめに紀伊國吹上へ仲忠など行しこと有て、さて源氏君と物語の中に、此春かすがにて九の君の琴ひきしてふことあり。其下に吹上の櫻のさかりの事をいひて、三月十二日の巳の日 中略 三月晦日 中略 四月四日ばかり宮内卿殿にかへり着しといへり。しかれば是は右の春日詣の次なる事あきらけし。

七の巻

賀茂祭次に五月五日競馬あり、次に六月祓、次に七月の詩文、其後秋の事あり。

八の巻（今の九）

八月吹上行幸、其後神泉のもみぢの御賀あり。此時紀の源氏涼に左大將、殿の九君仲忠に内親王をたまふべき宣旨あり。

九の巻（今の六 八歟）

ことにふれては時の前後も有は其事をいひかへすその事と見ゆる所多し

今の六に、はじめにかくて左大將殿にかへりあるじゝ給ふと有て、次に八月になりてとあり。しかれば是はかの七夕の會のかへりあるじの外なし。さらば是は八の巻とすべし。

此次の言葉どもうせて他の卷へ入しならん。かうがへてこゝにおぎなふべきなり。

○次に中納言殿左大將殿へ來て春宮の花の宴の居にて、まさときがことを上野の親王のとがめ給へりし物語せし花の宴といふは、春のことを今いふべくもあらず、九月菊の宴のありしをいへるなるべし。それより下に九月廿日に東宮文人などつどへて詩つくり給ふことありて、次に左大將殿參り給ふに九君の事をのたまへり。是は十の卷にあり。殘菊の宴と九月菊花宴とまぎれてかくなりしもの也。よりて今此六の卷の此言どもは除くべし。かゝれば此花の宴といふは、その九月廿日をいふ也。然ればこの上に有しことゞも落たるなり。

十の巻上下

十一月殘菊の宴きこしめすとき、左大將殿おそく參り給ひて、九の君のことの御物語あり。且かの神泉にて涼に・の君をたまふ宣旨ありしよしを申せり。かゝる時は右の中納

言のかたりし花の宴は九月のこと也。

○十一月神楽、又さがの院の御賀にまゐり給ふ事あるは、次の巻に入べし。

○さがの院へまゐり給ふ事などをはじめとすべし。

右のごとく巻のついでをなして、六の巻にある東宮にての事は必あやまりなれば、今の六をばはぶきて、今の十の巻へあはせて不足をおぎなひ、重複をけづりすつべき也（六を畧て十に合する時は巻不足せれば、十を上下とすべきか、その上につけ下につくることは別に考べし。）しかる時は、春夏秋冬のありし事どものつゞきかなへり。今の六をたつる時は、その次第はみだる也。よりて六をば十に合すべき事うたがひなし。

此縣居翁の考は、翁かねて此物語をよみて、いさゝか考おかれしことのありけん、そのかたはしのみながら、・みづからの證にしてものゝはしにしるしつけおかれしを、我友淸水濱臣反古の中より見出たるまゝ、此物語よむをりのたつきにせんとて、かくかきよめおけるを、おのれはたうつしおけるになん。

文化十二亥年六月廿八日

正路

〔○以上底本、及竹柏園本ナシ、帝國圖書館本ニヨリテ入ル。宇津保物語考ノ原書ニ後人ノ書キ加ヘシモノナルベシ〕

古きうつほ物語の卷の名の（チナシ）次第とて、人のみせ侍りしをこゝにしるす。

第一 こしかげ　第二 藤原の君　第三 たゞこそ　第三 三のならび　第四ノ上 嵯峨の（チナシ）院
四ノ下 祭の使　第五上下 吹あげ　五のならび 菊の宴　第六 あてみや　第七 無名卷（チ無名卷第七）
第八 沖津白波　第九第十第十一 藏びらき　第十二第十三第十四 國ゆづり　第十五第十六 樓の上

又

こしかげ　藤原（チのアリ）君　たゞこそ　春日まう（チふ）で
嵯峨院　祭の使　吹上上下　きくの宴　あて宮　無名卷（チ外題）
沖つ白波付かつらの卷　藏びらき上中下　國ゆづり　樓の上上下

○（チナシ）うつほ物語今の板本三十册次第亂雜、卷の名相違のもの有。猪苗代氏古本を考、卷の名のたがへるをたゞし、十六册となし、其次第左の如し。

うつほ物語 上は古本の次第／下は板本の次第

（朱）うつほの卷イ
としかげ　一　としかげ上　十六

としかけ　一
藤原の君　(朱)田子イ　二
たゞこそ　三
(朱)井　春日まう(〔ヲ〕ふ)で　●　三
桂　(朱)井・(朱)十九丁裏九行目左大野殿桂におもしろき所と云より下別に一卷と(イなアリ)す
さがの(〔ヲ〕嵯峨)院　●●●　四
(朱)井　祭の使　四
ふきあげ　上　五
ふきあげ　上　五
(朱)井　菊の宴　上　五
(朱)井　菊の宴　下　五
あて宮　六
内侍のかみ　上　七
内侍のかみ　下　七
沖つしら波　八

としかけ下　十六
藤原の君　七
たゞこそ　九
梅の花笠　朱　古本此名なし　十四
蔵びらき下　三
祭の使　十三
ふきあげ下　十一
ふきあげ下　十
菊の宴上　六
菊の宴下　六
あて宮　十七
初秋上　朱　古本此名なし　十五
初秋下　十五
たづの村鳥(朱)古本此名なし(朱)末に柱の巻(イチ復アリ)出あり　八

沖つしら波の（チ此）卷の名、すべて卷の中、哥にも詞にも出したる事なし、不審の事也。但し、あて宮心有（チがけ）給ひて（チし）人々、同じ哥（〇家か）にすませ奉らんよ（チと）し給ふをうけ引給はず、あるは、心にもあらでむこどられ給ふ事をかきたるにつけて、ほの心うる事あり。古今集に、立かへり哀とぞおもふよそにても人に心をおきつしら波。これらの心し（チに）や、猶他本を考ふべし。〇（〇チ朱ニテ記シ改行トス）此卷の末（チのアリ）廿五丁表六行、ふぢのかゝれるを松の枝ながら折て云々（チと云）より下、此卷の終まで桂の卷の詞也。復出せると見えたり。

藏びらき上ノ上	九	藏びらき上之一	一
藏びらき（イチ上ノ下アリ）	九	藏びらき上之二	一
藏びらき中	十	藏びらき中	二
藏びらき下	十一	國ゆづり下	廿
國ゆづり上ノ上	十二	國ゆづり中ノ一	十九
國ゆづり上ノ下（チ中）	十二	國ゆづり中ノ二	十九
國ゆづり中ノ上	十三	國ゆづり上ノ一	十八
國ゆづり中ノ下	十三	國ゆづり上ノ二	十八
國ゆづり下ノ上	十四	さがの院上	十三
（チ國ゆづり下の中	十四アリ）	嵯峨院中	十三

國ゆづり下ノ下　十四
樓のうへ(イチかみ)上ノ上　十五
樓のうへ(イチかみ)上ノ下　十五
樓のうへ(イチかみ)下ノ上　十六(チ五)
樓のうへ(イチかみ)下ノ下　十六

古本十六冊
　備前代氏うつほ物語蔵書

嵯峨院下　十三
樓のうへ(イチかみ)下ノ一　五
樓のうへ(イチかみ)下ノ二　五
樓のうへ(イチかみ)上ノ一　四
樓のうへ(イチかみ)上ノ二　四
(チ今板本三十冊アリ)

古本數本を以考訂せ(チナシ)しも(イに、チて)、かつは(チ且)此双紙のとしたてをかゝ(イら)むため、ひそかに從〳〵の段をわかち、段々ごとに私に名を付、樓のかみの卷に至りては段に又條々をくはへて、猶追々善本をもて可考者也。

○こしかけ　上下八段

一段　としかけ　初丁
二段　京極　十七丁オ十一行(チ二月)　父かくれて三年
三段　まねく尾花　廿五丁初行　かくて八月中の十日

四段　夢がたり　卅三丁ウ七行　かくて八・(イチか)の女君夢の事

五段　うつほ　卅九丁ウ七行　かくてなきくらし

六段　苔のすだれ　五十丁オ四行　その日帝北野の御ゆき

七段　三條　六十五丁オ五行　御馬ぞへ・(イチひ)に口がため給ひて

八段　風ふく松　七十一・(イチ丁)ウ九行　としか・へ・(チうつ)りて八月に

○藤原の君　七段

一段　藤原の君　初丁

二段　あて宮　六丁オ六(イチ九)行　かくていづれともなく・(チし)けうらに

三段　かんづけのみ・こ・(チ宮)　十八丁オ初行　かくて又かんづけのみや

四段　致仕のおと・ど　廿・(チ卅)六丁オ二行　かくていやしき人の腹に

五段　ゆきまさ　卅六丁オ七行　またしにけるよしみね

六段　滋野帥　卅九丁オ初行　さいふのそつ（さきイ(チさきのイ)）

七段　たなばた　　四十九丁ウ八行　　かくて七月七日に

〇たゞこそ（田子イ）四段

一段　たゞこそ　　初丁

二段　一條　　三丁ウ八行　　かくてなく〳〵

三段　名だかき帶　　十丁ウ七行　　かくて久しくおとゞ

四段　うつせみ　　•五（イ刊廿）丁ウ•十（刊七）行　　ちゝおとゞいとあやし

幷
〇春日まう•（刊ふ）で三段　幷　かつら一段

一段　春日まう•（刊ふ）で　　初丁

二段　くらゝ山　　十丁オ十一行　　かのたゞこそのおこなひ

三段　山のいろ〳〵　　十七丁メ•（イ刊オ）八行　　かくて三月のな•（イ刊は）とに

かつら　　十九丁ウ九行　　左大將殿かつらにおもしろき所。

此一段古本（刊はアリ）いづれも此春日詣の末に書入て、ことに一卷ともみえぬやうにてあり。されど河

海抄に此段の事をうつほ桂の巻とて引り(チ川す)。源氏(チのアリ)物語の関屋花散里など(チ二字ナシ)のやうに程なき一巻にてありぬべき也。又一本には、おきつ白波のおくに、山の色々の末ふぢのかゝれるをといふより、此巻の末までを、みだりに書入て、外題にはうつほ入おきつ白波かつらの巻かやうに(チあるアリ)もあり。桂の巻といふ名は昔をのこせるいみじく侍れども、八巻に書まじへたるはおもむきたがへり。諸本ともに沖津白波の末(チ事)に足をふたゝび書入たり。いかであやまりな(イチけ)ん。人々の官位など八巻よりけるかまへのさまにて、猶只三巻の丼などにて叶侍べし。

桂の巻のおく、いときよる(イチら)により、あて宮の終、所々より(イとアリ)ある、其次に付べし。

○さがの院八段　(閑、かくて右大将殿にかへりあるじし給)

一段　りうのつの　初丁
二段　山彦　四丁ウ八行　かくのみこの九の君
三段　れんく　十八丁ウ十一行　かくて東宮九月廿日
四段　御かぐら　廿五丁ウ二行　かくて十一月になりて
五段　御賀のまふ(イう)け　卅四丁オ八(イチ九)行　かくて此きみたちの母宮
六段　みどきやう　卅七丁ウ十一行　かゝるほどに月たちて

七段 なかより　四十三(イ)(チ)二)丁四行　かくて左近(チ)のアリ)少將源のなかより

八段 御賀　五十二丁二行　大將殿には廿七日いできたる

幷

○祭の使 七段

一段 祭の使　初丁　五月五日つとめて

二段 五日の節　四丁ウ九行　かゝるほどに(チは)六月の比ほひ

三段 つりどの　十五丁オ六行　かぐら十七日より(イ)(チ)に)なんすべき

四段 夏のかぐら　廿丁オ三行　ちかのおとゞの御もとより

五段 たる澱　廿五丁ウ十一行　かくて勸學院の西

六段 とよゑい　卅一丁オ四行　源宰相なかのおとゞのすのこにて

七段 いかだし　四十三丁六行

○吹上 上十一段

一段 すゞし　初丁

段	名	丁・行	書出し
二段	やどもり(イる)風	四丁ゥ 六行	かゝるほどにうこんのぞう
三段	三日のせく	十丁ウ 三行	かくて皆出立給ふ
四段	林のゐん	十八(チ五)丁(チウアリ) 六行	かゝる程に濱のほとり
五段	なぎさの院	廿二丁ウ 八行	かくて三月十二日に
六段	ふぢゐの宮	廿四丁オ 五行	三月中の十日ばかりに
七段	京づと	廿八丁オ 八行	三月つごもりに成ぬれば
八段	玉つしま	卅四丁オ 六行	かくて吹上の宮には
九段	春のわかれ	卅六丁オ 初行	三月つごもりの日
十段	なつごろも	卅七丁ウ 二行	かくて四月一日に
十一段	こがねのふね	四十一丁オ 七行	かくて四月四日斗

○吹上下四段

段	名	丁・行	書出し
一段	花の宴	初丁	

二段　ふきあげ　●三(イ囝二丁)ウ九行　九月一日に出おはします

三段　神泉　十二丁ウ九行　かくてみかどきの國より

四段　河闍梨　廿一丁オ九行　かのおこなひ人を

○菊の宴　上下九段

一段　きくの宴　初丁

二段　かぐら　八丁オ五行　かくて霜月のかぐら

三段　まひのし　十二丁オ五行　かくて大將殿

四段　おとれ　十九丁オ八行　かくてきさいの宮

五段　御水　卅丁ウ初行　かくて殿にかへり給ひに●(イて)

六段　そか●(イ囝で)きみ　卅五丁ウ二行　かくて源宰相

七段　なには　●四十一(イ囝シ)丁オ五行　かくてやよひ

八段　宰相　四十七丁オ初行　宰相かもにまう●(イふ)で給ひて

九段　志賀の山もと　五十九丁四行　源宰相納すべきかたおぼえねば

○あてみや　四段

一段　御まいり　初丁

二段　庚申　十一丁ウ九行　かくて二月中の十日

三段　侍從の君　十六丁ウ六行　源少將は山にこもり

四段　御うぶ屋　廿五丁オ五行　かくてあて宮の御うぶや

春日詣（[チ]まふで）祥の卷の奥廿六丁の裏いときよらにと云より卷の終まで、あて宮の卷の終所々より・有（[チ]ある）、其次に付へし

○內侍のかみ　上下七段

一段　みさご　初丁

二段　仁壽殿　十四丁オ九行　かくて七月ついたち

三段　すまひの節　廿九丁オ十一行　かくてすまひのせち

四段 松むし	卅九丁ウ 三行	すかしその日いとめでたく
五段 御碁	五十五(●五六)丁オ 二行	かゝるほどにうへ何事をして
六段 内侍のかみ	六十九丁オ 二行	うへ渡おはしまして
七段 御おくりもの	九十二丁ウ 五行	左のおとゞ蔵人所より
○おきつしら波 二段		
一段 十五夜	初丁	
二段 初むことり	十四丁ウ 四行	かくて今はわたくしの事をし給ふ
○蔵びらき 上八段		
一段 蔵びらき	初丁	
二段 蔵開らく	八丁オ 十一行	かくてかへる月(●五とし)のむ月
三段 姫まつ	廿二丁オ 五行	七日になりて
四段 つるの子	四十五丁ウ 四行	かくてその日は

うつぼ物語　附錄

段	名	丁	行	書出
五段	內侍のすけ	五十六丁ウ	初行	內侍のすけは
六段	願文	六十六丁オ	十一行	源中納言
七段	松のもちひ	六十九丁ウ	●六(手五)行	かくていぬみや
八段	なとり川	七十九丁オ	●七(手十)行	かくておとゞ

○藏びらき中下十五段

段	名	丁	行	書出
一段	御文	初丁		
二段	なしつぼ	廿二丁オ	八行	大將の君なしつぼに
三段	みゆき●(手ナシ)する	廿四丁オ	初行	かくて大將の君
四段	なみだの雨	卅二丁オ	十行	三條殿き●(イ手に)まうで給へれば
五段	故郷	卅八丁ウ	初行	かくておほとのごもりて
六段	しはすの月夜●(イ影)	四十二丁オ	六行	かくて三條殿に歸給ひし●(イ手て)
七段	かはらけ	五十丁ウ	三行	かくて源中納言

段	所在	書出し
八段		
すはま	下十四丁ウ初行	かくて大将殿はひのおまし所
(イチ九段アリ) はまのとまや	十七丁オ十行	又の日一条殿にまかりて
(イチ十段アリ) ずはゝ	廿四丁オ十一行	右のおほとのゝ
(イチ十一段アリ) せちれう	廿九丁ウ四行	宮かくてつごもりに成ぬれば
(イチ十二段アリ) まどゐ	卅六丁ウ二行	かくてついたちの日
(イチ十三段アリ) 子日	四十丁オ●(チウ)四行	廿五日に出つるを
(チ十四段アリ) たかめ君	四十六●(チ四)丁ウ●四(チ初)行	かゝる程に月たちて
(イチ十五段アリ) 中そい	五十四丁ウ十一行	かゝる程になし壺まで
國ゆづり　上十二段		
一段 右大將	初丁	
二段 おほきおとゞ	四丁オ五行	かくておほきおとゞは
三段 ●ちる(チ散)花	十二丁●十(チウ)三行	かくて右の大臣殿

四段　ねざめ	廿丁オ初行	かくて三日すごして
五段　からもり	廿五丁ウ二行	かゝる程に一宮より
六段　藤澤	卅二丁オ十一行	ふぢ壺源宰相
七段　呉竹	卅九丁ウ七行	かくて藤つぼの御文
八段　とのゐ	四十一丁ウ五行	かくておほとのゝまち（チはアリ）
九段　手本	四十五丁ウ八行	かくてふぢ壺のおはするまち
十段　ことのね	五十三丁オ二行	かゝる程に二月廿一●（チ八）日
十一段　のちおひ	●五（チ六）十五丁ウ十一行	かくてよなかばかりに
十二段　新中納言	七十一●（チナシ）丁ウ四行	かくて藤壺此月に

○國ゆづり中十二段

一段　大饗	初丁	
二段　ふぢのさかり	三丁ウ十行	かくて中納言

三段 蓬萊の山　八丁ウ九行　かくてふぢつぼ
四段 道のしるべ　廿一丁オ三行　かくして中納言
五段 すみよし　廿六丁ウ四行•(チオ)　かくて藤つぼには
六段 陀羅尼　卅一丁ウ十行•(チオ)　かくて一宮五月よりはらみ給ひぬ
七段 まり　四十一丁オ初行　かくて御返かしこまりて
八段 ましの山　四十六丁ウ六行　かくて新中納言
九段 御はらへ　五十八丁オ九行　かくて二宮姫宮は
十段 秋のひ　七十二丁オ三行　かくて十日ばかりありて•(チナシ)
十一段 これはた　七十八丁オ六行　かくて東宮は

(チ而書、一段不足)

○國ゆづり 下十三段

一段 后の宮　初丁

段	名	丁・行	書き出し
二段	くにゆづり	十二丁オ初行	かくて御國ゆづり
三段	すのこ	十四丁オ二行	かくてきさいの宮
四段	御即位	廿四丁ウ初行	かゝる程に御即位廿三日あるべし
五段	水尾	卅一丁ウ初行	かくいふ程に十月になりぬ
六段	東宮始	四十七丁ウ三行	かくて三條の院
七段	姫君	六十三丁オ（チ四行アリ）	かくて出給ふに●（チより）
八段	春宮まゐり	六十五丁オ七行	かくて東宮まゐり
九段	玉かづら	七十丁オ七行	かくて先のぼらせ給ひて
十段	すりのかみ	七十三丁オ十行	かくて世中さだまりけり
十一段	千里の馬	七十五丁ウ十行	かうぞかなのおとゞの御方に
十二段	おきな	八十三丁ウ初行	かくて大將殿は
十三段	花のえん	九十三丁ウ四行	かくて年いとおそきとしにて

○樓のかみ　上下四段

樓の上(异かみ)の卷上下二卷或(异九)四段也。又段ごとに條をわかつべし。これあまたの卷とことなり。

一段　十一條　初丁
石作

一條
わたり川

二條
すきやう殿

三條
いしつくり

四條
とこなつ

五條
[illegible]

六條
きらすゝき

七條
わか君

八條
こゆみ

九條
山すげ

一丁ウ五行
かゝる程に朱雀院

二丁オ八行
かくて石つくり

七丁オ四行
大將はやがて

十丁オ八行
かくてひんがしのかたは(异い)

十三丁オ八行
ゆふづけて

十四丁ウ五行
又の日殿に參り給ふ

十九丁オ九行
小弓いたまふ(异日)

廿一丁五(异ウ)十行
かくて後[illegible]

十條
みづら
十一條
つげのくし
樓のかみ上　八條
一條
琵琶(チ琴)のなげき
二條
ふるさと
三條
たくみ
四條
こ院
五條
蝶
六條
まぼろし
七條
みのむし
八條
みかどもり
樓のかみ下　七條
三段

廿五丁オ八行
かくてうち東宮
廿七丁オ二行
大貳のぼり來て
廿八丁オ六行
大將は院うち東宮
卅一丁オ四行
かんのおとゞに(チナシ)
卅五丁ウ五行
大將は御とも
四十一丁オ十行
大將(チとの)院にまゐり
四十六丁ウ初行
いぬみやの御かた
五十七丁ウ十行
大將わたり給ふ
六十七丁オ(チウ)六行
三日院より白かねの
九十九丁ウ初行
四日のよあけなる斗に

五條　六十六丁オ二行
藏人少將　このきんのね
六條　六十八丁オ初行
はしふ　院のお(手御)まへより初め奉りて
七條　七十二丁ウ二行
しらぎまひ　いぬ宮にりうかく
八條　七十五丁オ六行
京極　朱雀院こよひの内侍のかみ
九條　七十八丁ウ七行
さくら花　院のうへ二所

(〇以上ニテ桑原やよ子ノ宇津保物語考ハ終ル、以下ハ何レモ後人ノ書加ヘシモノナリ、又、次ノ一行ハ、底本、及帝國圖書館本ノ奧書ナリ、竹柏園本ニハナシ)

右はある人のかきおけるをうつせり。

(〇次ニ、竹柏園本ノ奧書ヲ記ス、村田春海ノ記セルモノナリ、朱書ス。)

此一卷は桑原隆朝の母やよ子といへなる(〇るがカ)かきあつめおけるよし之。この比人してとくうつさせつれば、書たがへるもありなん、こゝろそへて見む人あらたむべし。

寛政三年神無月十まり九日　　　　はるみ

（墨書、村田はるみ）

俊蔭上中下　上ノ終、見めぐらしてつらに立給へり。

中ノ始、大將には。中ノ終、うちおきてにげぬ。

下ノ始、大將かへり給へば。

藤原君　　たゞこそ　　春日詣　　さがの院　　祭の使

吹上上下　　菊宴　　あて君　　［　　］　　おきつ白波」

（○以下ハ、底本、及帝國圖書館本ニアリ、宇津保物語考ノ原書ニ後人ノ增補セシモノナリ」

○本居宣長が説

玉かつま卷二十六、うつぼの物語、今の世の板本は卷の名たがへるあり、其次第もみだれて續つゞけがたし。こゝに田中道麻呂がふるき善本によりて正したりし次第は○第一俊蔭○第二并藤原君○第三并たゞこそ○第四春日詣一名春日まうで○第五さがの院○第六吹上上○第七同下○第八祭の使○第九菊の宴○第十あて宮○第十一初秋一名とばかりの名月○第十二たづの村鳥一名すまひの節會○第十三藏開上○第十四同中○第十五同下○第十六

樓の上上(カミ)〇第十七同下〇第十八國ゆづり上〇第十九同中〇第二十同下　かくの如くにて、合て廿卷也。然るに、今の本は嵯峨ノ院ノ卷を藏開ノ下とし、吹上ノ卷の上下のついでを誤り、藏開ノ下を國ゆづりの下とし、樓上の卷の上下の次を誤り、國ゆづり上と中と次第を誤り、同下をさがのゐんとす。これら皆誤也。然れば今の本の藏開下はさがのゐん也、吹上の上は下、下は上也、國ゆづり下は藏開下也、樓のうへ(イ上)上は下、下は上也、國ゆづり上は中、中は上也、さがのゐんは國ゆづり下也と心得べし。又今の本は私に一卷なるをも上下にわけ、あるは上下なるをも又分などして、合せて三十卷とせり。さて又ふるき一本には、たづのむら鳥を第十一とし、初秋を第十二とし、國ゆづり三卷を第十六第十七第十八とし、樓ノ上の上下を第十九第廿とせり。これらのついではいづれよからん、おのれいとまなくて、すべていまだえよくもかうがへず、みん人猶かんがへてさだめよ。かの道麻呂は此ものがたりに心をいれて、かの本どもをよみ合て、すべてよくかんがへおきつる也。

(イ〇アリ)又異本次第、としかげ　藤原君　たゞこそ　梅花笠　さがの院　吹上上下　祭の使　菊　宴上
下　あて宮　鶴の村鳥　初秋上下　藏開上　中ノ上　中ノ下　下　四册　國ゆづり上ノ上　上ノ下　中ノ上　中ノ下　下ノ一
下ノ二　下ノ三　七册　樓のかみ上ノ上　上ノ下　下ノ上　下ノ下　四册
件、次第は尾張大納言殿の御女陽姫君藏本の次第也。此姫君は今の大納言殿の同腹の御妹にて、安永九年

かくれさせ給りとぞ。

又、吹上―「祭の使」「菊の宴」―あて宮―初秋十一―鶴の村鳥十二―藏開―樓上―國譲　これは淺井輞村号圖南の考の次第なり。

右二通の次第のたがひ可考。

〔○以下底本ニ存スルモ、帝國圖書館本、竹柏園本ニハナシ〕

明阿彌の校本（團、弘賢これを書くはふ）。

としかげ上下　藤原の君　たゞこそイ忠臣きミ

梅の花笠一名春日まうでへ〔○以下頭書〕ニ明阿曰、此巻の次に吹上の巻有べきか〔○以上〕。

さがのゐん（團、印本藏びらき、一本同ジ）

祭の使 イ三篇に、ここの使 明阿曰、此巻は吹上の巻の次にて有べきか　ふきあげ上下

菊のえん上下　あてみや　初秋上下一名相撲の節會

たづの村鳥イおきつ白波　藏びらき上中下　上一二

うつぼ物語考

國ゆづり上の上中下 中の上下 下の上下　らうのかみ上の上下 下の上下

明阿曰、第五春日まうで、第六吹上上、第七祭の使、第八吹上下、第九今本六さがのゐんと有べき歟。

又曰、きくのえん下をさがのゐんとなづくべき歟。

〔〇以下底本別ニ付セリ、底本ニノミ存シテ他ノ寫本ニハナシ。松屋與淸ノ書キ加ヘシモノナリ〕。

空穗物語考

賀茂眞淵

うつほ物語六の卷と十の卷に同じ事重れるを考るに、今有ル卷のついでいとみだれたるを、それがまゝに本にゑり、又題の名をもみだりに書しものなり。それが中に、此六と十がことに亂れたり。そのよしをいはん料に、先五より十までのついでをあら〳〵擧るに、

〇五の卷　二月廿日左大將殿春日詣あり。

〇八の卷今の六の所　是を六に置べし。そのよしは、始に紀伊國吹上へ中ノ君などゝ行し事有、さて源氏君と物語の中に、此はゝ春日にて九の君の琴ひきしてふ事有、其下に吹上の櫻の盛リの事いひて、三月十二日の巳の日云云、三月晦日云云、四月四日ばかり宮內卿殿にかへり着しといへり。然れば是は右の春日詣の次なる事

明らけし。

〇七ノ巻（今の九也） 賀茂祭、次五月五日競馬あり、次六月祓、次七月の詩文、其次秋の事有り。

〇八ノ巻 八月吹上行幸、其後神泉のもみぢの御賀有り、此時紀の源氏すゞしに左大将、殿の九君中ノ君に内親王を給ふべき宣旨あり。

〇九ノ巻（今の六） 今の六に、初めにかくて左大将殿にかへりあるじゝ給ふと有て、次に八月に成てと有り。然れば是はかの七夕の會のかへりあるじの外なしさらば是は八の巻とすべし。

次に、中納言殿左大将殿へ来て春宮の花の宴の席にて、まさときが言をかんづけのみこのとがめ給へりし物語せし花の宴といふは、春の事を今いふべくもあらず、九月菊花の宴の有しよしなるべし。それより下に九月廿日に春宮文人などつどへて詩作り給ふ事有て、次に左大将殿参り給ふ後九ノ君の事をの給へり、是は十ノ巻に有。残菊の宴と九月菊花宴とまぎれてかく成しもの也。依て此ノ六巻の此言どもは除くべし。かゝれば此花の宴といふは、其九月廿日をいふ也。然ればこの上に有し事どもも落たる也。（頭、原本こゝより直に下の十一月残菊の宴といへる所につゞけり。而ノ其間に文字を消したる所あり。故に今わけて書き、其間に両書と下に書加へたるを出せり）。

（頭、原本此所両書に有）事にふれては時の前後も有は、其ノ事をいひ返すとの事と見ゆノ所多し。

（頭、原本此條下ニに書加へて有）此次の言ども失て、他の巻へ入しならん。考てこゝへ加ふべき事也。

十一月殘菊の宴聞しめす時、左大將殿おそく參り給ひて、九の君の事御物がたり有り。且又かの神泉にてすゞしに九ノ君を給ふ宣旨有りしよしを申せり。かゝる時は、右の中納言殿のかたりし花の宴は九月〇十一月神樂、又さがの院の御賀のあらまし云云など有ル末に正月御賀にまゐり給ふ事有ルは、次の卷に入べし。

〇十卷上下さがの院へまゐり給ふ事などをはじめとすべし。

右の如く卷の次をなして、六の卷に有ル春宮にての事は必誤りなれば、今の六をば略て、今の十の卷へ合せて不足を補、重り復れるを捨べき也。

(圏、原本此條頭書)六を略て十に合する時は祭□□(虫食)くせれば十の上下とすべきか。其ノ上につけ下につくる事は別に考へ有べし。

しかする時は、春夏秋冬の有りし事どものつゞきかなへり。今の六を立る時は、其ノ次第甚みだるゝ也。依て六をば十に合すべき事疑なし。

(圏、文化十一年六月四日、屋代弘賢のもたりし賀茂翁の草稿をさながら寫せし本をかり得て書をへぬ。原本一ひらの紙に書て、こゝかしこ添もし削もせし所〳〵あるを、とかう考てかくはものせし也けり。

まつの屋のあるじ
たかだの與淸(〇花押)

屋代弘賢

うつほ物語に、源氏物語繪合の巻に、うつほの俊景といふことありて、古き物語也といふ。伊勢貞丈の説に、俊景の巻のみ古くて、外の巻々は後人の作りそへたる物語といへりし。此考のごとくなるべきかとおもはるゝ文あり。左に記。

忠侍藏に、うつほ物語第十藏びらきの巻の中の文に、御つゝみにつゝみてもてまゐれり。おとゞひらいて見給へば、ていしんこうのいしのおびいとかしこき也。おどろき給て、これはまたなきもの也、これを給りたまふばかりに、つかまつりかんぜしめ給へるこそいとおそろしけれ。これは小野ノ宮の大臣のみおび也。これによりてなんおほくの事ありし。それによりてなむしんごん院の律師山ごもりしにかば、そのにこもり給ひて、今ははた領ずべき人も侍らずとて院に奉り給ひしを、うちの位にゐ給ひし時、わたし奉り給てし也。かしこき御たからになんせさせたまへる。あまたさぶらひつらめども、これがやうにはえあらじとの給ふ。

貞信公は村上天皇の天暦三年己酉八月十三日薨。紫式部が源氏物語を書せしは一條帝の御宇也。天暦三年より一條帝即位の初永延元年迄年數三十九年になる、年歴久しきにあらず。又小野宮左大臣實頼公は、円融院の天禄元年庚午五月十八日薨、永延元年まで纔に十八年なり。此年歴を以て考れば、うつほ物語俊景の

外の卷々は源氏物語よりもはるかに後につくりたるものなるべし。以上忠寄說

貞丈按に、淸少納言枕草子にも、物語はすみよしうつほの類とあり。紫式部淸少納言の比、うつほは旣に古くて世に名高き物語也ければこそ、かくかれにも是にもその名を出したるなるべけれ。そのふるきは、としかげの卷をいふなるべし。忠寄の考に付て案ずるに、小野ノ宮殿の薨じ給ひしは、一條院の御位の初永延元年迄わづかに十八年になりぬ。然ルに小野宮殿ノ事、物がたりのおもてにては、はるか昔の事のやうに聞ゆれば、とにかげの外の卷々は、源氏枕草子よりも、はるかに後の世の人の、つくりそへし物とはしられたり。忠寄の考にしたがふべし。

弘賢按ズに、河海抄繪合云々、まづ物がたりのはじめのおやなる竹とりのおきなに、うつほのとしかげをあはせてあらそふ。

左竹取翁　古物語也　作者未ㇾ勘也ト

右うつほの物語　源順作云々　有ㇼ疑廿二帖

としかげは、はげしきなみ風におぼれ、しらぬくにゝはなたれしかど。

うつほの物語に、としかげかしこき物にて、もろこしへわたさるゝに、惡風にあひて、波斯國へ行ぬ。栴(センノ)檀(ダン)木のしたに琴を引てあそぶ所にいたりて、琴をならひきはめてけり。時ならぬ霜雪をふらせ、天地をうごかす。日本にかへりて名をあげたる事也。

弘賢按ニ、花鳥餘情には竹取をば記されてうつほの事は見えず（これは河海の闕を補はれたればさもありぬべし。）八雲抄の書目及ビ仁和寺の書目に所見なし。

風雅集（文永八年）序云、さてもうつほのなつみ（すこそカ）神といへる歌は拾遺集に入。

〔思、歴代弘賢の案語考は、思よりたるをり／＼に書つけられしにて、全く撰成たるにはあらざなるを、今こゝに寫せしは、はた考の一助にもそなへんとの心也。

松屋主人〔〇花押〕〕

〔〇以上ハ帝國圖書館本ノミニアリ。或ハ、帝國圖書館本ノ末ニ書加ヘラレアリテ、他ノ諸本ニハナキ文章ナリ。コハ、山岡明阿ノ考ナルカ、帝國圖書館本ヲ傳ヘシ植村正路ノ考ナルカ、又ハ、頭書ニ追考ヲ記セシ清水濱臣ノ考ナルカ、明ナラズ。〕

山岡本今按末三（古本十五）　くらびらきの下（さがのゐん）　かくて右大将殿にかへりあるじし給ふ。

〔〇以下頭書〕蔵開云、此巻と菊宴とは同じ事多くあり、錯亂とはいふべからず、たてよこのたぐひか、追てくはしくよくいふべし。〔〇以上〕

此巻のはじめにかへりあるじの事有て、次に八月になりてとあれば、かの七夕の文會の事のかへりあるじの

外、若又神泉の御賀のかへりあるじの事か。されどさはあるべうもあらねば、七夕ののちのあるじとせんに、さらば是は八の卷のはじめに有しことのこゝに入しにやあらん。次に中納言殿左大將殿へおはして春宮に花宴有し時、左大將殿の事をいひさわがれし事を語れるは、九月廿日に春宮に文人などつどへ給ひて詩つくり給ひし時の事か、又その前に有しか。思ふに、こゝは錯簡なれば、かの九月廿日の詩の席の事たるべくおぼゆ。

此本今本の六なるを、上の次第をかふるによりては、第九卷となすべきか。此たび八とするを九とし、九とするを八とせんにさだかならず。されど只かへりあるじの事のみにて、他は十の卷に合すべければ、此所には文の落たる事しるし。

九月廿日の宴の時、左大將殿の春宮へ參られし事ども有は下の十一月のことなるを、同じ菊の宴に依てまぎれて前に入しものならんか。

此六の卷と十の卷とは同じ事のかさなりぬるを考る次に、そのつぎ〳〵の卷どもを見るに、すべて亂れちりてあるを、よくも正さで木に彫、又同名の卷も有て、いづれをそれとわかずなりにしもあかと（〇りとカ、かずカ）、今あらたに考へ定めてその次第をあらためぬ。

第五二月廿日春日詣の事有、第六今本七吹上卷上、第七祭使、第八今本九吹上卷下、第九今本六嵯峨院、第十十一月朔日殘菊宴有。かくの如くに改べし。さなくては月次の事たがふ也。その中に今本の六卷ことにそのついで合ず、

必十の巻なるべし。しかれば第六をば第十の巻にあはせて、十巻上菊宴の文たらざる所を補ひ、又重れる所を刪去べき之。さてその第十巻には當月の残菊の宴より初て、神楽の事、又明年の嵯峨院の御賀のまうけまでの事を載て菊宴の巻とし、十一の巻には嵯峨院の御賀の事をしるしたれば、やがて一名嵯峨院といへり。今本十一巻に菊宴下とあるは誤なれば刪去べきにやとおぼゆる之。但今第六巻に嵯峨院一名とあるは誤の文たらひ(○むカ)にて、此巻は第十と同じ物なればあらためて第十巻を菊の宴と名づけ、第十一巻を嵯峨院と名づくべきにもあらん。猶その重複の所ある之はあらためたゞすべきなり。

〔○以上帝國圖書館本ノミノ末ニアリ。〕

宇都保物語年立

世に書かきあらはさむことは、たゞ一卷といへど千万人の目に見ゆる物と思へば、たやすきわざならぬを、ちかきころはそこよりもかしこよりも、めづらしき書どもきそひ出來つゝ、物學びの道のさかりになれる、いとめでたき御代になんありける。そも／＼宇都保の物語は、卷のついでのみだれ、文詞のうつしひがめ多くて、すり卷の外に寫卷もあれど、ことに正しくよき卷もをさ／＼いでこで、みな人まどはしき物にして、よみ見る人も物うくして、あたらおもしろき物の、世にうづもれたるさまにてあるなんくちをしかるを、ちかきころ江戸人細井貞雄といふ人、玉琴といふ物をあらはして、ねんごろにみちびき示されたるは、いとしもよろこぶべきわざになんありける。それが中には、よろしくいはれたりと思ふふし／＼も見え、又なほいかにぞやおぼゆるもまじらぬにしもあらねど、そはとまれかくまれ、さばかりくはしく考へてあらはされたるいさをのほど、世にいちじるくなん。こゝに又松坂の殿村常久、年ごろ此物語に心いれて、考へさだめたること多く、まづかの卷のついでのさま／＼にみだれたることをわきまへ、人々の年たてのあひあはざるをもあきらめ、いかに思ひはかりても、こゝとかしこととたがへることのあるをもふかくたどりて、思ひよりたるくさ／＼の事どもの中に、此物語よまん人のたよりとなるべきことゞもをつみ出て、此一卷あらはしたるは、まめやかにいそしと思ふことになんありける。これは鈴屋の學びの窓ちかく、をさなきほどよりをしへたてられて、歌も文もよくたどり、なみ／＼ならぬみやびをとはいひながら、世のいとなみにかゝづらひて、學びわざにのみもえ物せで、とし毎に江戸にゆきかひつゝ、家の業おこたらぬいとまいとまのしわざにして、

いとよくもいできたりとめで思ふことになん。文ことばはたおだしく、たゞみづからの思ふすぢのみあげつらひて、人の說をいさゝかももどきがほなることばもなく、中々こゝろたかくおしはからるゝを、よく見る人は見しりぬべかめれど、心あさからむは、そのけぢめをもえ見しらざらむもこそと、おのれ翁さび物めでがちなる心に、えしもあらで、かゝることをさへいひつゞくるになんありける。

文政三年十二月三日　　本居大平

中昔のほどにやおひ出けむ、いともかげ高きうつほ木有けり。たがおふしたてけんともしられず、言の葉いとにほひやかにしげらひけるを、いかなりしにか世々にめではやす人おほからで、つひには大枝小枝をわかしげ、もと葉すゑ葉くちみだれて、たゞ名だゝるおほ木のなごりとのみ、見過し聞過し來にたるを、こちよりてのみやび人たち、これかれめではやさんとして、とやかくやとやしなひこゝろみし有けれど、いく百とせともしらずうもれ苔むしたる老木にし有ければ、なほ心ゆかぬとのみなむおほかりける。こゝに伊勢人殿村常久ぬし、はやくより此大木のかげに心をよせて、いかでその五百枝千枝しみさかえて、言の葉にはひやかなりし昔にかへさばやと、思ひかまへられつゝつくろひたてられたるが、先此一卷に大木のもとすゑをしるして、なほつぎ／＼に其枝々をわかち、その言の葉どもをつみあつめて、此うつほ木あふぎ見る人のたどきとなさしめむとせられにたり。あなめでたのいさをや。このいさをゝめでておのれうたへらく、

言の葉のよゝにうもれしうつほ木を
はなみるべくもなせる君かな

清水濱臣

宇都保物語年立

うつほ物語、今の板本は巻の名たがへるあり、その次第もいと／＼亂れたるを、田中道麻呂の考へ正したるにて次第よろしくはなりたれども、なほ一つ二つまぎらはしきこともありて、これをくはしくわきまへむには年立にしくものなし。さるをこの物語よ、大かたに人の齢などはあひたるさまながら、作者のこと／＼に正しく前後あはせむと心してものせしにもあらずと見えて、これかれ齟齬たることなども少からぬうへに、今の板本は闕字などおほく、校合すべき寫本はた少ければ、人の齢などまぎらはしきことのみおほくて、この年立を正しくものせむにはいとかたきわざなるを、細井貞雄の近きころ著述せる玉琴といへる書に、こし年立見えたり。されどこのぬしも、人の齢などのこれかれあはざることあるに、あかずおぼえたりと見えて、實にこれよしとにはあらねど、いかゞはせむにものせしよしに見えたれば、げにいとおぼつかなく心よからぬこととおぼし。おのれこのごろこの物語をよみて、また師の源氏物語の改正されたる年立にならひて、なかたゞの大將の齢をもて、このうつほの年立をつゞり見たり。さるははじめにいへるごとく、ことはいとかたきわざにて、こゝをあはすればかしこあはぬことなどありて、いと／＼まぎらはしきを、玉琴なるをあかずとしたるなり、このおろかなる心のひくかたにかきなせるは、ましてしらべとゝのはぬことなどおほかるべし。見む人なほよく考へ正してよ。

文政二卯年十二月　　殿村常久

年立圖

嵯峨院
御在位

俊蔭朝臣生る

同朝臣十六歳にてもろこしへ渡らむとして
あだし風にあひて波斯國にいたり三人のひとに
琴をならふ

同朝臣卅九歳にて内親
時の左大臣むすめつゐ右大臣ちかげ

同朝臣
女子をうむ

あるさよりの朝臣
女一宮にむことり給ふ
三日の夜あきつ枝の
左大臣ちかげの六
大臣のうへあり

ちかげの右大臣
一世の源氏のかきち
きよら朝君とをも
給へる御息所に
えをうむ

吹上の上
二月廿九日
祭
四月
三月

吹上の下

使

七月

八月

九月紀國行幸

神泉もみぢの賀

あてこその侍従任中将

すゞしの君任中将

冬

叢　宴　　あ

十一月 豁叢宴

左大将教御楽

十二月

正月 嵯峨院大后宮御賀

秋

十月あて家表家へおわさくわゐ

六月

八月有をての中将を一家にむことりぬるかな

あてその中将従中納言　廿六歳のよしみ

すゑしの中将権中納言　廿六歳のよしみ

霜月花ゆうきのす

正月より一家はしみくあるかな

十月一家の関家をうみゆかな

十月いぬ宮うふやのよ

おほとのりの大将六十に算一つたらぬおなし大将七十二算のそへ給ふ

十二月春宮のすけの中納言任右大将

十二月ふるきさきの大将

三条殿に一条殿より三の宮たちへわたりたまふ

正月ゆみのまとこのゝよ

下　圖　議　上　圖

左大将右大将とは
一番殿へ出きて見るものなり
弟しつぼねまりてなかのへつぎのひ
ならつぼねまりて殿なりし西
なしつぼなかのて　ものなかす

旧月
あさよりの大臣　但左大臣
うしまさの大将　但右大臣
あくのくでの大将　但大納言

旧月

樓

一番殿の西の二ばん目は
おきなひし人の家を
左大将のうえかする

今上御在位

藤　中　國

五月より一家はしらのおほ

六月

秋

八月

朱雀院御讓位

今上御即位

上

樓上

八月京極殿の樓上にて
萩寺琴ひくを見るなるべし

十二月

三月　雨のよの大将
京極殿つくらるべき
よし相談せらるゝなり

八月　京極殿なるよし

正月

八月いゐ家に嵯峨殿よりこの宮にまゐらむとして御拝ありて
陽明院萬花院にて筝ひき内侍督琴ひき
たまふ

俊蔭卷

としかげの朝臣生れしよりはじめて、十六歳にて波斯國にいたり、年をへて歸り來てのち、女子をうみしこと、なほかくれゐることなどありて、それよりなかたゞの侍從生れて廿歳の八月までのこと見えたり。但、十八にて侍從になりぬ云云とありて、其つぎに、としかへりて八月にこの殿にすまひのかへりあるじあるべければ云云とあるを見れば、十九歳の八月までとすべけれど、しかするときはすべて年立たがひてあはず。そのよしは、さがの院卷のはじめに、このすまひのかへりあるじのことありて、このとしかげの卷につゞきたるを、さがの院卷の末はそのあくる年にて、吹上卷の同年なれば、吹上卷に、なかたゞの侍從の何齡にかすゞしの朝臣廿一とあるに年立あはざるぞ。今按に、このとしかげの卷に、としかへりて八月とあるは、なにとかや脫文ありげにきこえたれば、この間に十九歳の事脫て、八月とあるは廿歳のことにもやあらむ。又按に、十八にて侍從になりぬ云云とある十八は十九の誤字として、すなはち八月とあるを廿歳のことゝもせむか。されど、これらは今わたくしに改めがたければ、こゝろよからずはあれども、十八とあるより一年をへだてゝ廿歳の八月とは定めつ。なほ藏開卷のところにもいへることあり、考合すべし。

藤原君卷

この卷の年立は、大かたに俊蔭朝臣薨御のころよりとすべし。其ゆゑは、女一宮にまさよりの大將をなどこと

りたまへる時、三日の夜、たゞつねの左大臣、ちかげの右大臣のうた見えて、としかげの朝臣歸朝のころもこの大臣たちの時なればえ。卷の末の年は、なかたゞの侍從何歳ばかりのほどゝもしられねども、まさよりの大將の御女たちの齢(トシ)をもて、なかたゞの侍從廿歳の七月までと定めたり。

たゞこその卷

この卷もはじめは大かたにとしかげの朝臣の歸朝のころとすべし。すなはちたゞつねの大臣、ちかげの大臣のことあればなり。卷の末の年はなかたゞの侍從二歳の年とすべし。そのゆゑは、此卷の末にたゞこその山ごもりの事ありて、梅花笠卷、なかたゞの侍從廿一歳にあたりたる時に、たゞこその詞に、山ごもりより二十年になりぬるよし見えたり。

梅花笠卷

この卷はたゞこその卷につゞけてかき出しゝものと見えて、はじめに嵯峨院御讓位、朱雀院御卽位の事をいひて、年のへしよし見えたり。さてこの御讓位御卽位は、なかたゞの侍從二歳のころより十二歳までの間にあるべし。そのよしは、たゞこその卷は嵯峨院の御代にて、俊蔭卷に、なかたゞの侍從十二歳の時、さがの院の御事を院とあればなり。かくてこの梅花笠卷に、なかたゞの侍從廿一歳の二月、左大將殿の春日詣の事より三月までの事あり。これを廿一歳の時と定めたるよしは、吹上卷の上、同侍從廿一歳の時に、ゆきまさの少將の詞に、この春日詣の事を、一日春日にて云云といへること見え、また同卷の下、たゞこその詞にも、

この春日詣のことを、この春といへること見えたり。

さがの院卷

なかたゞの侍從廿一歳の八月より廿一歳の正月までにて、はじめにすまひのかへりあるじの事あれは、俊蔭卷につゞきたり。但、此卷に譌あり、菊宴卷の處にいふべし。

吹上卷上

この卷は紀伊國の源氏のことをいひて、はるかに前のことよりかきいだしたれど、源氏君（朝臣）すゞしの廿一とあるを、この卷の年立とすべし。すなはちなかたゞの侍從同齡なれば、同侍從廿一歳の二月より四月のことゝすべし　なかたゞの侍從、源氏君同齡なるよしは、田鶴群鳥卷にともに廿　とあり。

吹上卷下

なかたゞの中將廿一歳の八月より冬までのことなり。

祭使卷

この卷と吹上卷上と吹上卷下との間のことにて、なかたゞの中將廿一歳の四月より七月までのことなり。

菊宴卷

なかたゞの中將廿一歳の當月より廿二歳の秋までの事也。さて此卷に、春宮左大將にあて宮のことをのたまふことと、また當月左大將家の饗の事、あくる年正月嵯峨院の大后宮御賀の事ありて、全く嵯峨院卷にあり

しことゝ同じことなれば、この菊宴卷は幷としてさがの院卷同年、なかたゞの中將の廿歲より廿一歲のことゝすべけれど、さては吹上卷よりは前になりて、すゞしの中將のことなど見えたればたがふなり。但、吹上卷もさがの院卷同年として、此大后宮の御賀のありし前年のことゝなすべけれど、しかする時は、さがの院卷にこの中將のこと見えず。また御賀のありしおなじ正月、のり弓のかへりあるじに、なかよりの少將あて宮をかいまみのことありて、梅花笠卷に同少將、このゝり弓のをりのかいまみのゝち、やまひにしづみて、春日詣におきあがりしよし見えたれば、そのとしやがて吹上卷の、この少將たちの紀國へものして、この春日詣の事をいひし年となりて、この吹上卷は御賀のありし前かとおもへば後、のちかとおもへば前にて、いとも〳〵まぎらはしくなむ。そのうへこの菊宴卷と嵯峨院卷を同年とすれば、人々の年立こと〳〵にたがふなり。よりて常久按に、今の嵯峨院卷は實(マコト)のもとの卷にてはなく、もとは大后宮の御賀ならで、嵯峨院の六十の御賀のことをしるしたる卷のありつらむを、そははやくほろびうせて、こゝかしこわづかにのこれるに、後人のこの菊宴卷の異本などのありしをつゞり合せて、この今のさがの院卷とはなしつるなるべし。故(カレ)このさがの院卷のいと〳〵まぎらはしきなるべし。この物語すべて大かたに前後はあひたるさまなるを、このさがの院卷のあるによりて、これかれまぎらはしきことはいでくるなり。かの俊蔭卷なる八月すまひのかへりあるじの、なかたゞの侍從十九歲のことゝ見えたるに、さがの院卷にては廿歲の時とせざればあはざるなども、かゝるゆゑよりのことなるべし。さて實(マコト)の嵯峨院卷に、嵯峨院の六十の御賀の事ありつらむとおも

へるよしは、樓上卷下にこの院の御齢七十二とあるを道にかぞへ見れば、今のさがの院卷に賀の事見えたる年六十にあたれはえ。また大后宮の御齢は、この菊宴卷の賀の年よりかぞふれば、樓上卷下は七十一歳にて、七十あまりとあるにもたがはざるえ。さてかく今のさがの院卷はまぎらはしきことありて、この菊宴卷と全く同しきことはあれども、同年とすればことごとく年立のたがへれば、しばらくおのが說につきて、この菊宴卷とは同年ならずとして、吹上卷の前とはしたり。なほ後の人よく考てよ。

あて宮卷

なかたゞの中將廿二歳の十月より廿四歳までとすべし　同中將廿三歳の時、十月にあて宮一宮をうみたまふことありて、卷の終に、あくる年また二宮をうみたまふよし見えたれば、すなはちなかたゞの中將廿四歳までえ。但、このことは今の板本には脫て、菊花宴卷の末にいれたり。これは錯簡にて、一本にこのあて宮卷の終にあるぞよき。

初秋卷

同中將廿五歳の七八月のことゝすべし。但この卷のこと、前にありて、おのゝにいへり。

田鶴群鳥卷

なかたゞの中納言廿六歳の六月より八月までえ。さてこの中納言の歳、としかげの卷に十八とあるよりこの卷に廿六とあるまで、その間すべて歳をいへることなし。

藏開卷上

同中納言廿六歳の霜月より廿七歳の十月までゝ。

同　卷中

同中納言廿七歳の十月より十二月までゝ。

同　卷下

なかたゞの大將廿七歳の十二月より廿八歳の春までゝ。

國讓卷上

同大將廿八歳の春より四月までゝ。

同　卷中

同大將の廿八歳の四月よりその年の秋までゝ。

同　卷下

同大將廿八歳の秋より廿九歳の三月までゝ。

樓上卷上

この卷はまた以前(ハジメ)へたちもどりて、藏開卷下に見えたるなかたゞの大將の廿八歳の春、父大將とゝもに一條殿へおはせしほどのことよりかき出して、かの一條殿の西の一のたいにゐたまひし人のことをかきて、いぬ

宮來年七になりたまふまでといふわたりまでに中三年、すべて九年をへしことをこめしものなるべし。されば、これなかたゞの大將卅二歲のときぞ。いぬ宮は同大將の卅七歲の時生れたまひつれば六歲なり。かくて三月京極殿つくりたまふことありて、その年の八月京極殿へわたましのことまであり。

同　卷下

なかたゞの大將卅二歲、いぬ宮六歲の八月より、なかたゞの大將卅三歲、いぬ宮七歲の八月までなり。

人々の年立

俊蔭朝臣は、としかげの卷に、十六歲にて波斯國にいたりて、歸朝の時は卅九とあり。さて其國に三年のげうをおくるとあれば、三四年をへてのち內侍督はいできたりとして見れば、かくれぬる時は內侍督十五歲なれば、五十七歲ばかりなるべし。さて吹上卷下に、帝の御詞に、としかげかくれて三十年とあるは、たがへり。この時はなかたゞの大將廿一歲の時なれば、廿三四年ばかりになるぞ。三十年とあるは誤字か、或は作者の心せであやまてるなるべし。

內侍督は、俊蔭女に、としかげの朝臣かくれし時十五歲とあり。さてかねまさの大臣にあへる時はその年のことゝあるべけれど、うつほより三條殿へむかへられし時三十に少したらざるほどゝあれば、かねまさの大臣にあへる時は、としかげの朝臣かくれし時より一二年ばかりのちのことにて、十六七歲ばかりの時とす

べし。しかすれば、三條にへむかへられし時は卅八九歳ばかりにあたりたり。それにては、なかたゞの大將を生るは十七歳ばかりの時也。初秋卷の內侍督になりぬるときは四十一歳ばかりにあたれり、樓上卷下、八月十五日のときは四十九歳ばかりのほどなり。

かねまさの大臣は、としかげの卷に、わかこ君といひし時、十五歳ばかりとあり。內侍督とたかたゞの大將を、うつほよりむかへいでたまへるころ、廿七ばかりとあり。さて藤原君卷に三十ばかりとあるは、まさよりの大臣の御女たちの齡にあはすれば、卅三歳にあたりて、たがひたり。されどこれらは大かたにいへるにもあるべし。藏開卷中に四十二とあり、この時なかたゞの大將廿七歳の時なれば、よくあひたり。國讓卷上に任右大臣時は四十三歳也。樓上卷下の末は四十八歳にあたりたり。

女一宮は、田鶴群鳥卷に十七とあり。樓上卷下の末は廿四歳にあたりたり。

仁壽殿女御は、藤原君卷に卅一とあり、さて田鶴群鳥卷に廿五とあるはいたくたがひたり。こは決て誤字なるべし。藤原君卷よりかぞふれば卅九歳にあたれり。

まさよりの大臣は、藤原君卷に、十五歳より御子うみ給ふとあり。但、こは大宮の十五歳よりともきこえたれど、なほ大臣のことゝすべし。さて藏開卷に五十四とあり。こは藤原君卷に仁壽殿女御卅一とありて、御子の中のこのかみなれば、まさよりの大臣の十五歳の時の御子として、この女御の齡をもてかぞふれば、五十四とあるよくあひたり。國讓卷上、任左大臣は五十五歳の時也。樓上卷下の末は六十歳にあたりたり。

あて宮は、藤原君巻に十一と見えて、その後の巻々この宮の齢見えたることなし。東宮に参りたまふ時は十六歳にあたりたり。

あて宮の御はらの今上の御子、わか宮・弟宮は、ともにあて宮巻にて一年たがひに生れたまへり。さて田鶴群鳥巻に、わか宮ありきたまふ、弟宮はひたまふとありて、蔵開巻下に、わか宮五、弟宮四とありて、この御齢、年立にあはすれば一年たがへり。されど、こは初秋巻を一年に立ずして、田鶴群鳥巻の中間とするか、弟宮の生れたまふ年とする時は、この御齢よくあふなり。さはあれど、初秋巻を一年に立ずして、かくする時は、なかたゞの大将の齢をはじめ、おほくの人の齢一年づゝたがひきて、この初秋巻とにかくにいかにともさだめがたし。されどこの年立は、なかたゞの大将の齢をむねとしてものせる年立なれば、しばらく初秋巻を一年に立てゝ、同大将の齢をはじめ其外の人の齢をあはせて、この御子たちの御齢は、そよからずはあれど一年たがへおきたり。後人なほよく考へ定むべし。さてこのわか宮、国譲巻下にて東宮にゐたまへり。蔵開巻に御齢五とある、なほ同年のことなり。

まさよりの大臣の御女、二君、藤原君巻に十九とありて、その末の春日に廿二とあり。こはそこなるはらからの御女たちの齢にあはせ見れば、はじめのところよりは二年の後なれば、廿二とあるはたがへり、廿一の寫誤なるべし。

同大臣の御女、十君すこ宮、藤原君巻に十一とあり。さて田鶴群鳥巻に同大臣の御女たちのことをいへる處

にては、次第一づゝたがひて、同卷に十君といへるは、このちご宮のことにてはなく、藤原君卷にて十一君といへるなり。この次第にて見れば、田鶴群鳥卷にさま宮といへるにあたりたり。このきみ、すゞしの中納言をむこどりの處に十四とあり。但、この齡たがひて、はらからの御女たちの齡にあはすれば十九歲之。十四とあるは誤字なるか。　また按に、このさま宮、ちご宮とは別人にて、藤原君卷にはもれたるにもあらむか。されど、しかする時は、後の卷々にはらからの御女たちのことは見えたるに、このちご宮のことのみ見えぬはいかゞ之。なほちご宮さま宮同人なるか。

同大臣の御女、十三君そで宮、十四君けす宮、藤原君卷に、そで宮八、けす宮七とあり。さて田鶴群鳥卷にては、前にもいへるごとく、この御女たちの次第、一づゝたがひて、そで宮を十二君、けす宮を十三君といへり。齡は十二君十六、十三君十五とあり。

新中納言の御女そで君、菊宴卷に十四とありて、國讓卷中に、十七ばかりと見えたり。これたがひて廿歲にあたれり。こは誤字か、作者の心せであやまてるなるべし。

すゑふさの大辨は、祭使卷に卅一とありて、田鶴群鳥卷に四十とあるはたがひたり。但、玉琴に、祭使卷に卅五とあるよしいへるは、さる一本のあらば、それにては、田鶴群鳥卷に四十とある、よくあひたり。

物語の中齟齬たること

俊蔭卷、なかたゞの大將のわらはなる時のことをいへる處に、この子五になる年の秋つかた云云と見えたるつぎに、かゝるほどにとしかへりぬ云云とありて、さて山のうつほにこもりたることなどあるを見れば、こは六歳のことゝきこえたるを、その後に父大將のこのうつほへおはせし時のなかたゞの大將の詞に、この山にまかりこもりにしことゝ五歳よりなり云云と見え、また内侍督の詞に、この山にすむことゝ八年になりぬ云云と見えて、かねまさの大將の詞にも、この人も年をかぞふるに十二ばかりにこそなるらめ云云とあるを見れば、今も山にこもりしは五歳の冬のことにて、このうつほより出る時は十二歳のことなるを、はじめに六歳になる年の秋つかた云云とあるつぎに、としかへりぬとあるはたがひたり。

俊蔭卷に、としかげの朝臣の波斯國よりもてわたりし琴どもをかた〴〵に奉れる處に、かたち風をば左大臣たゞつねにたてまつる、をりめ風をば右大臣ちかげにたてまつる云云とあるを、たゞこその卷に、ちかげの大臣の御子なるたゞこその心におもへることをいへる處に、としころひきあそびつるみやこ風を父のかずなりたることゝおもひ云云とあるは、くひちがひたり。みやこ風は東宮女御に奉れるよし見えて、この琴はをりめ風たらではたがへり。またたゞこその卷に、たゞつねの大臣の北方一條殿のまづしくなりたまへることをいへる處に、とのにのこりたるものなし、かのとしかげのぬしの作りたまへりけるきむのみなむのこりたりける、それもさこの時の大將（すさよりの大將なり）に万ごくにうりつかひけるとありて、梅花笠卷、春日詣の處に、あて宮、かの一族どのさや、かはれたるみやこ風といふ琴を、ごかのこゑにしらべて、こゝのめやたと

いふてをりかへしあそばす云云とある、こもくひちがひたり。この琴はかたち風ならではあはず、みやこ風ははじめにいへるごとく東宮女御に奉れる琴なり。

梅花笠卷に、なかよりの少將のことをいへる處に、このゝり弓のみあるじにかいまみてのちは、ふししづみやまひになりてありしを、とのゝ春日詣にからうじておきあがりたりしに云云と見えたるを、さがの院卷には、このかいまみの後ふししづみゐたりしに、まさよりの大將のめしにて、嵯峨院の御賀にたちいでしよし見えたるは、こもくひちがひたり。

吹上卷上に、なかよりの少將、ゆきまさの少將など、なかたゞの侍從とゝもに、二月廿九日より紀國へものして、かの國にて三月花盛のほどはすぐしゝことと見えて、この年はゆきまさの少將のかの國にて春日詣のことをいへる詞にて、梅花笠卷同年なることはしるきを、梅花笠卷に、二月春日詣の後、三月花盛のころ、なかよりの少將、內の御使に、ゆきまさの少將と同車にて、かねまさの大將のかつらの家にゆきしことと見えたるは、吹上卷とくひちがひたり。なほ此外にも卷とくはしく考へなば、くひちがひあるべし、こは一つ二つをいへるなり。これらは作者の心せでふとあやまてるものなるべし。

卷の次第(ツイデ)のさだ

ある一本に、初秋卷を田鶴群鳥卷の後に次第(ツイデ)たり。また田中道麻呂は初秋卷を田鶴群鳥卷の前としたり。こ

巖軒藏板

後　記

宇津保物語の校訂の仕事を始めてから、今年で七年目になる。確か昭和三年の夏の休みに、最初の俊蔭の卷の校訂に着手したのであるから、今年で、あしかけ六年もたつたわけである。此の長い間、私は、此の宇津保物語の校訂の事は、常に念頭から離れる時がなく、重荷のやうに、私の頭にこびりついてゐた。これを、今漸く果して、私は、ほつとした。極めて不完全な作業であつたが、これは寧ろ私自身に取つて、實に貴い體驗となり勉強となつた。初、此の大きい物語を、とにかく校訂してゆくと云ふ事は、私に取つて、可成り困難な仕事であると思つたが、その頃は、今程多忙でもなく、それに校訂の方針は、極めて單純で小規模なのであるから、直ぐ出來上るやうな積りで、此の仕事をやり始めたのであつた。併し、その後、次第に身邊は多忙を加へて、私の專門とする研究からは、少し離れた此の仕事に、沒頭する時間を多く與へられないやうになつて來たのである。その爲めに、斷續的に、追ひたてられるやうにして、ぽつ〳〵と、此の物語の校訂を續けたので、到頭長い年月をかけて、滿足らぬ結果しか生まれなくなつた。さうして、此の物語の始めに、此の全卷の刊行ものび〳〵となつて、編輯者の正宗氏にも、發行所の長島氏にも、まことに御迷惑をおかけした。今最後の原本の分として、此の校訂を仕上げるに當り、あつく、正宗氏、長島氏、及び多くの讀者諸氏におわびする次第である。

併し、此の全集の完成が押し迫つてゐた爲め、私の豫定してゐた、小論を付ける事が出來なくなつたのは、私に取つて大變遺憾な事である。此の校訂の仕事を進めながら、思ひよつた箇所、參考に資する材料等は、書きとめておき、小論文作製の準備をととのへてゐたのである。さうして、三四十頁の小論を書き上げて、聊か自分の意見を開陳したい心組であつたが、今、どうしてもそれを執筆する時日を與へられないので、甚だ不本意ながら、これを割愛して、他日の機會をまたなければならなくなつた。併し、私は、その代りに、宇都保物語考、及び、宇都保物語年立を附錄として添へて、讀者の利便に供したのであるから、あへて、今新しく自分の愚意を添加する程の必要もないかも知れない。加ふるに、此の全集は、近く再版して、再び鴻湖に募集を開始するさうである。さうして、その時には、私の小論も亦世の識者に見て頂く光榮を得る機會もあるやうに思はれる。それまでには、私も、もつと研究を積んで、間に合せの小論ではなく、もう少し立派な論文を書き上げて附錄に付け加へたいと思つてゐる。

私は、此の校訂本の第二册第三册の卷頭に付した凡例に關して、なほ一二付け加へておきたい事がある。本書の底本に朱青黑の校異があるのは、あて宮の卷までである事は、第三卷の凡例に於て述べた通りである。所が、初秋の卷以下は、殆ど全部、校異は青字で記され、稀に黑字の書入があるだけである。それがまた、藏開の中の卷以下は、反對に、書入は殆ど黑字で記されて、稀に青字の書入があるのみとなつてゐる。然るにまた〲、此の書入の特徴は變つて、國讓の中の卷以下には、黑字の書入の他には、極く少數の朱な

の書入が、たまに存するだけである。かやうな變化があるので、最初私は、校異の文字の色の相違によつて、その校異に用ひた、他の諸本の別をも區別しようとしたのであるが、少くとも、此の校異本の後半に於ては、必ずしも、文字の色の相違が、その諸本の別を徹頭徹尾示してゐるものとは云へないやうな節が存するのである。前半の朱青黑の三色の書入に於て、絶對多數を示してゐるのは、青字であつて、朱黑の書入は、少數である。もし此の比例をもつて云へば、青字の書入が、全體を通じて絶對多數であるべき筈である。それで、青字の書入の爲めに用ひられた本が、此の物語の全卷の校訂上には、最も有力なる本となつてゐると云ふ事が出來る。かく考へる時、藏開の中の卷以下の黑字の書入は、それ以前の青字の書入と、同じ本に屬するものではなからうかと考へられるのである。次に又、國讓の卷以下の黑字の書入は、それ以前の青字の書入に連續するものであらう。さうすれば、藏開の中の卷以下の青字の書入は、それ以前の黑字の書入に當るもので、これと本の性質を同じくしてゐるのであらう。故に、藏開の中の卷以下では、恐らく校異本の校訂者の不注意で、青黑が反對に記された結果になつたものであらうと思はれる。次に、國讓中の卷以下は、青字が影を消して、朱字の書入が存するのである。此の場合、此の朱字の書入は、それ以前の青字の書入に連續するものとして、同一性質の本より出てゐると思はざるを得ない。かくして、國讓中の卷以下の朱字書入は、それ以前の青字の書入、更に、藏開の上の卷以前の黑字書入を受けついだものとして、あて宮の卷以前に存する、朱字書入とは、違つた性質のものと考へるのである。

本書の校訂に用ひた、玉松、及び有朋堂文庫本は、甚だ本文校訂が行き屆いてゐて、よく文章が理解せられるやうであるが、そこに可成り不審をさし挿む餘地が存するやうに思はれる。即ち、その校異の中には、校訂者が私意をもつて、文章を改めて、故意に、文章の意味をよく通るやうにしたものであり、さう云ふ文章をもつ本は、宇都保物語の諸本の中には、存しないのではないかと思はれる點もあるのである。今、詳細に例示する事はさけるが、此の點は、讀者の大いに注意して貰ひたい點であつて、讀解の容易と云ふ事が、必ずしも、その底本の價値を示すものではない事を知つて頂きたいのである。

本書の校異には、底本の校異、玉松の校異、有朋堂文庫本の考異等は、全部收載したので、此の三本と等しい校異の分量を、本書は包容してゐるのである。かう云ふ方針であつたから、玉松の校異の中には、必ずしも、刊本の文字を誤字とする必要なく、少し同情をもつて讀めば、正しく讀める文字をも、玉松では他本によつて訂正して掲げたものがあつて、それらは敢へて省略してもよかつたのであるが、右の方針の爲めに、わざ／＼底本なる刊本の文字を誤として、校異を付したやうな箇所も存する。又、動詞の語尾を送つたやうな場合にも、敢へて校異を記す必要がない時にも、矢張り、底本の校異や、玉松の校異を全部收める方針のもとに、わざ／＼校異を書入れた場合もある。これらは、時として、校訂の方針の統一しないかのやうに見える場合もあるから、特に注意しておくのである。

帝國圖書館所藏の寫本の一本には、丁度、此の底本の校異に用ひられた、靑字の部分と一致する文章を持

つものがある。もし、此の校訂本を嚴密に學術的にするならば、さう云ふ、傳寫本に當つて、一々校異を加へてゆく事が必要である。まして、人間の注意力は限りがあるのである。此の長篇の作品を校合してゆく途中で、脱漏や間違ひが生じるかも知れないし、また、此の底本の如き、その校異を更に轉寫したものの如きに至つては、一層誤謬が起り易い事は云ふまでもない。しかも、此の長篇の作品の校訂は、大作業であつて、その多くの問題を内藏し、錯綜錯雜せる點に至つては、或は、平安朝作品中の第一ではないかと思はれる。故に、これを片手間に、限られた時間内に、やりとげると云ふ事は到底不可能な事である。私は、本書の校訂の仕事によつて多くの教訓を得た。さうして、此の物語の研究に、謎を解くが如き、多くの興味の存する事を知つた。私は、多大の面白味を感じて、新に、此の物語の研究に進まうかとも思つてゐる。さうして、諸本の校訂の仕事に關しても、もう少し、諸本によつて本格的な研究に進みたく思ひ、更に、註釋的研究、或はその他の問題に關しても考へて見たいと思ふ。併し、これらは一切他日を期して、今まで集めた若干の材料をも、篋底に藏したまゝ、小論をも草する暇なくして、一先づ、此の仕事の一段落をつげなければならない。更に、再版の機に、小論を發表する事と致したい。

終に、本書の校訂の途上、種々激勵や注意を賜つた、森本治吉、高崎兩君の好意を深謝致したい。

昭和八年五月六日

藤田德太郎識

昭和八年五月十五日印刷　日本古典全集
昭和八年五月二十日發行　第三期【非賣品】

うつほ物語　第五

編纂者　正宗敦夫

發行者　東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
代表社員　長島東一

裝幀者　廣川松五郎

印刷者　東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
不二製版印刷所
高瀨清吉

發行所　東京市豊島區長崎東町三丁目一六二
合資會社　日本古典全集刊行會
振替東京七三〇二二